

# 天ア森遺跡

鹿角市文化財調査資料 26

# 天戸森遺跡

発掘調査報告書

1984-3

秋田県鹿角市教育委員会

新竹縣政府

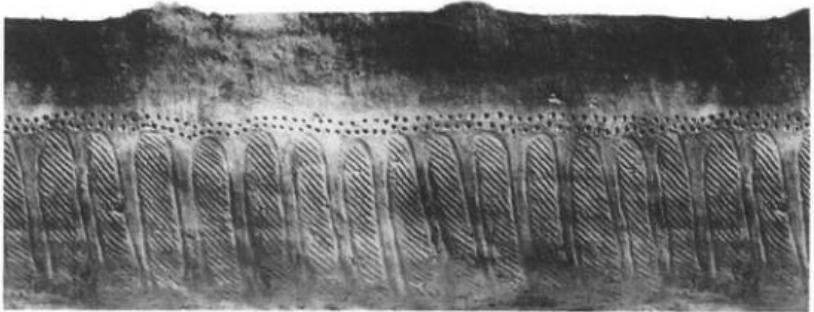
# 天子森立

新竹縣政府

E-4891

題字 鹿角市長 阿部 新

新竹縣政府



天戸森遺跡出土土器展開写真



## 序

天戸森遺跡は、花輪地区の東側段丘から北西方向に突き出した舌状台地先端部に位置し、古くから地元住民に知られた遺跡であります。

昭和56年、この天戸森遺跡の所在する陳場地区が花輪第一中学校建設の候補地の一つとなったことにより、市教育委員会では文化財保護の立場からただちに分布調査を実施し、同年8月同地への移転改築が決定したことから、翌57年には、破壊を免れ得ない部分の本調査を行なったのであります。

この結果、270以上の遺構の検出と195箱の遺物の出土等、膨大な考古資料を得たのであります。

この報告書が、研究者のみならず広く一般の方々にも活用され埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

最後に、この調査に御指導、御協力いただきました関係各位に感謝するとともに、今後の御指導、御協力をお願い申し上げます。

昭和59年3月31日

鹿角市教育委員会

教育長 柳澤源一

## 例 言

1. 本報告書は秋田県鹿角市花輪字陳場142他に所在する天戸森遺跡の発掘調査報告書である。  
2. 遺跡については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。  
3. 本報告書の執筆は調査員、補助員が分担し、文責は各々の文末に明記してある。  
4. 第Ⅰ章3と石器の石質鑑定は、十和田高等学校 錦田健一氏に執筆、鑑定をお願いした。  
5. 付1、カーボン測定は、日本アイソトープ協会に依頼し、その結果に加筆した。  
6. 付2、リン分析は、秋田県立農業試験場に依頼し、その結果に加筆した。  
7. 付3、植物遺体については、尾去沢中学校 成田典彦氏に執筆をお願いした。  
8. 土器展開写真は、小川忠博氏の協力を得た。  
9. 遺物の実測・採拓・トレースは、調査員の指示のもとに補助員があたった。  
10. 土層及び遺物の色調の記載には「新版 標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。  
11. 本報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25000を使用した。  
12. 本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略している場合もある。なお、図版・表などで下記のような記号・スクリントーンを用いた。

S D	溝状遺構	S I	竪穴住居跡（縄文時代）	S K	土壤
S T	竪穴住居跡（歴史時代）	P	土器	S	石器・石
配石	配石遺構	屋	屋外炉	埋	埋設土器

 地山       燃土       炭化物       貼床

13. 本報告書に使用した図版のスケールについては各々に示した。なお、P L図版は任意のスケールとした。
14. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）
- 村越 潔（弘前大学教授） 鈴木克彦（青森県立郷土館） 成田滋彦（青森県埋蔵文化財センター） 昆野 靖（岩手県教育庁文化課） 藤沼邦彦（宮城県教育庁文化財保護課） 永瀬福男 大野憲司 桜田 隆（秋田県埋蔵文化財センター）
- 同校への通学路建設に伴う天戸森D区（陳場）遺跡発掘調査の結果を章末に付記した。

# 本文目次

## 序

例　　言

本文目次

図版目次

表　　目次

P L 目次

第Ⅰ章　遺跡の環境	1
1. 遺跡の位置と現況	1
2. 周辺の遺跡	2
3. 遺跡付近の地形・地質	6
4. 発掘地点の地質	8
5. 遺跡の層序	9
第Ⅱ章　調査の概要	10
1. 調査に至るまでの経過	10
2. 調査の要項	11
3. 調査の方法	12
4. 調査の経過	13
第Ⅲ章　縄文時代の検出遺構と出土遺物	17
1. 穴居跡とその出土遺物	17
2. 屋外炉	312
3. 埋設土器遺構	314
4. 配石遺構	315
5. 土壙	335
第Ⅳ章　歴史時代の検出遺構	366
1. 穴居跡	366
2. 溝状遺構	371

## 目次

第V章 分析と考察 .....	375
1. 繩文時代 .....	375
1) 坪穴住居跡 .....	375
2) 配石遺構 .....	372
3) 土 壤 .....	395
4) 繩文土器 .....	397
5) 石 器 .....	421
6) 土製品・石製品 .....	440
2. 歴史時代 .....	452
1) 坪穴住居跡 .....	452
2) 土師器・須恵器 .....	454
第VI章 まとめ .....	457
付	
1. カーボン測定 .....	459
2. リン分析 .....	460
3. 植物遺体について .....	460
天戸森遺跡D区発掘調査報告 .....	463

# 図 版 目 次

第 1 図 天戸森森林の位置と周辺の道路	1	第 64 図 第21 A 号住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	69
第 2 図 天戸森森林付近地図	4	第 65 図 第21 B 号住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	69
第 3 図 発掘区とグリッド配置図	5	第 66 国 第22号整六住居跡出土上石器未測図	71
第 4 図 柱状図	7	第 67 国 第22号住居跡出土上石器未測図	71
第 5 国 基本層序図	9	第 68 国 第22号住居跡出土上石器未測図	71
第 6 国 進標本実測図(A)	15	第 69 国 第22号住居跡出土上石器未測図	71
第 7 国 進標本実測図(B・C)	16	第 70 国 第23号住居跡出土上石器未測図	73
第 8 国 第1号竪穴住居跡実測図	17	第 71 国 第23号住居跡出土上石器未測図	73
第 9 国 第1号竪穴住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	18	第 72 国 第23号住居跡出土上石器未測図	73
第 10 国 第2号竪穴住居跡実測図	21	第 73 国 第23号住居跡出土上石器未測図	73
第 11 国 第2号竪穴住居跡出土上石器拓影図	21	第 74 国 第24号整六住居跡出土上石器未測図	75
第 12 国 第3号竪穴住居跡実測図	23	第 75 国 第24号住居跡出土上石器未測図	75
第 13 国 第4号竪穴住居跡実測図	23	第 76 国 第24号住居跡出土上石器未測図	75
第 14 国 第3号住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	23	第 77 国 第24号住居跡出土上石器未測図	76
第 15 国 第4号竪穴住居跡出土上石器未測図	23	第 78 国 第25号整六住居跡出土上石器未測図	78
第 16 国 第5 A・B号竪穴住居跡実測図	25	第 79 国 第25号住居跡出土上石器未測図	79
第 17 国 第5 A号住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	25	第 80 国 第25号住居跡出土上石器未測図	79
第 18 国 第5 B号住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	26	第 81 国 第25号住居跡出土上石器未測図	80
第 19 国 第6号竪穴住居跡実測図・同住居跡未測図	28	第 82 国 第26号整六住居跡出土上石器未測図	82
第 20 国 第6号住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	29	第 83 国 第26号住居跡出土上石器未測図	82
第 21 国 第7 A号竪穴住居跡実測図	32	第 84 国 第27号整六住居跡出土上石器未測図	84
第 22 国 第7号住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	32	第 85 国 第27号住居跡出土上石器未測図	84
第 23 国 第8号住居跡出土上石器拓影図・石器未測図	33	第 86 国 第27号住居跡出土上石器未測図	84
第 24 国 第9号住居跡出土上石器未測図	35	第 87 国 第27号住居跡出土上石器未測図	85
第 25 国 第9号アーチ炉跡微細図	35	第 88 国 第28号整六住居跡出土上石器未測図	87
第 26 国 第9号住居跡出土上石器未測図(1)	35	第 89 国 第28号住居跡出土上石器未測図	87
第 27 国 第9号住居跡出土上石器未測図	36	第 90 国 第28号住居跡出土上石器未測図	87
第 28 国 第9号住居跡出土上石器未測図(2)	37	第 91 国 第29号住居跡出土上石器未測図	88
第 29 国 第10号住居跡出土上石器未測図	40	第 92 国 第29号整六住居跡出土上石器未測図	89
第 30 国 第10号住居跡出土上石器未測図	40	第 93 国 第29号住居跡出土上石器未測図	90
第 31 国 第11号住居跡出土上石器未測図	40	第 94 国 第29号整六住居跡出土上石器未測図・同住居跡未測図	92
第 32 国 第11号住居跡出土上石器未測図	40	第 95 国 第29号住居跡出土上石器未測図	92
第 33 国 第16号住居跡出土上石器未測図	41	第 96 国 第29号住居跡出土上石器未測図	93
第 34 国 第11号住居跡出土上石器未測図	41	第 97 国 第29号住居跡出土上石器未測図	94
第 35 国 第12号住居跡出土上石器未測図	43	第 98 国 第29号住居跡出土上石器未測図	94
第 36 国 第12号住居跡出土上石器未測図(1)	43	第 99 国 第31号整六住居跡出土上石器未測図	96
第 37 国 第12号住居跡出土上石器未測図(2)	44	第 100 国 第31号住居跡出土上石器未測図	96
第 38 国 第13・14号竪穴住居跡実測図	47	第 101 国 第31号住居跡出土上石器未測図	96
第 39 国 第13号住居跡出土上石器未測図	48	第 102 国 第32・36号整六住居跡出土上石器未測図	98
第 40 国 第14号住居跡出土上石器未測図	50	第 103 国 第32号住居跡出土上石器未測図	98
第 41 国 第14号住居跡出土上石器未測図(1)	50	第 104 国 第36号住居跡出土上石器未測図	98
第 42 国 第14号住居跡出土上石器未測図(2)	51	第 105 国 第36号住居跡出土上石器未測図	99
第 43 国 第15号竪穴住居跡実測図	52	第 106 国 第33・38号整六住居跡出土上石器未測図	101
第 44 国 第15号住居跡出土上石器未測図	52	第 107 国 第38号住居跡出土上石器未測図	101
第 45 国 第15号住居跡出土上石器未測図	52	第 108 国 第33・38号住居跡出土上石器未測図	101
第 46 国 第16号竪穴住居跡出土上石器未測図	54	第 109 国 第32号住居跡出土上石器未測図	102
第 47 国 第16号住居跡出土上石器未測図	55	第 110 国 第38号住居跡出土上石器未測図	102
第 48 国 第16号住居跡出土上石器未測図	55	第 111 国 第38号住居跡出土上石器未測図	103
第 49 国 第17 A・17 B・18号竪穴住居跡実測図	55	第 112 国 第34号整六住居跡出土上石器未測図	104
第 50 国 第17 B号住居跡出土上石器未測図	60	第 113 国 第34号住居跡出土上石器未測図	104
第 51 国 第18号住居跡微細図	60	第 114 国 第34号住居跡出土上石器未測図	104
第 52 国 第17 A号住居跡出土上石器未測図	60	第 115 国 第34号住居跡出土上石器未測図	105
第 53 国 第17 B号住居跡出土上石器未測図	60	第 116 国 第37号整六住居跡出土上石器未測図	108
第 54 国 第17 A号住居跡出土上石器未測図	61	第 117 国 第37号住居跡出土上石器未測図	108
第 55 国 第17 B号住居跡出土上石器未測図	61	第 118 国 第40号整六住居跡出土上石器未測図	111
第 56 国 第18号住居跡出土上石器未測図	63	第 119 国 第40号住居跡出土上石器未測図	111
第 57 国 第19号アーチ炉跡微細図	64	第 120 国 第40号住居跡出土上石器未測図(1)	111
第 58 国 第19号アーチ炉跡微細図	64	第 121 国 第40号住居跡出土上石器未測図	112
第 59 国 第19号住居跡出土上石器未測図	64	第 122 国 第40号住居跡出土上石器未測図(2)	113
第 60 国 第19号住居跡出土上石器未測図	65	第 123 国 第41・55号住居跡出土上石器未測図	115
第 61 国 第20号整六住居跡実測図	67	第 124 国 第41号住居跡出土上石器未測図	115
第 62 国 第20号住居跡出土上石器未測図	67	第 125 国 第50号住居跡出土上石器未測図	116
第 63 国 第21 A・21 B号整六住居跡実測図	67	第 126 国 第42 A号整六住居跡未測図	118

第127回	第42A 号住居跡土石器痕跡	119	第190回	第62C 分住新跡出土石器痕跡	172
第128回	第42A 号住居跡出土上土器痕跡(1)	120	第190回	第62E - F 分住新跡出土器痕跡	175
第129回	第42A 号住居跡出土石器痕跡(2)	121	第190回	第62F 分住新跡出土器痕跡	175
第130回	第42A 分住居跡出土石器痕跡(1)	121	第190回	第63分住新跡出土石器痕跡	175
第131回	第42A 分住居跡出土石器痕跡(2)	122	第190回	第63分住新跡出土土器痕跡	176
第132回	第42A 分住居跡出土石器痕跡(3)	123	第200回	第62A - F 号住居跡出土石器痕跡	176
第133回	第42B - E号雙穴住居跡痕跡	123	第201回	第63号住居跡出土土器痕跡	176
第134回	第64号住居跡出土土器痕跡	124	第202回	第65号雙穴住居跡痕跡	180
第135回	第43号雙穴住居跡痕跡	126	第203回	第65号住居跡痕跡	180
第136回	第43号住居跡痕跡	127	第204回	第65号住居跡出土石器痕跡	180
第137回	第43号住居跡出土土器痕跡	127	第205回	第65号住居跡出土土器痕跡	181
第138回	第44号雙穴住居跡痕跡	129	第206回	第66号雙穴住居跡痕跡	182
第139回	第44号住居跡出土土器痕跡	129	第207回	第66号住居跡出土土器痕跡	182
第140回	第45号雙穴住居跡痕跡	131	第208回	第67号雙穴住居跡痕跡	184
第141回	第45号住居跡痕跡	131	第209回	第67号住居跡痕跡	184
第142回	第45号住居跡出土石器痕跡(1)	133	第210回	第67号住居跡出土土器痕跡	184
第143回	第45号住居跡出土石器痕跡(2)	133	第211回	第68号雙穴住居跡痕跡	186
第144回	第45 - 48号住居跡出土土器痕跡	134	第212回	第69号雙穴住居跡痕跡	186
第145回	第46号雙穴住居跡痕跡	136	第213回	第69号住居跡出土土器痕跡	187
第146回	第46号住居跡出土石器痕跡	136	第214回	第69号住居跡出土土器痕跡	188
第147回	第46号住居跡出土土器痕跡	136	第215回	第70号雙穴住居跡痕跡	190
第148回	第47号雙穴住居跡痕跡	136	第216回	第70号住居跡出土土器痕跡	190
第149回	第47号住居跡出土石器痕跡	138	第217回	第71A - B号雙穴住居跡痕跡	192
第150回	第47号住居跡出土上土器痕跡	139	第218回	第71A - C号住居跡出土石器痕跡	193
第151回	第48号雙穴住居跡痕跡	141	第219回	第71B号住居跡痕跡	193
第152回	第48号住居跡出土石器痕跡	141	第220回	第71A - D号住居跡出土石器痕跡	193
第153回	第49号雙穴住居跡痕跡	141	第221回	第71A - B号住居跡出土土器痕跡	194
第154回	第49号住居跡痕跡	141	第222回	第71A - C号住居跡出土石器痕跡	195
第155回	第49号住居跡出土土器痕跡	141	第223回	第71A - C号住居跡出土土器痕跡	195
第156回	第50号雙穴住居跡痕跡	143	第224回	第72号雙穴住居跡痕跡	199
第157回	第50号住居跡出土土器痕跡	143	第225回	第72号住居跡痕跡	199
第158回	第51号雙穴住居跡痕跡	143	第226回	第72号住居跡出土土器痕跡(1)	199
第159回	第51号住居跡出土土器痕跡	143	第227回	第72号住居跡出土土器痕跡(2)	200
第160回	第52号雙穴住居跡痕跡	147	第228回	第73 - 74号雙穴住居跡痕跡	202
第161回	第52号住居跡出土土器痕跡	147	第229回	第73号住居跡出土土器痕跡	203
第162回	第53号雙穴住居跡痕跡	147	第230回	第74号住居跡出土土器痕跡	203
第163回	第53号住居跡痕跡	147	第231回	第75 - 81号雙穴住居跡痕跡	204
第164回	第53号住居跡出土土器痕跡	148	第232回	第76号雙穴住居跡痕跡	204
第165回	第54号雙穴住居跡痕跡	150	第233回	第76号住居跡出土土器痕跡	204
第166回	第54号住居跡痕跡	150	第234回	第76号住居跡出土土器痕跡	205
第167回	第54号住居跡出土石器痕跡	150	第235回	第78号住居跡出土土器痕跡	205
第168回	第54号住居跡出土土器痕跡	151	第236回	第77号雙穴住居跡痕跡	207
第169回	第55号雙穴住居跡痕跡	151	第237回	第77号住居跡出土土器痕跡	208
第170回	第56号住居跡出土土器痕跡	153	第238回	第78A - 78B号雙穴住居跡痕跡	210
第171回	第57号雙穴住居跡出土土器痕跡	153	第239回	第78A号住居跡痕跡	210
第172回	第57号住居跡出土土器痕跡(1)	153	第240回	第78B号住居跡出土土器痕跡(1)	210
第173回	第57号住居跡出土土器痕跡(2)	154	第241回	第78A号住居跡出土土器痕跡(2)	211
第174回	第58号雙穴住居跡痕跡	155	第242回	第79号雙穴住居跡痕跡	213
第175回	第58号住居跡痕跡	155	第243回	第79号住居跡出土土器痕跡	213
第176回	第58号住居跡出土石器痕跡	155	第244回	第80号雙穴住居跡痕跡	215
第177回	第58号住居跡出土土器痕跡	157	第245回	第80号住居跡出土土器痕跡	215
第178回	第58号住居跡出土石器痕跡(2)	158	第246回	第82号雙穴住居跡痕跡	218
第179回	第59号雙穴住居跡痕跡	160	第247回	第82号住居跡出土土器痕跡	218
第180回	第59号住居跡出土土器痕跡	160	第248回	第82号住居跡出土土器痕跡	220
第181回	第59号住居跡出土土石器痕跡	160	第249回	第83号雙穴住居跡痕跡	220
第182回	第60号雙穴住居跡痕跡	163	第250回	第83号住居跡出土土器痕跡	220
第183回	第60号住居跡痕跡	163	第251回	第85号住居跡出土土器痕跡	221
第184回	第60号住居跡出土土器痕跡	163	第252回	第85号住居跡出土土器痕跡	221
第185回	第60号住居跡出土土器痕跡	164	第253回	第84号雙穴住居跡痕跡	222
第186回	第61号雙穴住居跡痕跡	166	第254回	第84号住居跡痕跡	222
第187回	第61号住居跡痕跡	166	第255回	第84号住居跡出土土器痕跡	222
第188回	第61号住居跡出土土器痕跡	166	第256回	第85号住居跡出土土器痕跡	225
第189回	第62A B号雙穴住居跡痕跡	168	第257回	第85号住居跡出土土器痕跡	226
第190回	第62A B号住居跡痕跡	168	第258回	第85号住居跡出土土器痕跡(1)	226
第191回	第62A B号住居跡出土土器痕跡	169	第259回	第85号住居跡出土土器痕跡(1)	226
第192回	第62A B号住居跡出土土器痕跡	170	第260回	第85号住居跡出土土器痕跡(2)	227
第193回	第62C - 62D号雙穴住居跡痕跡	172	第261回	第86号雙穴住居跡痕跡	229
第194回	第62C - 62D号住居跡出土土器痕跡	172			

第262回	第86号住居跡跡痕跡	229	第330回	第113号住居跡出土石器実測図	296
第263回	第86号住居跡出土石器実測図(1)	229	第331回	第114号雙六住居跡実測図	298
第264回	第86号住居跡出土石器実測図(1)	230	第332回	第114号住居跡出土石器実測図	299
第265回	第86号住居跡出土石器実測図(2)	231	第333回	第115号雙六住居跡実測図	300
第266回	第47号雙六住居跡跡痕跡	232	第334回	第115号住居跡出土石器実測図	302
第267回	第47号住居跡跡痕跡	233	第335回	第116号雙六住居跡実測図	302
第268回	第47号住居跡出土石器実測図	233	第336回	第116号住居跡出土石器実測図	303
第269回	第47号住居跡出土石器実測図(1)	235	第337回	第117号-118号雙六住居跡跡痕跡-住居跡跡痕跡	305
第270回	第47号住居跡出土石器実測図(2)	236		第117号住居跡出土石器実測図	305
第271回	第86号-88号-雙六住居跡實測圖	238	第338回	第119号雙六住居跡實測圖	307
第272回	第86号-88号-住居跡出土石器實測圖	239	第339回	第120号-121号雙六住居跡-石器實測圖	309
第273回	第86号-90号-雙六住居跡實測圖	241	第340回	第120号住居跡出土石器實測圖	309
第274回	第90号-95号-住居跡實測圖	241	第341回	第122号雙六住居跡實測圖	309
第275回	第86号-95号-住居跡出土石器實測圖	241	第342回	第123号住居跡出土石器實測圖	310
第276回	第91号雙六住居跡實測圖	241	第343回	第122号住居跡出土石器實測圖	310
第277回	第89号-95号-住居跡出土石器實測圖	242	第344回	第123号住居跡出土石器實測圖	311
第278回	第90号-95号-住居跡出土石器實測圖	242	第345回	第123号住居跡出土石器實測圖	311
第279回	第91号-95号-住居跡出土石器實測圖	244	第346回	第1-5号-6号-外4号-1号-2号-堆疊出土石器實測圖	313
第280回	第92-93号-雙六住居跡實測圖	246	第347回	第1-2号-堆疊出土石器實測圖	314
第281回	第94号-95号-雙六住居跡實測圖	246	第348回	通鑑北編-存在する配石遺構配置圖	316
第282回	第94号-95号-住居跡出土石器實測圖	246	第349回	第1号配石遺構實測圖	317
第283回	第92号-95号-住居跡出土石器實測圖	247	第350回	第2-3-4号配石遺構實測圖	318
第284回	第93号-95号-住居跡出土石器實測圖	247	第351回	第5-6-7号配石遺構實測圖	319
第285回	第95号-雙六住居跡實測圖	250	第352回	第8-9-10号配石遺構實測圖	322
第286回	第96号-住居跡出土石器實測圖	250	第353回	第11-15号配石遺構實測圖	325
第287回	第96号-98号-雙六住居跡實測圖	252	第354回	第16-20号配石遺構實測圖	328
第288回	第96号-98号-住居跡出土石器實測圖	252	第355回	第21号配石遺構實測圖	329
第289回	第97A-97B-雙六住居跡實測圖	254	第356回	第1-2号-分塊出土石器實測圖(1)	330
第290回	第98号-雙六住居跡實測圖	254	第367回	第1-2-4-5号配石遺構出土石器實測圖(2)	331
第291回	第98号-住居跡出土石器實測圖	254	第358回	第5-7-10号配石遺構出土石器實測圖(3)	332
第292回	第97A-97B-住居跡出土石器實測圖	255	第359回	第11-12号配石遺構出土石器實測圖(4)	333
第293回	第99号-雙六住居跡實測圖	258	第360回	第16号配石遺構出土石器實測圖(5)	334
第294回	第99号-住居跡出土石器實測圖	258	第361回	第2-21号配石遺構出土石器實測圖	334
第295回	第100号-雙六住居跡實測圖	260	第362回	第3-6-8-14-15号土壤實測圖	336
第296回	第100号-另1号-住居跡出土石器實測圖	266	第363回	第18-25-29-31-34-38号土壤實測圖	338
第297回	第100号-另1号-住居跡出土石器實測圖	261	第364回	第38-37-40-43-47-50-50号土壤實測圖	340
第298回	第100号-另1号-住居跡出土石器實測圖	263	第365回	第49-51-59-65-66号土壤實測圖	343
第299回	第100号-C号-住居跡出土石器實測圖	263	第366回	第67-69-73-75-79-81-90-93-94-100号土壤實測圖	345
第300回	第100号-B-100号-住居跡出土石器實測圖	264	第367回	第91-95-96-103-105-106-108-110-112号土壤實測圖	348
第301回	第101号-雙六住居跡出土石器實測圖	267	第368回	第9-10-19-20-48-63-77-80-89-99	
第302回	第101号-住居跡出土石器實測圖(1)	268		109-117-119号土壤實測圖	350
第303回	第101号-住居跡出土石器實測圖(2)	269	第369回	第1-2-5-12-30-44-60-64-76-89-97	
第304回	第101号-住居跡出土石器實測圖	269		103-104-107-115-116-118-127号土壤實測圖	354
第305回	第101号-住居跡出土石器實測圖	271	第370回	第71-111A-111B-113-114-120-128号土壤實測圖	357
第306回	第103号-雙六住居跡實測圖	271	第371回	土壤出土石器實測圖(1)	359
第307回	第102号-住居跡出土石器實測圖	272	第372回	土壤出土石器實測圖(2)	360
第308回	第103号-住居跡出土石器實測圖	272	第373回	土壤出土石器實測圖(3)	361
第309回	第104号-雙六住居跡實測圖	275	第374回	土壤出土石器實測圖(4)	362
第310回	第105A-105B-雙六住居跡實測圖	275	第375回	土壤出土石器實測圖(5)	363
第311回	第104号-住居跡出土石器實測圖	276	第376回	土壤出土石器實測圖(6)	364
第312回	第105号-住居跡出土石器實測圖	276	第377回	土壤出土石器實測圖(1)	364
第313回	第107号-住居跡出土石器實測圖	276	第378回	土壤出土石器實測圖(2)	365
第314回	第106号-雙六住居跡實測圖	279	第379回	第1号-6号住居跡-カマド実測圖	367
第315回	第106号-住居跡出土石器實測圖(1)	281	第380回	第2号-2号-住居跡-カマド実測圖	368
第316回	第106号-住居跡出土石器實測圖(2)	282	第381回	第3号-住居跡-カマド実測圖	370
第317回	第106号-住居跡出土石器實測圖	282	第382回	第1-2号-溝渠遺構-屋敷面積	372
第318回	第106号-雙六住居跡實測圖	284	第383回	歴史時代の出土遺物(1)	373
第319回	第108号-住居跡出土石器實測圖	284	第384回	歴史時代の出土遺物(2)	374
第320回	第109号-雙六住居跡實測圖	286	第385回	住居跡の規模(表紙-短軸)	378
第321回	第109号-住居跡出土石器實測圖	288	第386回	住居跡の規模(面積)	378
第322回	第109号-住居跡出土石器實測圖	289	第387回	主柱穴-配置式圖	381
第323回	第110A-110B-雙六住居跡實測圖	291	第388回	炉跡分類圖	383
第324回	第110A号-住居跡出土石器實測圖	291	第389回	住居跡分布圖(円筒上層E併行期)	390
第325回	第110B号-住居跡出土石器實測圖	291	第390回	住居跡分布圖(大木B式併行期)	390
第326回	第110A号-住居跡出土石器實測圖	291	第391回	住居跡分布圖(大木G式併行期)	391
第327回	第110A号-住居跡出土石器實測圖	292	第392回	住居跡分布圖(大木D式併行期)	391
第328回	第111号-雙六住居跡出土石器實測圖	294	第393回	懸垂文-凸面文模式圖	419
第329回	第113号-雙六住居跡出土石器實測圖	295	第394回	出土土器実測圖(1)	422

第385回 出土石器実測図(2) .....	423	第414回 連續外出土石器実測図(4) .....	449
第396回 出土石器実測図(3) .....	424	第415回 連續外出土石器実測図(5) .....	450
第397回 出土石器実測図(4) .....	425	第416回 連續外出土石器実測図(6) .....	451
第398回 出土石器実測図(5) .....	426	第417回 連續外出土石器実測図(7) .....	452
第399回 出土石器実測図(6) .....	427	第418回 連續外出土石器実測図(8) .....	453
第400回 出土石器実測図(7) .....	428	第419回 第58・65号竪穴住居跡フレーク総合資料(1) .....	454
第401回 出土石器実測図(8) .....	429	第420回 第65号竪穴住居跡フレーク総合資料(2) .....	455
第402回 出土石器実測図(9) .....	430	第421回 上製品実測図(1) .....	458
第403回 出土石器実測図(10) .....	431	第422回 上製品実測図(2) .....	459
第404回 出土石器実測図(11) .....	432	第423回 上製品実測図(3) .....	460
第405回 出土石器実測図(12) .....	433	第424回 上製品実測図(4) .....	461
第406回 出土石器実測図(13) .....	434	第425回 上製品実測図(5) .....	462
第407回 出土石器実測図(14) .....	435	第426回 石製品実測図(1) .....	464
第408回 出土石器実測図(15) .....	436	第427回 石製品実測図(2) .....	465
第409回 出土石器実測図(16) .....	437	第428回 石製品実測図(3) .....	466
第410回 石器組成図 .....	445	第429回 天戸森D区(壁場)グリッド配置図 .....	479
第411回 連續外出土石器実測図(1) .....	446	第430回 土器柱状図 .....	480
第412回 連續外出土石器実測図(2) .....	447	第431回 出土遺物 .....	
第413回 連續外出土石器実測図(3) .....	448		

## 表 目 次

第 1 表 地図の略記 .....	3	第 9 表 主柱穴配置と時期 .....	382
第 2 表 歴史時代の出土遺物 .....	374	第 10 表 炉の形態と住居の時期 .....	385
第 3 表 住居跡の時期一覧表 .....	376	第 11 表 炉の形態の変遷 .....	385
第 4 表 平面形態と時期 .....	377	第 12 表 光影・復元可能土器出土状況 .....	414
第 5 表 大・中・小削仕切跡数 .....	379	第 13 表 石製品計測一覧表 .....	457
第 6 表 大・中・小削仕切跡平均面積 .....	379	第 14 表 石製品計測一覧表 .....	467
第 7 表 周溝を有する住居と平面プランとの関係 .....	380		
第 8 表 周溝を有する住居と平面プランとの関係 .....	383		

## P L 目 次

P L 1 通路遺構・近景 .....	483	P L 17 出土土器(5) .....	499
P L 2 第5・6・9・13・14・21・24・25・27・32・36・ 43号竪穴住居跡 .....	484	P L 18 出土土器(6) .....	500
P L 3 第22・32・34・36・40号竪穴住居跡 .....	485	P L 19 出土土器(7) .....	501
P L 4 第40・44・45・48・49・51・52・54・ 62A B - F号竪穴住居跡 .....	486	P L 20 出土土器(8) .....	502
P L 5 第71A - C・74・77・85・86・114号竪穴住居跡 .....	487	P L 21 出土石器(1) .....	503
P L 6 第65・103・106・107・110・113号竪穴住居跡 .....	488	P L 22 出土石器(2) .....	504
P L 7 第1 - 4号配石遺構全景・第1号配石遺構 .....	489	P L 23 出土石器(3) .....	505
P L 8 第2 - 6号配石遺構 .....	490	P L 24 出土石器(4) .....	506
P L 9 第10・13・14・15・19・20号配石遺構 .....	491	P L 25 出土石器(5) .....	507
P L 10 第3・6・16・19・25・26号土塹 .....	492	P L 26 土製品(1) .....	508
P L 11 第27・51・52・53・57・101・118号土塹 .....	493	P L 27 土製品(2) .....	509
P L 12 A区遺構跡了後全景 .....	494	P L 28 土製品(3) .....	510
P L 13 出土土器(1) .....	495	P L 29 石製品(1) .....	511
P L 14 出土土器(2) .....	496	P L 30 石製品(2) .....	512
P L 15 出土土器(3) .....	497	P L 31 歴史時代 第1・2・3号竪穴住居跡 .....	513
P L 16 出土土器(4) .....	498	P L 32 歴史時代の遺物 発掘調査参加者 .....	514
		P L 33 天戸森遺跡D区 .....	515
		P L 34 花粉化石 .....	516
		P L 35 大型植物遺体 .....	517

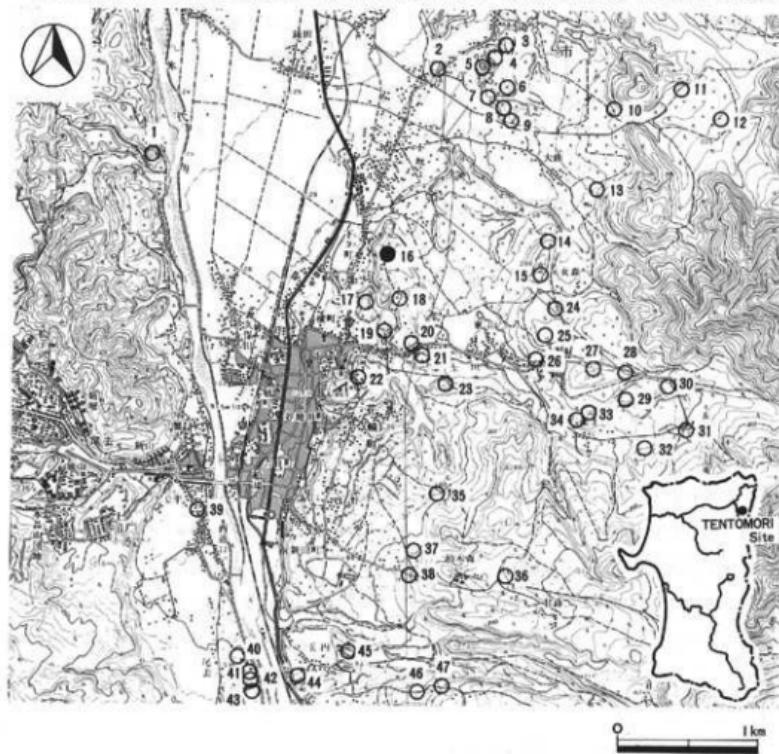
## 第Ⅰ章 遺跡の環境

### 1. 遺跡の位置と現況

米代川の上流に位置する鹿角市は北を青森県、東を岩手県に接する秋田県最北東部に位置する。八幡平、花輪地区を北上する米代川は、十和田地区で南流する小坂川、西流する大湯川と合流し、西方向の大館盆地へとその流れを変える。これらの川の両岸に発達した段丘上には、特別史跡大湯環状列石を初めとし、400以上の遺跡が分布している。

鹿角市花輪字陣場に所在する天戸森遺跡は、北上する米代川の右岸段丘から北西方向に突き出した舌状台地の北端に位置する。国鉄花輪線陸中花輪駅の北東方向、1.4kmの距離にある。

天戸森遺跡の所在する台地は長さ 760 m、幅 500 m を計り、標高 170 m、台地西下の平地と



第1図 天戸森遺跡の位置と周辺の遺跡

の比高は約40mである。台地南西下には東方の山麓から流れ出る福士川が西流している。また西側下には民家が立ち並び、北東側下は水田となっている。

台地上は北部が若干傾斜を持ち下り、先端部が小高い丘状を呈し、台地中央部から南西方向にかけ緩斜面となっている他は若干の高低差はあるもののほぼ平坦である。なお、台地南西部には沢、空堀等により区切られた2~3の郭よりなる中世の館跡（黒土館）が位置している。北端の小丘までを黒土館の範囲とする考えもあるが、昭和56年の試掘調査及び本年度の調査でも中世と関連ある遺構、遺物の出土を見ていよい。

調査対象地を含め、この台地は果樹及び畑地として利用されている。

## 2. 周辺の遺跡

鹿角市内には440カ所の遺跡が所在、県内でも屈指の遺跡の豊庫として知られている。鹿角市内でも、天戸森遺跡の所在する花輪地区は遺跡の分布密度の高いところで、本遺跡周辺5.5×5.0km内でも47カ所の遺跡を数える。花輪地区の地形は、北上する米代川に沿って東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積地に大別されるが、これらの遺跡の大部分は段丘上に位置し、特に広く発達した右岸の標高180~250mの段丘上へ位置するものが多い。

昭和54年から3年間、秋田県教育委員会により、本市を縦走する東北縦貫自動車道建設に先立ち、35カ所の遺跡の発掘調査が行なわれた。花輪地区は本遺跡の東方1kmを南北方向に縦走するため、そのルート内の案内I~III、猿ヶ平I~II遺跡等の発掘調査が実施され、その成果は東北縦貫自動車道発掘調査報告書V~VIとして公表されている。これらの遺跡については同報告書に譲り、ここではその他の縄文時代の代表的な遺跡の概要を記するに留めたい。

### ○清水向遺跡（鹿角市八幡平宮麓清水向）

米代川の支流浦志内川の右岸段丘上に位置する。武藤一郎、半田市太郎氏により、昭和29年9月に発掘調査が行なわれ、縄文時代前期の竪穴住居跡2軒を検出、円筒下層a、c、d式土器、大木6式土器、石器等を多数出土した。当時、この時期の住居跡としては、秋田県で初めてのものであり、発掘件数の増加した現在でも、鹿角市内では唯一の前期の住居跡である。

### ○御休堂遺跡（鹿角市花輪字陳場18の1他）

天戸森遺跡の位置する舌状台地の南端に位置する。昭和55年、宅地造成に伴い、市教委が発掘調査を実施、縄文時代中期末~後期初頭の住居跡3軒、歴史時代の住居跡3軒、建物跡14軒、後期他の上塙22基が検出された。この中で、建物跡は焼土状施設を有し、秋田県内で初めての検出であり注目をあつめた。

### ○東在家遺跡（鹿角市尾去沢字東在家48）

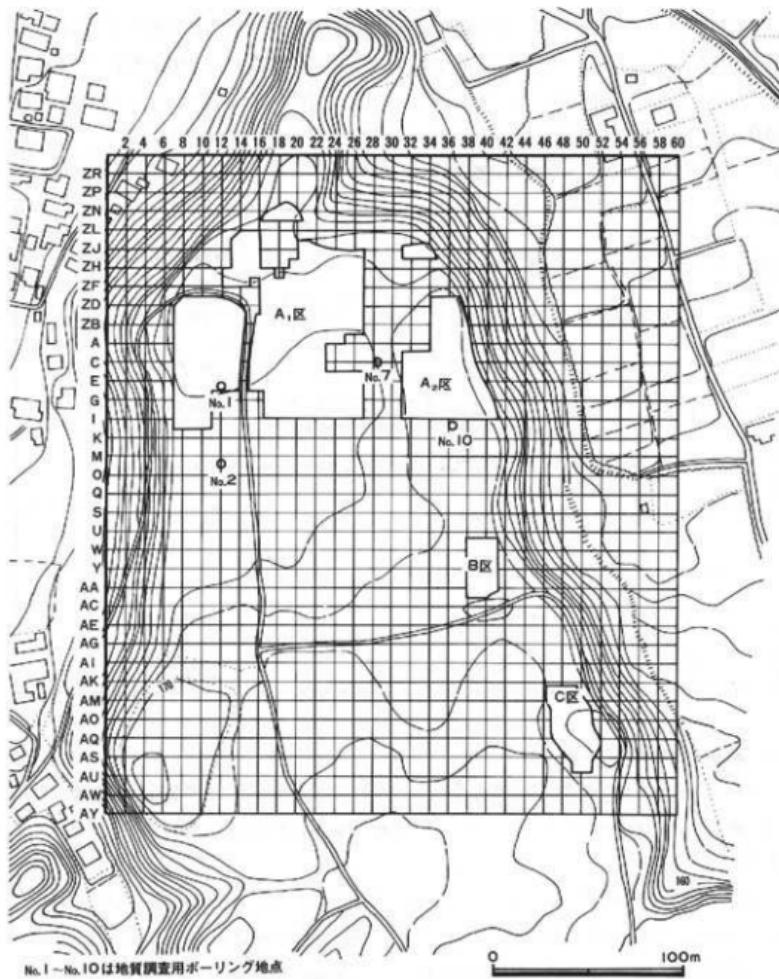
米代川左岸の段丘上に位置する東在家遺跡は、すぐれた精製土器を出土する晩期の遺跡とし

No.	遺跡名	所 在 地	遺跡の種類	時 代	遺 構・遺 物	案 考
1	高 橋 鎌	花輪字通鏡28	鎌 跡	中 世		1983年鹿角市教育委員会「鹿角の歴」-3
2	妻 の 神 II	花輪字妻の神61	遺物包含地	弥 生 時 代		
3	深 波 I	花輪字深波51		縄 文 時 代		
4	乳 牛 平 I	花輪字乳牛平51		縄 文 時 代	古代(奈良-平安)	
5	乳 牛 平	花輪字乳牛平	鎌 跡	縄文時代(後期)		東北縦貫自動車道 鹿角教育委員会調査 No.25遺跡
6	妻 の 神	花輪字妻の神	遺物包含地			東北縦貫自動車道 鹿角教育委員会調査 No.26遺跡
7	乳 牛	花輪字乳牛	。		縄文土器片(後期)	東北縦貫自動車道 鹿角教育委員会調査 No.27遺跡
8	妻 の 神	花輪字妻の神	鎌 跡	中 世		東北縦貫自動車道 鹿角教育委員会調査 No.28遺跡
9	妻 の 神	花輪字妻の神	。	縄 文 時 代		東北縦貫自動車道 鹿角教育委員会調査 No.29遺跡
10	大 曲 A	花輪字大曲	遺物包含地		縄文土器片、土師器片(内墨土師器片を含む)	
11	大 曲 B	花輪字大曲	。		土師器片(内墨土師器片を含む)。陶器片	
12	雷 鐘 I	花輪字雷鈴51	。	縄 文 時 代		
13	水 の 目	花輪字水の目3	。	縄文時代(後期)		
14	雄 ケ 平 II	花輪字雄ヶ平	。	縄 文 時 代		
15	雄 ケ 平 I	花輪字雄ヶ平	。	*		
16	天 戸 森	花輪字天戸森142	。		縄文土器片(前段)円筒下層式、(中層)円筒上層式C-D式、(末層)大湖B-C式、石器、石器、石器、磨製石斧	
17	馬 上 稲	花輪字馬上39-113	鎌 跡	中 世	縄文土器片、絆縄文土器片	
18	釋 場	花輪字釋場	遺物包含地		縄文土器片、(中期)円筒上層式、石器	
19	日 向 星 教	花輪字星教	。		縄文土器片(中期)円筒上層式、大木式、石器、石器、石器化粧土	
20	御 休 室	花輪字御休室	。			昭和55年佐古市教委発掘 1981-3 「御休室遺跡発掘調査報告書」
21	白 山 堂	花輪字白山堂12-25972	。		縄文土器片(後期)、石器、石器、絆石	
22	花 輪 銀	花輪字銀179-148 昭1971-148	鎌 跡	中 世		
23	猪 右 x 門 間	花輪字猪右門間	。	平 安 時 代		
24	家 内 II	花輪字家内	遺物包含地	縄 文 時 代		東北縦貫自動車道 分布調査報告書 V No.18遺跡
25	家 内 III	花輪字家内	。	*	縄文土器片(後期)、石器、弥生式土器片等	
26	家 内 I	花輪字家内	。	*		東北縦貫自動車道 分布調査報告書 No.18遺跡
27	東 山 B	花輪字赤坂	。		弥生式土器片	
28	東 山 C	花輪字赤坂	。		縄文土器片	
29	赤 板 B	花輪字赤坂	。		縄文土器片、絆縄文土器片、磨製石斧	
30	赤 板 A	花輪字赤坂	。		縄文土器片	
31	雄 士 神 C	花輪字百合沢	。		縄文土器片	
32	雄 士 神 D	花輪字百合沢	。		縄文土器片(後期)大湖式、(晚期)大湖C <sub>2</sub> -A式	
33	雄 士 神 A	花輪字百合沢307の内	。		縄文土器片	
34	雄 士 神 B	花輪字百合沢307の内	。		縄文土器片	
35	中の 峠	花輪字中の峠	。	縄 文 時 代		東北縦貫自動車道 分布調査報告書 No.15遺跡
36	甘 露	花輪字甘露	。	平 安 時 代	縄文土器片	
37	柏 木 森	花輪字柏木森	。			東北縦貫自動車道 分布調査報告書 No.15遺跡
38	明 堂 長 枝	花輪字明堂長枝	。			東北縦貫自動車道 分布調査報告書 No.15遺跡
39	下 も 平	尾去沢字下も平	。		縄文土器片。(田舎郷式併行)	
40	六 角 平	尾去沢字六角平	。		縄文土器片(後期)大湖式、磨製石斧、石器	
41	三光塚 2号	尾去沢東在家808 45-40	塚 墳		石器、石器	
42	三光塚 1号	尾去沢東在家115 45-40	塚 墳		縄文土器片。(田舎郷式併行)	
43	東 在 家	尾去沢東在家117	遺物包含地		縄文土器片(後期)大湖式、磨製石斧、石器	
44	玉 内 隅	八幡平字玉内7-13, 16, 17, 37-46, 46, 47, 530-1	越 跡		縄文土器片(後期)大湖BC,C <sub>1</sub> ,C <sub>2</sub> 式、石器、石器	昭和56年越前郡細岡作成 「鹿角の歴跡」
45	玉 内 隅	八幡平字玉内46-49	遺物包含地		縄文土器片、住居跡	
46	下 岩 四 B	八幡平字下岩四	。	縄 文 古 代		
47	上 岩 四	八幡平字上岩四	。			

第1表 周辺の遺跡



第2図 天戸森遺跡付近地形図



第3図 発掘区とグリッド配置図

て古くから知られていた。昭和48年、十和田高校社会科同好会によって、東北縦貫道分布調査の一環として36箇所の発掘調査が行なわれた。調査によって住居跡と想定される竪穴構造の一部が検出され、数個体の完形土器を含む多数の大洞C<sub>1</sub>~A'式土器、石器等が出土した。

○玉内遺跡（鹿角市八幡平字玉内）

米代川東岸の台地にいくむ支谷の棚状をなした中段に位置する。配石造構を有する遺跡であり、東在家遺跡とともに晩期の代表的な遺跡である。配石造構は、大湯環状列石の小単位の一つである所謂日時計様組石と類似するタイプで、その規模は直径2mほどである。この配石造構の東側より完形土器40点以上を含む多数の土器と石棒・滑車形耳飾等が出土した。出土遺物の一部は阿部義平氏により考古学雑誌に報告紹介されている。

(秋元信夫)

遺跡名	発掘担当者	調査年度	概要	備考
猪ヶ平日遺跡	秋田県教育委員会	昭和26年	磐六住跡跡8棟、フラスコ状ビット23基、土壙12基、Tビット2基、鐵文土器(赤銅堂式、円筒下唇式、大木10式)、十脚内式、大洞C式)、石器	東北組員自動車道発掘調査報告書目に収録
猪ヶ平II遺跡	秋田県教育委員会	昭和25年	磐六住跡跡1棟、フラスコ状ビット18基、土壙20基、Tビット1基、鐵文土器(大木8式)、十脚内式、大洞B式)、佛生土器(小吹X式)、石器	同上報告書Vに収録
御休堂遺跡	鹿角市教育委員会	昭和25年	磐六住跡跡6棟(平安時代3棟)、土壙22基、鐵文土器(復元本→後期初頭)、十脚器、石器	御休堂遺跡発掘調査報告書
案内Ⅰ遺跡	秋田県教育委員会	昭和26年	鐵文時代(磐六住跡跡6棟、土壙17基、Tビット8基)、平安時代(磐六住跡跡13棟)、鐵文土器(中期→後期)、石器、土器器、道器器	東北組員自動車道にかかわるNo.18遺跡報告書に収録
案内Ⅱ遺跡	秋田県教育委員会	昭和25年	磐六住跡跡4棟、土壙11基、理設土器2基、配石造構1基、鐵文土器(後期→後期)	同上報告書Vに収録
案内Ⅲ遺跡	秋田県教育委員会	昭和25年	磐六住跡跡1棟、鐵文土器、土壙器	東北組員自動車道にかかわるNo.18遺跡報告書3月発刊予定
東在家遺跡	十和田高校 社会科研究会	昭和48年	鐵文土器(大洞C、C、A式)、土器、石器、石器	十和田高校「やまとみ」に収録
玉内遺跡	阿部義平報告	昭和33年	配石造構1基、鐵文土器(大洞B、C、D式)	考古学雑誌54-1に収録
清水向遺跡	武藤一郎 喜田喜太郎	昭和24年	住居跡2棟、鐵文土器(円筒下唇A、C、D式)	秋田県史考古編 秋田県の考古学(奈良・豐島省) 平出先生と秋田県の考古学(岩見誠夫著)

### 3. 遺跡付近の地形、地質

鹿角市は秋田県の北東部、岩手県北西部に源を発した米代川の上流に位置する。盆地の東側は急峻な標高1,000m以上の山々(中嶽、四角嶽、独鉱森、五の宮嶽、皮投岳など)が連なり、奥羽山地を形成する。

地質は新第三紀中新世の凝灰岩などの火山碎屑岩類(いわゆるグリーンタフ)と、それらを貫く安山岩、石英安山岩が発達する。また、瀬の沢層の泥岩が花輪鉱山付近に広く分布する。

一方西側は、東側ほどの高い山地は見られないが、500m前後の標高を示す比較的低い山が多く、高寺山、水晶山などが突出しているにすぎない。地質は東側と同様に、新第三紀中新世の火山岩類であり、尾去沢付近を中心に、泥岩や砂岩からなる大葛層が分布する。基盤岩は、福士川上流、谷内付近、湯瀬南方の居能井沢を中心に、粘板岩、チャートを主とする古生層が知られている。盆地内は段丘地形が発達しており、4段に識別される。高い方から、高位段丘、中位段丘、鳥越段丘、それに低位段丘(花輪南方に発達する松館段丘、大里段丘)である。こ

こでは特に中位段丘と、第四紀十和田火砕流堆積物である鳥越段丘について述べる。

中位段丘：花輪南方の浦志内川下流で標高230~180mにかけて、また歌内川流域で標高270~200mにかけて、扇状地状に分布する。構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリッフの中に数cm~30cm以上の角礫、亜角礫が雜然と混入する礫層で、末端部では、厚さ数cmの連続性の悪いシルトないし砂の薄層をはさむ。(東北自動車道発掘調査報告書I, IV) 末端部は鳥越軽石質火山灰層の火砕流堆積物に覆われる。所によっては、数mの泥炭質粘土層が発達しており、湖沼的な堆積環境にあったと推定される。

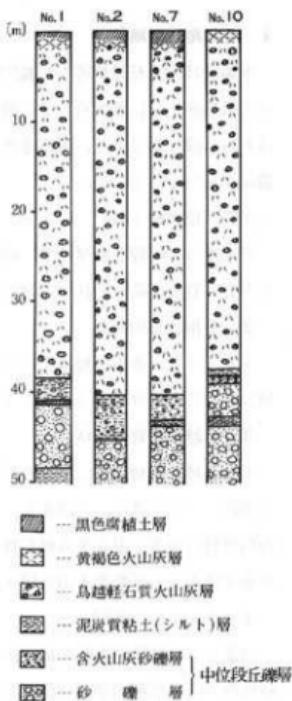
鳥越段丘：鳥越軽石質火山灰層の堆積面であり、二次堆積物をのせていれば、間上段丘と呼ばれ、火砕流台地としての形態を示し、段丘面は平坦で、段丘崖は急崖となることが多い。十和田起源の火山碎屑物は、内藤(1966)、中川ほか(1972)らにより調査されているが、古い方から、高市軽石質火山灰層、鳥越軽石質火山灰層、申ヶ野軽石質火山灰層、大湯軽石質火山礫層(いわゆる大湯浮石)、毛馬内軽石質火山灰層に区分されている。(第1表)

このうち、大湯軽石質火山礫層と毛馬内軽石質火山灰層は、同一火山活動に伴う降下堆積物火砕流堆積物であることが判明している。(大池1972、町田1981、藤本1980)

#### 遺跡付近の火山灰層序(第1表)

地質年代	火山灰層序	文化層 $^{14}\text{C}$ 年代 (yr, B.P.)
沖積世	毛馬内軽石質火山灰層 大湯軽石質火山礫層	1450±100(八甲田湿原研究グループ、1969) 毛馬内火砕流 1280±90(平山ら、1966) 胡桃館遺跡(平山ら、1966) 大湯環状列石 3680±130(渡辺 1966)
	申ヶ野軽石質火山灰層	南部浮石層 8600±250(大池ら、1970)
洪積世	鳥越軽石質火山灰層	鳥越軽石質火山灰層 12000±250(佐藤 1966) 八戸浮石層 12700±270(大池 1964)
	高市軽石質火山灰層	大不動浮石層 25850±1360(中川、他) 高市軽石質火山灰層 >33000(佐藤 1966)

(内藤1966、大地1972、中川1972)



第4図 柱状図

#### 4. 発掘地点の地質

本遺跡は国鉄花輪線陸中花輪駅から北北東 1.4 km の所にあり、花輪市街地の北東の標高 170 m の段丘面上に位置する。この面は、40 m の段丘崖で沖積面と区分される。いわゆる遺跡面と言われる段丘面であり、大湯環状列石を初めとし、440 ケ所にも及ぶ繩文から中世にかけての遺跡が見つかっている。

##### (1) 黒色腐植土層

地表から 60 cm 程度の厚さで、場所によって厚さが異なる。一般に、上面から 30 cm 程度の所に大湯軽石質火山礫を約 10 cm の厚さで挟み、遺跡の年代決定に重要な Key bed (鍵層) である。

##### (2) 黄褐色火山灰層

オレンジ色の火山灰層で 1 ~ 2 m の厚さのことが多い。下部は灰褐色～灰色の軽石質火山灰層に漸移し、区分がはっきりしないこともある。中ヶ野軽石質火山灰層と考えられる。

##### (3) 鳥越軽石質火山灰層

本調査地域の層厚は、10 本の試錐調査（尾去沢コンサルタント K.K.）の結果、35 m であった。全体的に灰分が多く、上部から、風化した粘土質火山灰層（5 m），その後に、厚さ 10 m 程度の白色軽石が多く混在する軽石質火山灰層、最下部は、20 m 程度の厚さで、中一粗粒の火山灰砂を主体とする砂質性火山灰層と、軽石火山灰層の互層からなる。

##### (4) シルト～沙礫層

試錐によって確認された最下位層で、厚さは 10 m 以上と推定される。本地域では、1 ~ 2 m の暗灰色～暗青灰色の半固結状のシルト層、または泥炭質粘土層の下に、粘板岩、チャート、安山岩等からなる硬質で淘汰の悪い円礫～亜円礫を雜然と含む、厚さ数 cm ～数 10 cm の礫層が続く。

(鎌田 健一)

#### 参考文献

- 内藤博夫「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」『地理学評論』第39巻第7号  
1966年
- 内藤博夫「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』第43巻第10号  
1970年
- 中川久夫・他「十和田火山発達史概要」『東北大地質古生物研報』第73号 1972年
- 大池昭二「十和田火山は生きている」『国土と教育』第26号 1972年
- 秋田県「秋田県総合地質図幅、花輪」1973年
- 藤本幸雄「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成（その1）大館、花輪盆地における火山灰層」『昭和54年度大館工業高校研究紀要』1980年

秋田県教育委員会「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ」1981年3月

秋田県教育委員会「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ」1982年3月

鹿角市役所、尾去沢コンサルタント(株)「花輪第一中学校建設用地地質調査報告書」

1982年8月

## 5. 遺跡の層序

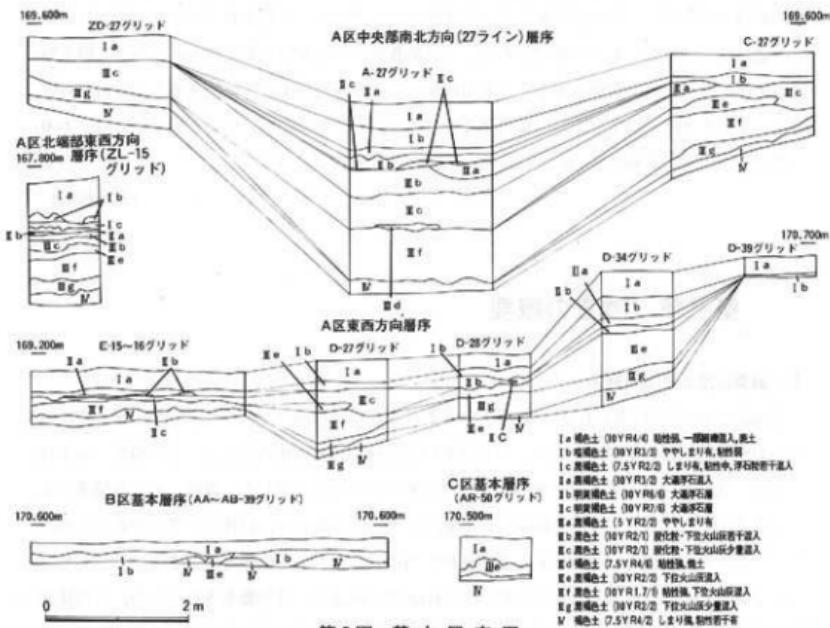
調査区には若干の起伏があり、A区東端、B区及びC区の標高が若干高く、C区は南西方向に緩く傾斜している。

またA区中央部及び西部はほぼ平坦で、A区北端は北側に緩く傾斜している。

ここでは表土から申ケ野軽石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記述する。それ以下の地質については4、発掘地点の地質を参照にされたい。

黄褐色下位火山灰層上面までは基本的にI~Ⅳ層に分層できる。第Ⅰ層は大湯浮石層(Ⅱ層)までの堆積層で、さらに3層(Ia~Ic層)に細分される。Ia層は耕作土で、A区東端のよう

に標高の高いところではほぼ地山(下位火山灰層)まで耕作による擾乱が及んでいる。



第5図 基本層序図

第Ⅱ層の大湯浮石層は標高が高く、堆積層の薄いB、C区や擾乱の深い地区を除くほぼ全域で確認され、発掘区北端やA区東寄りの堆積層の厚い地点（A-27グリッド付近）では20cm前後の層厚がある。これらは粒子の粗細・色調・浮石の含有量から3層（Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc）に細分できる。大湯浮石層については青森県及び岩手県北部等に堆積している十和田a降下火山灰と一連のものであり、約1000年前の噴火によって噴き上げられた降下軽石層（大池：1972）と考えられている。

第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の褐色土層（Ⅳ層）までの黒色または黒褐色を呈する土層である。土色・土質及び混入物より、Ⅲ層はさらに7層（Ⅲa～Ⅲg）に細分される。Ⅲa～Ⅲfが繩文時代の遺物包含層であり、特にⅢa～Ⅲeからは多量の中後葉～末葉の遺物の出土があった。A区中央部南北方向のセクション図において、ⅢaとⅢf層間に褐色の焼土（Ⅲd層）が確認され、その直上に炭化粒、遺物の出土が多いことから、Ⅲc層下面が中期後葉の生活面と考えられる。なお配石遺構はⅢc上面～Ⅲeにおいて確認された。

第Ⅳ層は地山（下位火山灰）直上の層で、褐色を呈し、若干粘性があり、しまりのある層である。前述のとおりⅢc層が中期中葉の生活面と考えられるが、黒褐色土層であるために、遺構の検出が困難で、その前後で確認できた住居跡・土塙は5～6基を数えるにすぎず、ほとんどの遺構はⅣ層上面において確認されている。第Ⅳ層下の第V層は先に述べたとおり、申ケ野火山灰層と考えられる黄褐色を呈する火山灰層である。本層は上位に堆積する大湯浮石に対応させ、下位火山灰、関東ロームに相当するところからロームと呼ばれているものである。本報告書では、本層をV層以外に、下位火山灰層、地山と表現している。

（秋元信夫）

## 第二章 調査の概要

### I. 調査に至るまでの経過

花輪第一中学校は、昭和24年に建築された木造校舎で、老朽化が著しく、改築は地元住民の強い要望であった。昭和53年12月、市教育委員会は同じく老朽化の進んでいる花輪第二中学校を含め、両校統合による改築と単独による改築案を市当局に提案した。数回にわたる協議により、各々の学校に適した面積を確保し、単独改築することとなり、以後その準備が進められた。しかしながら、周囲を山で囲まれた盆地地形の当市にとって、広面積を確保することは容易なことではなく、特に花輪第一中学校用の58,000m<sup>2</sup>の土地選択には困難をきたしたが、その位置及び面積より、その目は次第に天戸森遺跡の位置する陳場地内に注がれるようになった。

天戸森遺跡は古くから地元住民に知られてきた所謂周知の遺跡であるが、調査されたことがなく、遺跡の種類・性格や規模等不明の点が多くあった遺跡である。このため、市教育委員会では昭和56年に遺跡の性格及び規模の確認を主目的に範囲確認調査を実施した。

昭和56年8月31日、市議会全員協議会で花輪第一中学校の建設場所が同地に決定されたことから、上記調査結果に基づいて昭和57年に発掘調査が実施されることとなった。

試掘調査では、調査対象地のほぼ全域が遺跡との関連がみとめられ、また検出遺構、出土遺物とも多く、大規模な縄文時代中期の遺跡と予想された。このため、極力遺跡を保存することとし、道路及び校舎部分のみを削除、他の部分は盛土し、その上に野球場、トラック等を作ることとした。発掘調査はこの削除される16000m<sup>2</sup>を対象に昭和57年4月20日～8月31日の4.3ヶ月間の予定で実施されることとなった。

## 2. 調査要項

1. 遺跡名 天戸森遺跡（市町村遺跡番号72）
2. 所在地 鹿角市花輪字陳場142他
3. 調査期間  
試掘調査 昭和56年9月22日～56年11月19日  
発掘調査 昭和57年4月20日～57年10月18日  
整理・報告書作成 昭和57年10月23日～59年3月31日
4. 発掘調査面積 9,160m<sup>2</sup> (A区 7,660m<sup>2</sup>, B区 600m<sup>2</sup>, C区 900m<sup>2</sup>)
5. 調査主体者 鹿角市教育委員会
6. 調査担当者 秋元信夫（鹿角市教育委員会 社会教育課）
7. 調査参加者  
調査指導員 富樫泰時（秋田県教育庁文化課 学芸主事）  
調査員 安村二郎（鹿角市史編さん委員）  
大里勝藏（秋田県立十和田高校 教諭）  
鎌田健一（秋田県立十和田高校 教諭）  
成田典彦（鹿角市立尾去沢中学校 教諭）  
三ヶ田俊明（鹿角市立八幡平小学校 教諭）  
谷地 薫（鹿角市立八幡平中学校 教諭）  
藤井安正（鹿角市教育委員会埋蔵文化財調査員）  
調査補助員 佐藤 樹、菊池 明、岩沢公則、藤井富久子、三ヶ田瞳子、浅石恵留子  
調査協力員 小林浩之、東松琢郎、五十嵐健志、武藤祐浩、斎藤 渉、田口真由美、

保坂二美子、斎藤和美（以上秋田大学生）、青山宏治（明星大学生）、古川孝政、田口則夫、岩岡真由美、白石葉子（以上札幌商科大学生）、安保明美、安保秀子、木村恵子、柳沢隆子、黒沢文子、兎沢良子、畠山正光（十和田高校社会科同好会）、菊沢キヌ子、池田邦子、浅石悦子、  
作業員 相川金子、石鳥谷妙子、三ヶ田孝子、賀川政子、柳沢ヤス、中西リチ、奥村ハツエ、相川リヨ、田中ヨシエ、泉谷サナ、佐々木ヒサ、兎沢松江、石木田クラ、山本コト、山本ツルエ、石井ユキ、相川タマ、川又ヨ、根本キワ、斎藤チヨ、石木田栄美子、阿部リサ、大森栄子、奈良栄子、松岡ティ、川村千鶴子、山本真利子、木村テル、佐々木政子、村木雅子、安保ユキ子、山崎泰子、児玉綾子、三ヶ田林子、阿部チエ、川村ツエ、似鳥キサ、成田キヌ、小板橋文、田口キサ、中西幸子、石川一枝、根本市藏、奈良正次郎、前田エミ

#### 8. 社会教育課

課長 工藤次郎  
課長補佐 安田孝司  
文化財係長 柳沢悦郎（庶務担当）  
主事 秋元信夫（調査担当）  
臨時職員 目時キミ子（庶務）

#### 9. 協力機関・協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県農業試験場  
鹿角市都市計画課、建設課、農林課、花輪第一中学校  
豊田 磐、菊池清悦、石木田シゲ、古川研市

#### 3. 調査の方法

昭和56年の試掘調査において、天戸森遺跡は58,000m<sup>2</sup>以上の広大な面積を有する遺跡と予想された。このため、できるだけ盛土等による工法で遺跡を保存することとし、削平の避けられない道路・校舎建築部分及び下部造構への影響が考えられる微高地を調査対象とした。北側の削平される部分をA区、東側の微高地をB区、南東側の微高地をC区とし、それぞれ16,000m<sup>2</sup>、650m<sup>2</sup>、900m<sup>2</sup>の計17,550m<sup>2</sup>を対象とした。

グリッド設定は磁北を基準線とし、5m四方を1単位とした。さらに南北方向をアルファベット、東西方向を算用数字とし、両者を組み合わせて各々のグリッドを呼ぶこととした。

遺跡の基本層序は4層からなり、第Ⅱ層の大湯浮石層までは遺物の出上りがほとんどないこと

から、表土（I層）除去にはバックホーを使用した。以下、手掘りによる分層発掘とし、できるだけ上層で遺構を検出するように努めた。

検出された遺構については、遺構の種類ごとに発見順に番号を付した。単一遺構として番号を付した後に複数の遺構の重複と認められた場合は、アルファベットを付け加え、各々を区別した。遺構精査は住居跡は四分法、配石遺構・土壙等は二分法を基本としたが、遺構の規模・重複関係及び調査進行状況に応じて、流動的に対処した。

遺物の取り上げは、遺構外のものは各層ごと・グリッド一括で取り上げた。遺構内のものについては、1点づつの図化・レベル実測の後取り上げることを原則としたが、調査期間後半には全遺構の検出に主力を置き、床面及び床直上の遺物以外の図化は省略した。

遺構等の実測は簡易遺り方測量を用い、住居跡、土壙は1/20、配石遺構、炉跡等は1/10、遺物の微細図は1/1～1/10の縮尺で図化した。

近年、自然科学分野からの遺跡の解明・復元という試みがなされているが、本遺跡では、大規模な繩文時代中期の集落跡と予想されたため、C<sup>14</sup>測定、リン分析、花粉分析、種子同定を計画、資料の探集に努めた。

#### 4. 調査の経過

天戸森遺跡の発掘調査は、調査後の造成工事との関連で8月31日を終了予定に、4月20日より開始された。予想以上の遺構の検出により、調査は予定期日を大幅に超越し、終了したのは10月18日であった。以下、調査日誌に基づいて調査経過の概要を述べる。

4月20日、作業員への作業事項の伝達の後、試掘調査時に粗掘を終了していたA区中央部のB～F-15～20グリッド部分から遺構確認・遺構精査を開始した。

4月24日からはバックホーを導入、発掘区域内の抜根、26日からは同重機による表土除去が開始された。表土除去は土の置き場の関係で、A区先端から南端・B区・C区の順で行なわれ6月26日に終了した。

表土除去の終了した区域ごとに抗打ち（グリッド設定）を行ない、順次、粗掘、ジョレンかけを実施した。

5月末には、A区中央部から北東部にかけての3,150m<sup>2</sup>の粗掘、ジョレンかけを終了、繩文時代の竪穴住居跡49軒、土壙33基、歴史時代の竪穴住居跡1軒が確認された。また遺物もダンボール箱に46箱にもなり、大規模な遺跡となるものと予想された。

6月9日から14までは郷土の理解と母校愛の育成を目的に、花輪第一中学校生徒による発掘調査体験学習（1・2年）と見学（3年）が行なわれた。この頃より市内外の研究者・報道関係者の来訪が多くなり、種々の報道後は文化財関係者や学校のみならず、一般市民の見学も

見られるようになった。

7月には粗掘りは農道西側の区域に移り、7月10日には南北に通る農道東側の粗掘り、遺構確認はすべて終了、確認遺構数は縄文時代の住居跡70軒、土壙38基、歴史時代の住居跡2軒となる。うち調査の終了した遺構数は60%にも満たず、農道西側においても多数の遺構の検出が予想されたため、予定期間内での調査終了はきびしいものとなった。このため対象地内の全遺構の精査に主力を注ぐべく、以後、四分法から二分法、覆土中の遺物のポイントの省略等、調査方法の簡略化を行なうと共に、秋田大学生、札幌商科大学生、十和田高校社会科同好会等の調査協力を要請、調査体制の強化を図った。

7月末には、A区の遺構精査と併行してB区の、また8月初旬にはC区及びA区北端の粗掘り、遺構精査を行なった。B区からは縄文時代の住居跡1軒、土壙3基、C区からは縄文時代の住居跡4軒、土壙3基、A区北端の緩斜面からは8基の配石遺構が検出された。

8月には精査は農道西側に移るが、重複する遺構、大型住居跡が多く、調査参加者の精力的な調査にもかかわらず、思い通りに作業は進行しなかった。さらに盆休み、花輪ばやしと続々作業員の欠勤が多くなり、それに追いうちをかけた。8月31日、当初の調査終了予定日であるが、調査終了は65%にすぎなかった。

県内でも唯一の縄文時代中期の大集落であるという重要性から、造成工事との調整をとりながら調査を延長することとなるが、予算等の関係で作業員数を半分とし、少人数での調査となってしまった。

9月前半は工事を急ぐ北端の道路建設部の配石遺構部分の精査を優先的に行なう。また9月10日からは農道西側の遺構精査と併行してB区の精査を開始、18日に終了した。

9月11日には、埋蔵文化財への理解、文化財保護思想の高揚を図るため現地説明会が開かれ約100名の参加者を集め、天戸森遺跡の概要や重要性を認識してもらうことができた。

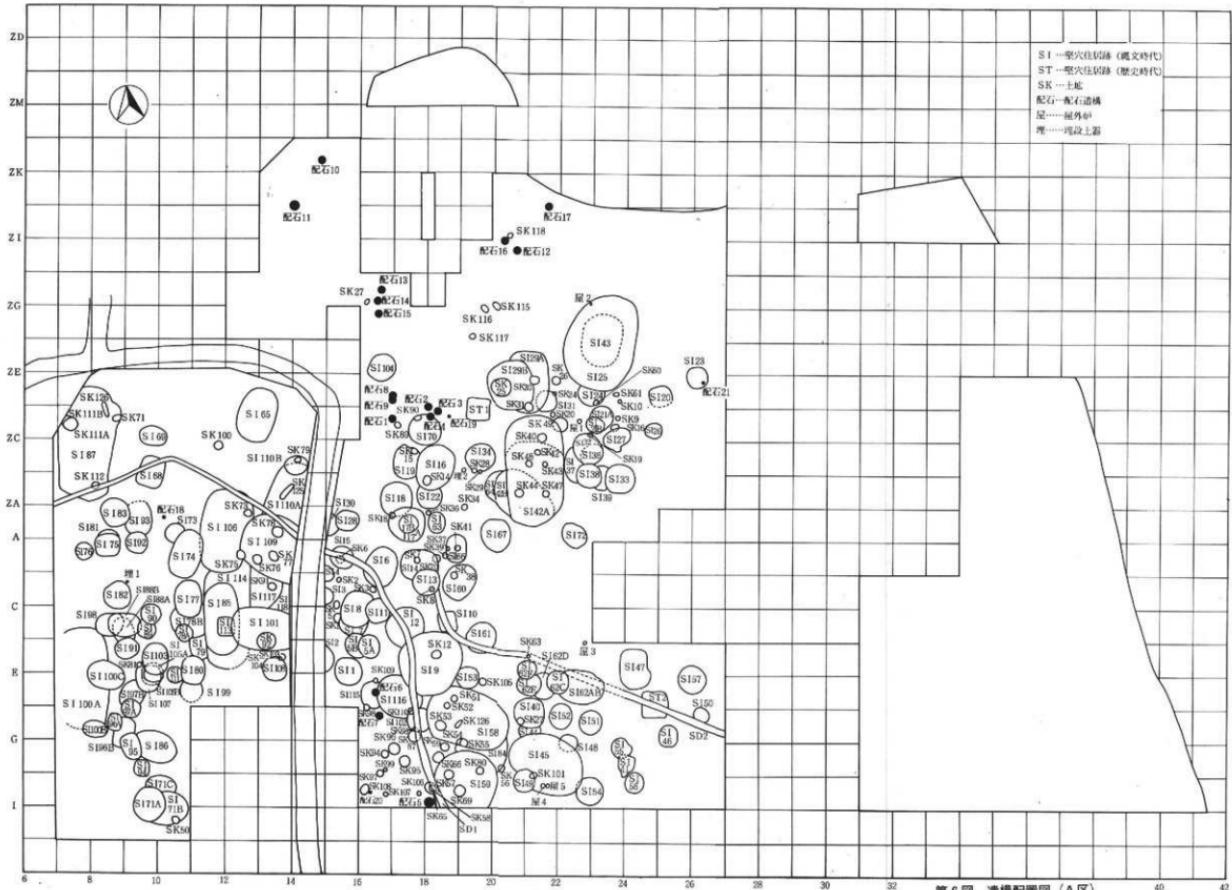
9月14日には予算の関係で最終的に作業員の打ち切りとなり、以後最終期限10月14日を目標に調査員・補助員計7名での調査継続となった。

10月6日には道路部分の工事が開始され、バックホー・ダンプの騒音に悩まされての調査となってしまった。

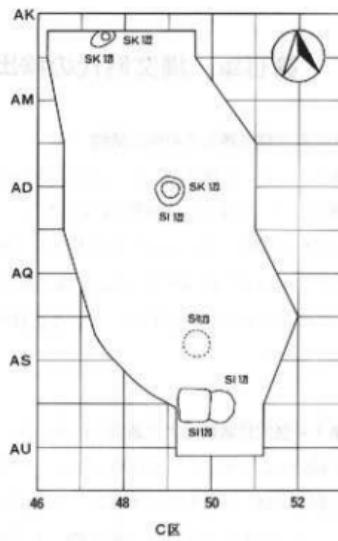
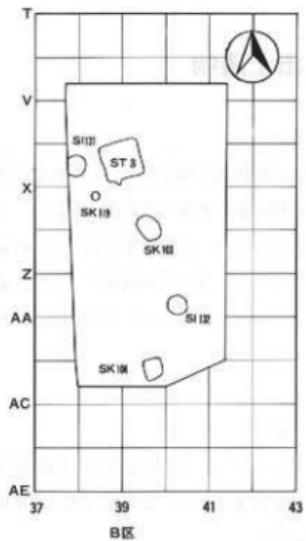
10月8日にはA区農道西側と併行してC区の遺構調査を開始、16日に終了した。

10月18日、A区の近景写真を撮り、6カ月に及ぶ調査をすべて終了した。

(秋元信夫)



第6図 遺構配置図（A区）



第7図 遺構配置図（B・C区）

## 第Ⅲ章 繩文時代の検出遺構と出土遺物

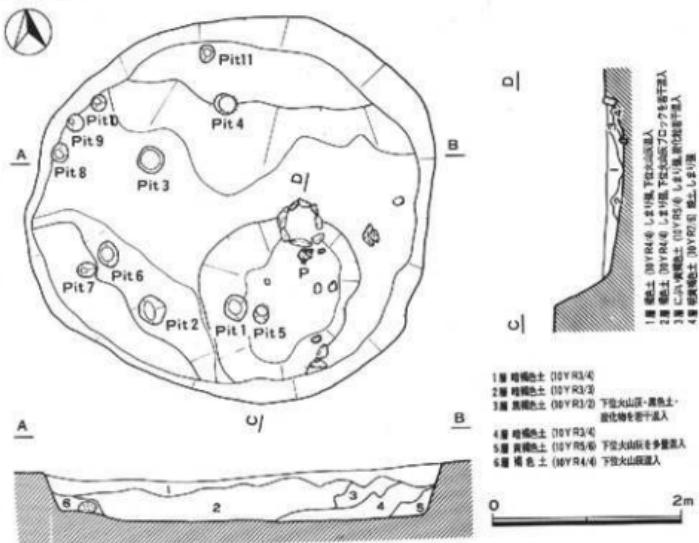
### (1) 穴住居跡とその出土遺物

A区135軒、B区1軒、C区4軒の計140軒の繩文時代の住居跡が検出された。これらの住居跡は、その供伴する遺物及び新旧関係から、繩文時代中期中葉～末葉に位置づけられる。ここでは、調査時に付けられた遺構番号順に調査結果を記述し、分析・考察は第V章にまとめる。なお、A区東側の微高地部からは遺構の検出がなかったことから、A区を便宜的に二分し、遺構の集中する中央から西側をA<sub>1</sub>区とし、住居跡の位置については、このA<sub>1</sub>区での相対関係として記述した。

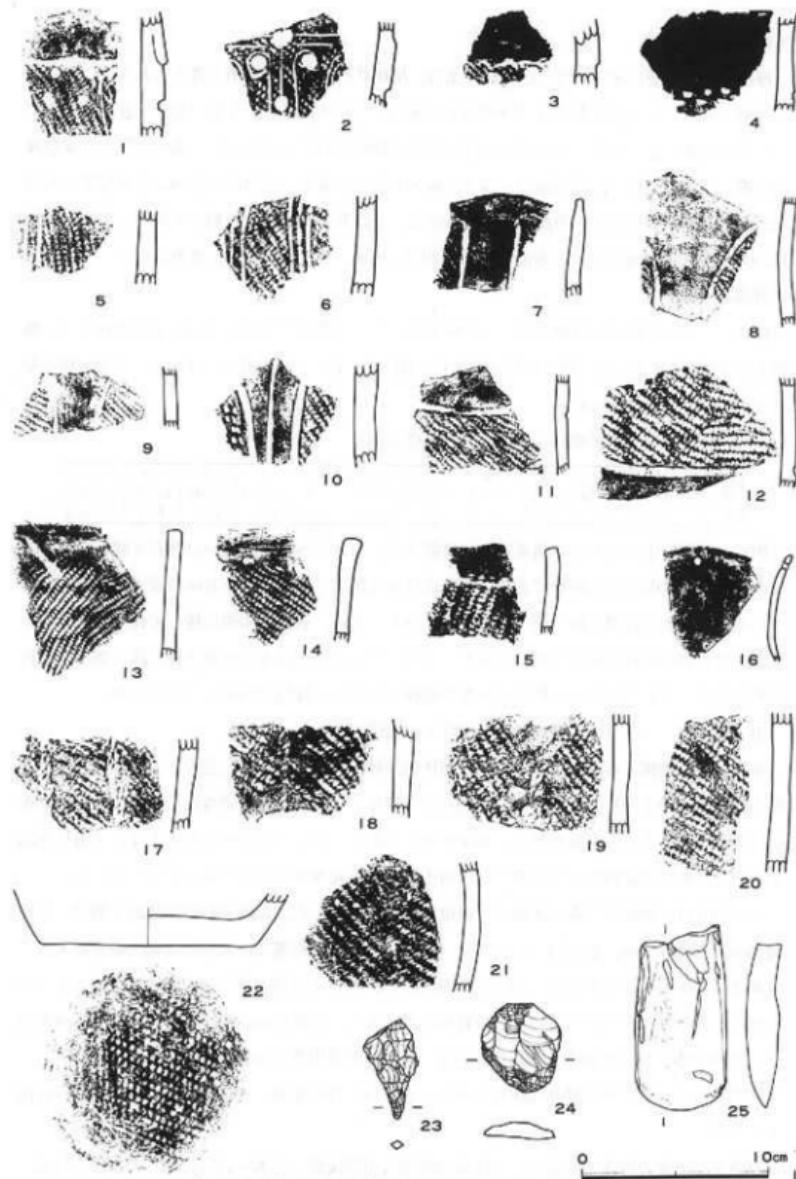
第1号竪穴住居跡と出土遺物（第8、9、401、403、426図）

〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央よりやや南寄りのD-15・16グリッドに位置する。昭和56年の試掘調査時に、IV層上面で確認された遺構である。本住居跡北西壁側に2号住居跡、北東壁側に5A・5B号住居跡、南東壁側に115号住居跡が近接する。

〈平面形・規模〉 4.20×4.02mの円形を呈する。主軸方向はN-62°-W、床面積は11.64m<sup>2</sup>



第8図 第1号竪穴住居跡実測図



第9図 第1号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

を計る。

〈堆積土〉 6層に区分できる。各層の土質、堆積状況から自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 テラスを有する二段構造で、床面、テラス面とも、V層（地山）を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは本住居跡の主軸線に対応するように、南西壁際と北東壁際とに位置し、その規模は、南西壁のものが $2.40 \times 0.52$ m、床面からの高さ19cm、北東壁際のものが $2.60 \times 0.65$ m、床面からの高さは9cmを計る。壁はIV・V（地山）層から成り、壁高は東壁45.5cm、南壁43.4cmを計る。床面はほぼ平坦で、床面、テラス面ともしまりは弱い。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より11個のピットが検出された。このうちPit 1・3・4・6が主柱穴で、軸線上の1個（Pit 3）と、軸線に対称な2対4個（Pit 1・（未検出）、4・6）の計5個を基本とする柱配置と考えられる。

第1号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規 模	$29 \times 24$	$32 \times 28$	$27 \times 27$	$23 \times 21$	$19 \times 16$	$28 \times 21$	$20 \times 15$	$20 \times 17$	$20 \times 18$	$16 \times 15$	$20 \times 16$
深 さ	31.9	18.8	26.1	34.5	21.1	18.6	5.8	17.0	14.2	15.1	14.0

〈炉〉 住居跡中央よりやや南東寄りに位置する。11~27cm大的細長い自然石8個を、 $55 \times 50$ cmのやや円形に配した石開炉である。炉底面はよく焼けており、7~8cmの深さまで焼土化している。炉覆土には炭化粒・焼土が混入していた。また、石開炉南側に接して $16.5 \times 16.0$ cmの規模、深さ15cmの掘り込みが確認された。このことから本炉跡を石開部十掘り込み部の石開複式炉とすることもできるが、掘り込み部の規模・位置から疑問の残るところである。

〈出土遺物〉 （第9図、401図17、403図8、426図16）

本住居跡に隣接する掘り込み部より1個体の深鉢形土器、13点の土器片と1点の搔器を、床面からは29点の土器片を、床直からは19点の土器片と1点の磨製石斧を出土した。また覆土からはミニチュア土器、有孔石製品、石錐がそれぞれ1点と、ダンボール箱に1/4の土器片を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央部から北西部にかけて多く分布している。

388図8は、炉掘り込み部北縁より斜位の状態で出土した、ほぼ完形の深鉢形土器で、口径14.3cm、底径5.1cm、器高14.5cmを計る。器面にはR Lの斜繩文、底面には網代痕を有する。色調は灰黄褐色（10Y R 4/2）である。401図17は、西壁寄り覆土上位から出土したミニチュア土器で、大小3個ずつの小突起をもつ鉢形土器である。口径6cm、底径3cm、器高4.5cmを計り、器面全体にL Rの斜繩文を施している。色調は明黄褐色（10Y R 7/6）である。

9図3・5・11・20・21は炉掘り込み部、8・18・19は床面、6・12・16は床直上からの出土である。

炉内及び床面の出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

### 第2号竪穴住居跡と出土遺物（第10, 11図）

〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央よりやや南寄りのD-14・15グリッドに位置する。1号住居跡と同様に試掘調査時にIV層上面において確認された遺構である。A<sub>1</sub>区を南北に通る農道のため完掘できず、その全容は不明である。発掘区域内では重複、増改築は見られない。

〈平面形・規模〉 円形又は椭円形を呈すると考えられる。規模は完掘に至らず不明である。

〈堆積土〉 5層に区分できる。堆積状況により人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層（地山）まで掘り込んで床面としている。床面は北壁側から南壁側への緩やかな傾斜となっている。壁はIV・V（地山）層から成り、ほとんど垂直な立ち上がりを呈する。壁高は57.8cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より2個のピットが検出されたが、規模及び深さよりいずれも柱穴と考えられる。なお配列については不明である。

第2号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2
規 模	36×30	45×30
深 底	44.6	34.9

〈火葬〉 発掘区域内では、検出されなかった。

〈出土遺物〉（第11図）

ピット内より6点、床面より9点、床直より6点、覆土より30数点の土器片を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央より北東寄りにかけて多く分布している。

11図9・10・11・14は床面、1・3・4・12・13は床直上からの出土である。

床面及び床直上の出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。

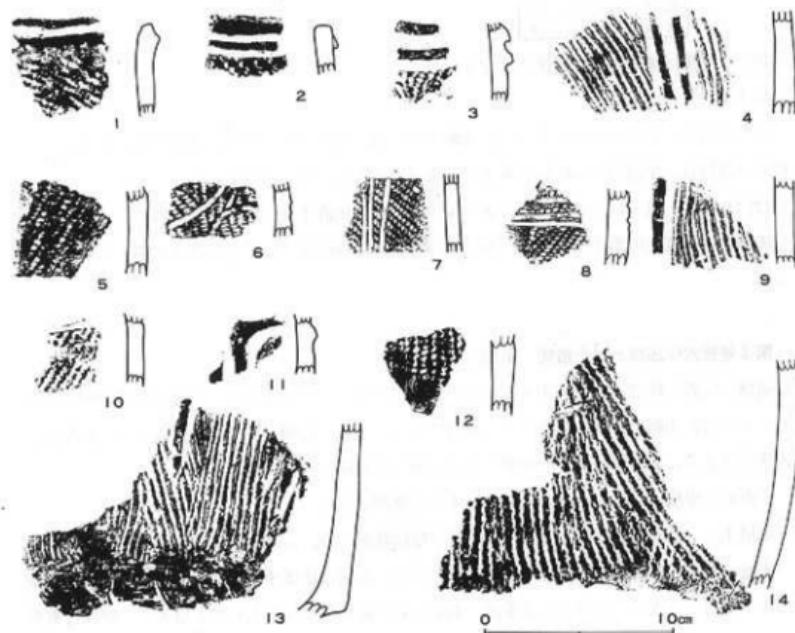
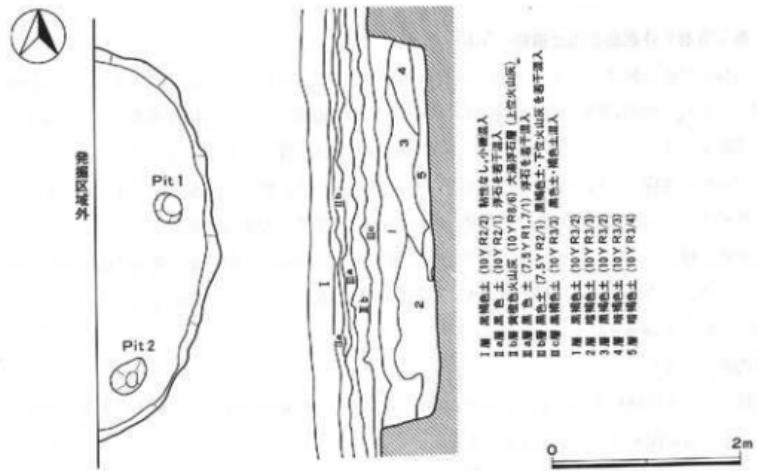
### 第3号竪穴住居跡と出土遺物（第12, 14図）

〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央部のB-14・15グリッドに位置する。IV層上面での確認である。本住居跡西側半分は、農道のため調査できなかった。発掘区域内では重複は見られない。本住居跡北側に4号住居跡、南東側に3号土壙等が接続する。

〈平面形・規模〉 径2.60mの円形を呈すると推測される。

〈堆積土〉 2層に区分できる。堆積土及び堆積状況より、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。床面はほぼ平坦で、堅くしまっている。壁はIV・V層より成り、北壁はほぼ垂直、南壁はやや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁13.3cm、南壁18.7cm、北壁12.9cmを計る。



〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より4個のピットが検出された。規模及び深さより、Pit 3が主柱穴、Pit 1・2・4が壁柱穴と考えられる。

第3号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4
規 模	18×12	14×12	20×16	14×12
深 さ	5.7	10.0	19.8	8.3

〈炉<sup>ア</sup>〉 住居跡南東壁際に位置する。7~22cm大の自然石を78×42cmの楕円形に配した石囲がである。炉内底面がわずかに赤変（焼土化）していた。

〈出土遺物〉 （第14図）

ピット内より4点、床面より1点の土器片を、覆土からは20数点の土器片と1点の磨石を出土した。

14図2は、床直上からの出土である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉と考えられる。

#### 第4号竪穴住居跡と出土遺物（第13、15図）

〈構造の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央部のA・B-14・15グリッドに位置する。IV層上面での確認である。本住居跡西側半分は、農道のため調査できなかった。発掘区域内では重複は見られない。本住居跡北東側に15号住居跡、南側に3号住居跡が近接する。

〈平面形・規模〉 径3.6mの円形を呈すると推測される。

〈堆積土〉 3層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。擾乱が床面まで及び、多数の凹凸がある。壁はIV・V層より成るが、擾乱の影響で崩壊が著しい。壁高は東壁30.5cm、南壁30.0cm、北壁27.0cmを計る。

〈周溝〉 なし

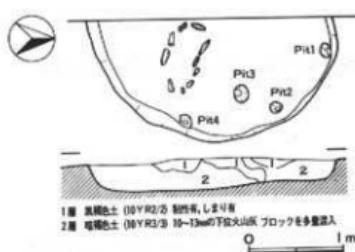
〈柱穴〉 摆乱が床面まで及び、柱穴は検出できなかった。

〈炉<sup>ア</sup>〉 確認できなかった。

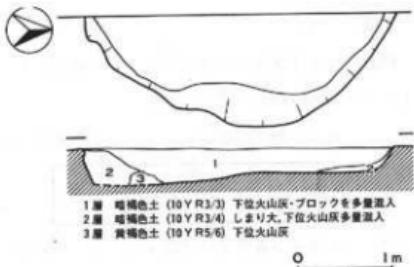
〈出土遺物〉 （第15図）

本住居からの遺物の出土は少なく、床面より2点、床直より5点の土器片の他、覆土より30点弱の土器片と1点の搔器・磨石を出土したのみである。

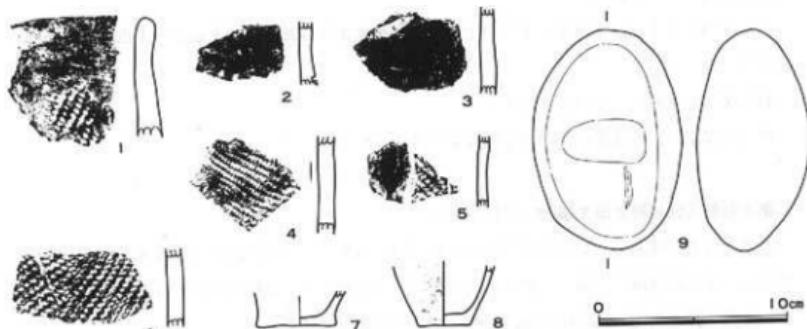
出土土器より、本住居の時期は中期後葉と考えられる。



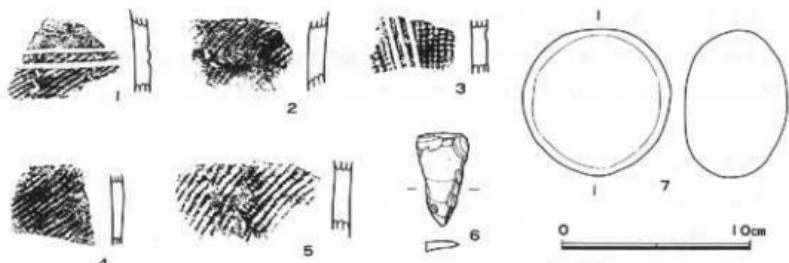
第12図 第3号竪穴住居跡実測図



第13図 第4号竪穴住居跡実測図



第14図 第3号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第15図 第4号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

#### 第5A号竪穴住居跡と出土遺物（第16、17、408図）

〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区のほぼ中央のC・D-16グリッドに位置する。試掘調査時にIV層上面にて楕円形のプランとして確認されたものであるが、精査の結果、このプランは2軒の住居跡の重複と判明、東側の住居跡を5A号住居跡、西側の住居跡を5B号住居跡とした。以下5A号住居跡について述べる。

なお、5A号住居跡は確認プラン及びセクションより、5B号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 3.64×3.42mの円形を呈する。主軸方向はN-25°-E、床面積は8.48m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 4層に区分できる。2層から4層まで炭化物が混入し、特に最下層である4層には炭化材・炭化物が多量に混入していた。このため本住居跡は焼失家屋と考えられる。

〈床面・壁〉 V層(地山)まで掘り込んで床面としている。床面は中央部が低いレンズ状であり、若干凹凸があるが堅くしまっている。壁はIV-V(地山)層から成り、やや急な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁34.6cm、南東壁44.8cm、南西壁56.4cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 5A・5B号住居跡より計28個のピットが検出された。このうちPit 1~4が本住居跡の主柱穴、Pit 5~8・14~16・17が壁柱穴と考えられる。この他に平面形・規模及び配置から、Pit 9・11・13・19も本住居跡に伴う柱穴と思われる。特にPit 11・13は主柱穴Pit 1・4及び壁柱穴Pit 8・10間に規則的に配置されており、出入口に関する柱穴と想定される。

第5A・5B号竪穴住居跡ピット一覧表(単位:cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規 模	28×26	22×20	26×18	27×24	26×20	30×18	28×24	20×14	18×14	18×14
深さ	36.0	30.5	36.1	45.0	15.1	20.4		17.0	26.6	13.8
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規 模	14×12	14×12	14×14	20×16	18×12	28×18	14×12	18×16	38×18	20×14
深さ	25.5	6.6	29.8	2.3	4.0	12.2	95.5	14.1	36.3	26.0
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27	28		
規 模	21×20	23×16	21×21	22×18	35×24	24×20	26×20	36×18		
深さ	14.2	24.3	4.1	30.0	13.5	64.0	10.5	57.3		

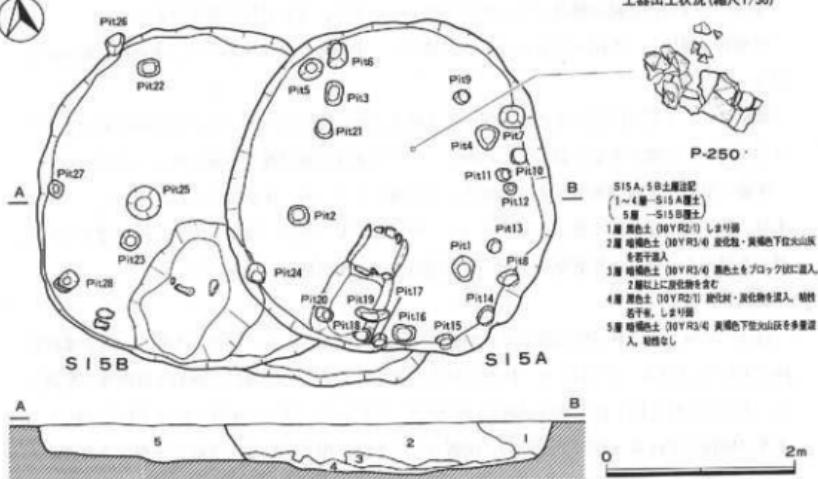
〈かご〉 住居跡の南北壁際に位置する。石開部十掘り込み部から成る石開複式かごである。石開部は、自然石を58×52cmの方形に配したもので、主軸方向の2辺はいずれも、38cm、46cmの細長い石1個から、他の2辺は10~20cm大の石3個から成る。掘り込み部は、76×64cmの隅丸方形を呈し、床面からの深さは最大6.8cmを計る。

〈出土遺物〉 (第17図、408図9)

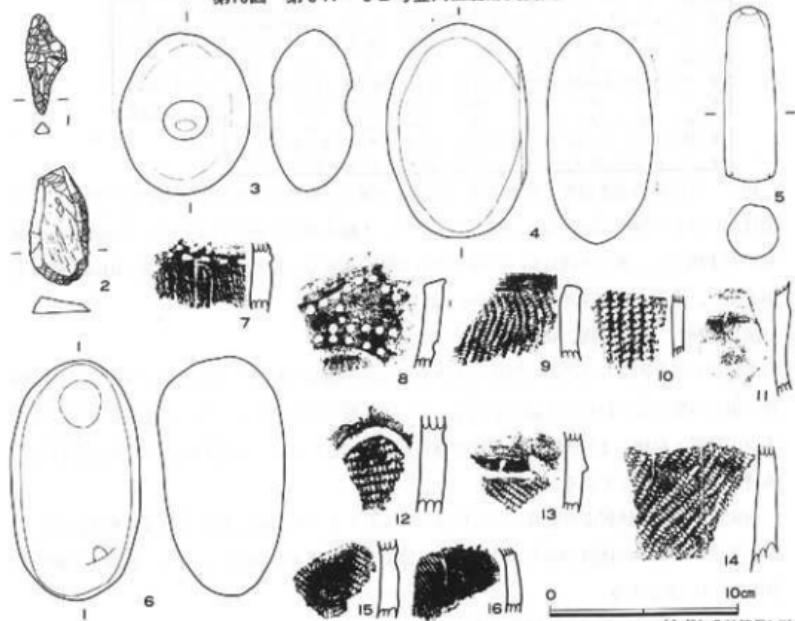
本住居ピット内より7点の土器片と1点の凹石、床面より12点の土器片を、床直からは1個体の復元可能土器と14点の土器片を出土した。また覆土からは、ダンボール1/6箱の土器片と1点の搔器・石棒、2点の石錐、3点の磨石が出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央付近に多く分布している。

408図9は、本住居中央床直より、横転しつぶれたような状態で出土した深鉢形土器で、底部を欠いている。口径24.3cmを計り、器面にはL Rの斜繩文が施されている。色調は黒褐色(10YR3/1)を呈する。

17図5の石棒は、北壁寄り覆土中位からの出土である。



第16図 第5A・5B号竪穴住居跡実測図



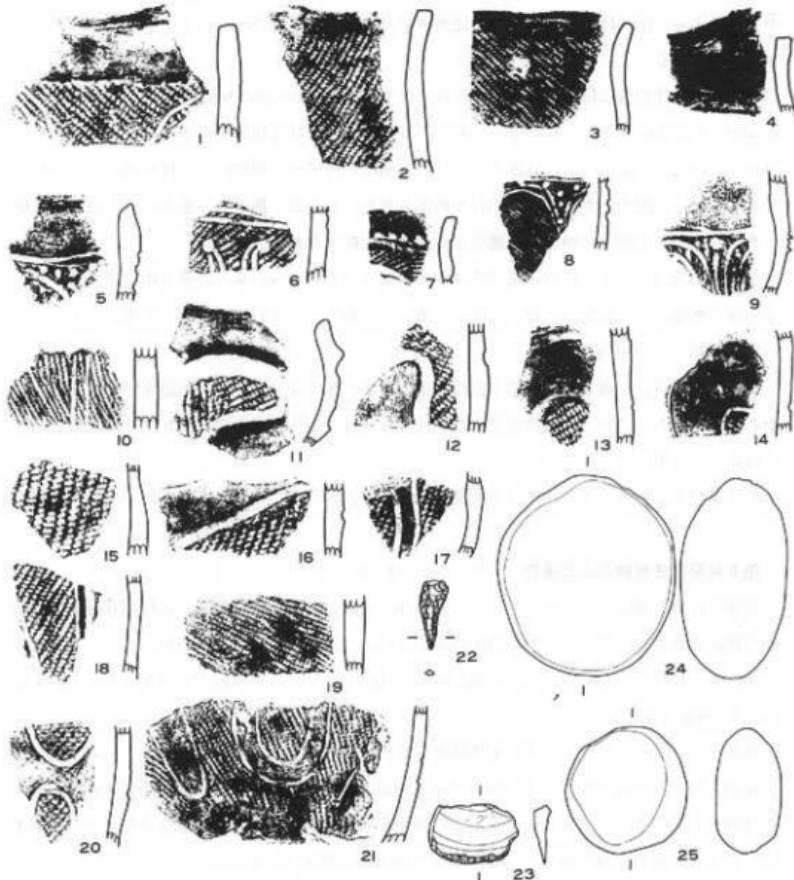
第17図 第5A号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

#### 第5B号竪穴住居跡と出土遺物（第16・18図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区のほぼ中央のC・D—15・16グリッドに位置する。前述のとおり5A号住居跡と同時にIV層上面にて確認された。

本住居跡東側が5A号住居跡、北側が7号住居跡と重複している。確認プラン及びセクションより、本住居跡は5A号住居跡より古く、7号住居跡より新しい。



第18図 第5B号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

0 10cm

〈平面形・規模〉 東壁が5A号住居跡によって切られており残存しないが、柱列及び残存壁の延長推定により、 $3.68 \times 3.54$ mの円形を呈すると考えられる。主軸方向はN-20°-E、床面積は9.36m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 黄褐色下位火山灰を多量に混入した暗褐色土の單一層であり、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層(地山)まで掘り込んで床面としている。床面は若干凹凸があるが、炉周辺から中央部にかけて非常に堅くしまっている。壁はIV・V(地山)層から成り、急な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁27.3cm、北西壁34.7cm、南西壁52.9cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡に付随すると考えられるピットはPit20-28の9個である。このうちPit20-22・28が主柱穴と考えられる。(ピット一覧は、5A号住居跡に付す)

〈炉〉 住居跡の南西壁際に位置する。 $158 \times 128$ cmの規模の不整橢円形の掘り込みと、それを2分するように配された3個の自然石が検出された。石圓部と掘り込み部から成る石圓複式炉と考えられる。石圓部に相当する部分から、焼土が検出された。

〈その他の施設〉 本住居跡南東壁際に、住居跡床面から13cmの高さの張り出し部があるが、本住居の披張部または施設、或いは他の遺構との重複等、いずれとも確認できなかった。

〈出土遺物〉 (第18図)

床面より16点、床直より5点の土器片を出土し、他に覆土より1/6箱の土器片と1点の搔器・磨石を出土した。これらの遺物を平面的に見るならば、炉周辺からの出土が多く、住居北側からはほとんど出土していない。

出土遺物より、本住居の時期は中期後葉(大木9式併行期)と考えられる。

#### 第6号竪穴住居跡と出土遺物 (第19、20、401、428図)

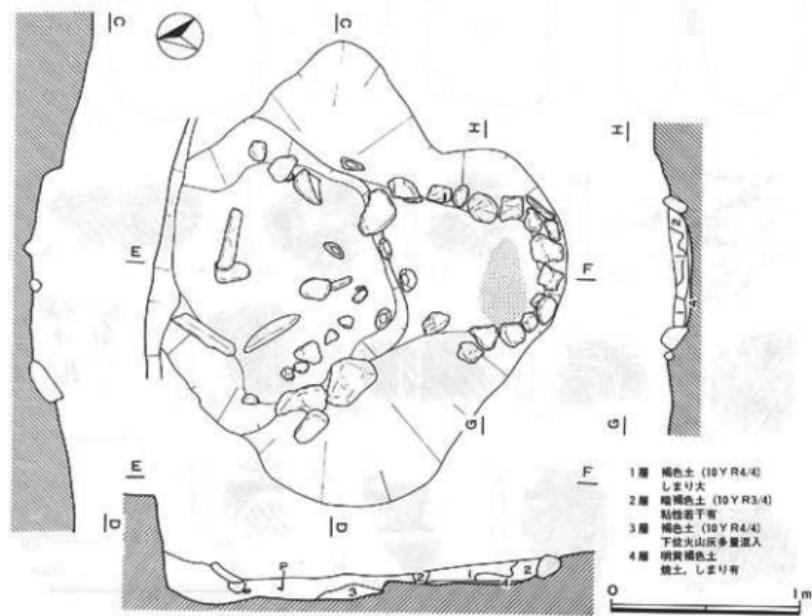
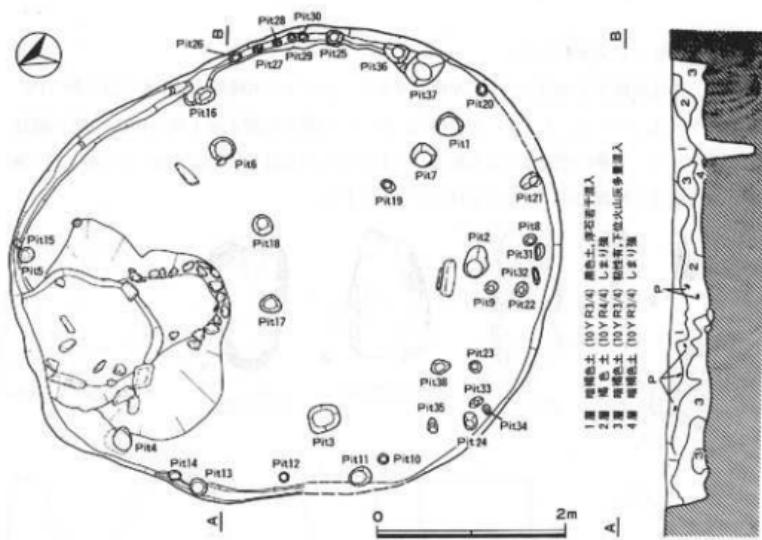
〈遺構の位置と確認〉 A1区中央のA・B-16・17グリッドに位置する。試掘調査時にIV層上面で確認された遺構である。本住居南西部で1号溝と重複、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 長軸5.88m、短軸5.00mの橢円形を呈する。主軸方向はN-4°-E、床面積は19.36m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 4層に区分できる。堆積状況より、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層(地山)まで掘り込んで床面としている。床面はやや凹凸があるが、貼床等は施されていない。壁はIV・V(地山)層から成り、南壁を除きやや急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁34.4cm、西壁42.2cm、南壁25.8cm、北壁56.1cmを計る。

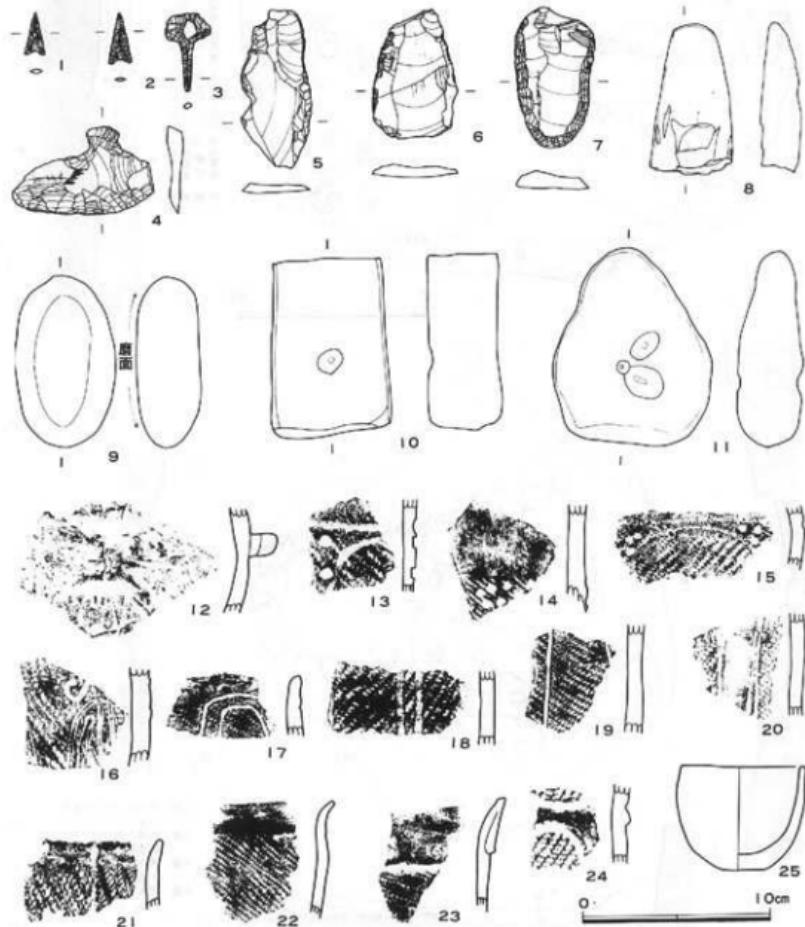
〈周溝〉 東壁から炉跡掘り込み部までと西壁部に周溝が確認された。周溝の幅は8.0-26.0



第19図 第6号竪穴住居跡実測図・同住居炉跡微細図

cm、深さは2.0~35.0cmを計る。

〈柱穴〉 本住居跡より38個のピットが検出された。このうち主軸線に対称な3対6個（Pit 1または7と2、3・6、4・5）が主柱穴、Pit 3・6間に位置する1対のPit 17・18が副柱穴と考えられる。壁際に位置する計27個のピットのうち、Pit 11~13・16・20~23・25・35・36が、その規模及び配置より、主たる壁柱穴と考えられる。



第20図 第6号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

第6号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規 模	30×14	34×16	34×18	28×20	17×15	26×24	28×25	15×12	14×13	11×10	25×20	10×10	19×17
深 さ	21.1	26.9	19.2	53.8	18.6	44.5	19.0	19.4	27.9	36.6	17.1	20.7	23.0
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	25
規 模	13×10	10×7	22×17	20×20	22×21	14×12	14×11	31×13	15×13	14×12	20×14	18×15	13×9
深 さ	16.3	7.7	24.6	16.9	10.1	27.4	29.3	28.0	32.0	24.5	4.9	12.8	5.1
Pit No.	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	
規 模	10×8	9×9	10×8	11×11	18×10	18×8	17×6	9	11×8	16×11	26×20	42×32	19×16
深 さ	2.9	8.0	5.8	2.7	6.1	2.9	5.6	7.0	5.6	14.0	12.0	12.4	

〈炉〉 住居跡の北壁際に位置する。遺存状態が悪いが、石の抜き取り痕及び石の移動状態の復元より、石囲部十掘り込み部から成る204×168cmの規模の石囲複式炉と考えられる。石囲部は、8~17cm大の自然石を100×83cmの隅丸方形に配したものであり、炉内底面下2cmほどが褐色に焼上化している。掘り込み部は168×130cmの横に長い不整椭円形を呈する。両側縁周辺に炉石と考えられる自然石が多数検出されたことから、掘り込み部両側に炉石を配していたものと考えられる。なお、掘り込み部は深く、石囲部との差は8~10cmを計る。

#### 〈出土遺物〉 (第20図、401図8、428図7)

炉内より1点の石鎌・石鋸・磨製石製品、ピット内より7点の土器片、床面より3点の土器片と1点の搔器・磨石、床直より1点の完形に近いミニチュア土器と7点の土器片を出土した。またこの他に覆土より、1/4箱の土器片、1点の石匙・磨製石斧・搔器・磨石と2点の凹石を出土した。これらの遺物を平面的に見るならば、炉周辺からの出土が多い。

401図8は、北壁際床直より出土した、ほぼ完形に近いミニチュア土器で、底径3.5cmの無文の壺形土器である。色調は、にぶい褐色(7.5YR 5/4)である。

20図12・16・23は炉底面、19・25は炉覆土、15・22は炉直上の出土土器である。

炉及び床面からの出土土器より、本住居の時期は中期後葉(大木9式併行期)と考えられる。

#### 第7号竪穴住居跡と出土遺物 (第21・22図)

〈遺構の位置と確認〉 A区中央のB・C-15・16グリッドに位置する。試掘調査時にIV層上面で不整椭円形のプランとして確認されたもので、精査の結果、2軒の住居跡の重複と判明した。本住居跡はそのうち南側に位置するものである。5B・8・11号住居跡、1号土塙と重複、本住居跡は5B・8・11号住居跡より古く、1号土塙より新しい。

〈平面形・規模〉 前述のように本遺構は他の遺構に切られ、南壁しか残存していない。残存部及び柱穴の配置等より、6.0×4.5mぐらいの規模の楕円形を呈すると推測される。主軸方向はN-24°-Eである。

〈堆積土〉 3層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層(地山)まで掘り込んで床面としている。床面は平坦で堅くしまりがある。

南壁の一部及び他の3壁は、5B・8・11号住居構築時に破壊されている。南壁の壁高は48cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 7・8号住居跡より計13個のビットが検出された。このうちPit 1~5が本住居跡に伴うもので、Pit 1~4が主柱穴と考えられる。

第7・8号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規 模	24×17	45×31	44×22	26×17	22×16	42×20	23×23	20×16	32×30	22×21	18×15	27×25	25×17
深 さ	26	17	43	30	12	24	39	50	9	30	10	25	39

〈炉〉 住居跡南西壁に接する。石囲部+掘り込み部から成る176×122cmの規模の石囲複式炉と思われるが、炉石は抜き取られており、掘り込みしか検出されなかった。掘り方は、中央側のものが88×70cmの楕円形、壁に接するものが80×122cmの横に長い楕円形である。いずれからも焼土は確認されなかった。

〈出土遺物〉 (第22図)

その大部分を8号住居構築により消失しているため、本住居の出土遺物は少なく、床面、床直より数点の土器片を出土し、他に覆土より50~60点の土器片と1点の石鏃・搔器を出土したのみである。これらの遺物は、平面的には南北側に多く分布している。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

#### 第8号竪穴住居跡と出土遺物 (第21, 23, 399, 401図)

〈遺構の位置と確認〉 A1区中央のB・C-15・16グリッドに位置する。7号住居跡と同時にIV層上面で確認された。7・11号住居跡、1号土壤と重複し、本住居跡は11号住居跡より古く7号住居跡、1号土壤より新しい。

〈平面形・規模〉 西壁及び南壁の大部分が7・11号住居跡と重複するため不明瞭であるが、炉跡の位置及び住穴の配置より(5.63)×(4.4)mの楕円形を呈すると考えられる。主軸方向はN-27°-E、床面積は(14.96)m<sup>2</sup>である。

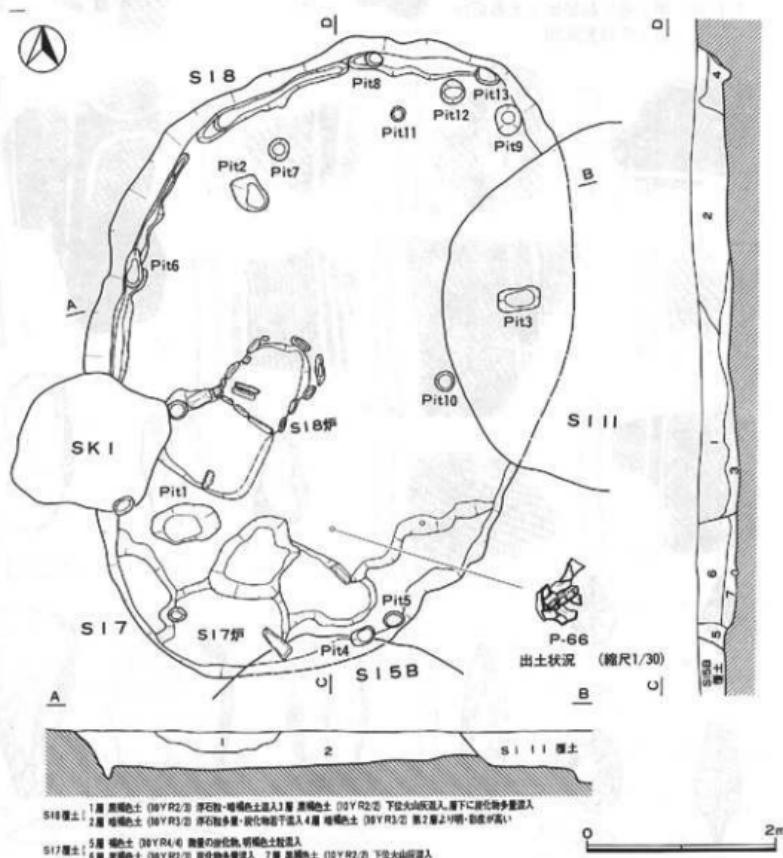
〈堆積土〉 4層に区分できる。その堆積状況より、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 7号住居跡と同一レベルの床面である。V層（地山）まで掘り込んで床面としており、若干凹凸がある。北壁及び西壁はIV・V（地山）層から成り、その壁高は西壁41cm、北壁31cmである。南壁及び東壁の11号住居跡との重複を除く壁は、7号住居跡の覆土から成ると考えられるが、本住居跡の覆土と近似するものであり、また床面の高低差がないことから、明確なプランを確認することができなかった。

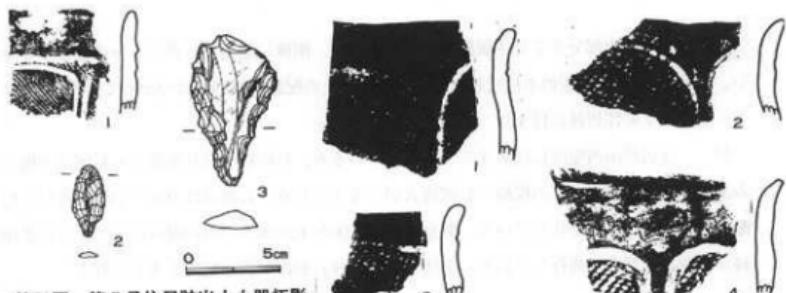
〈周溝〉 北東壁から西壁にかけて、幅9~23cm、深さ13~20cmの周溝がほぼ半周する。

〈柱穴〉 その大部分を7号住居跡と重複するため、明確に遺構ごとのピットの分類ができない。Pit 6～10が本住居の主柱穴と考えられるが、その配置の規則性はつかめていない。(ピット一覧は、7号住居跡に付す)

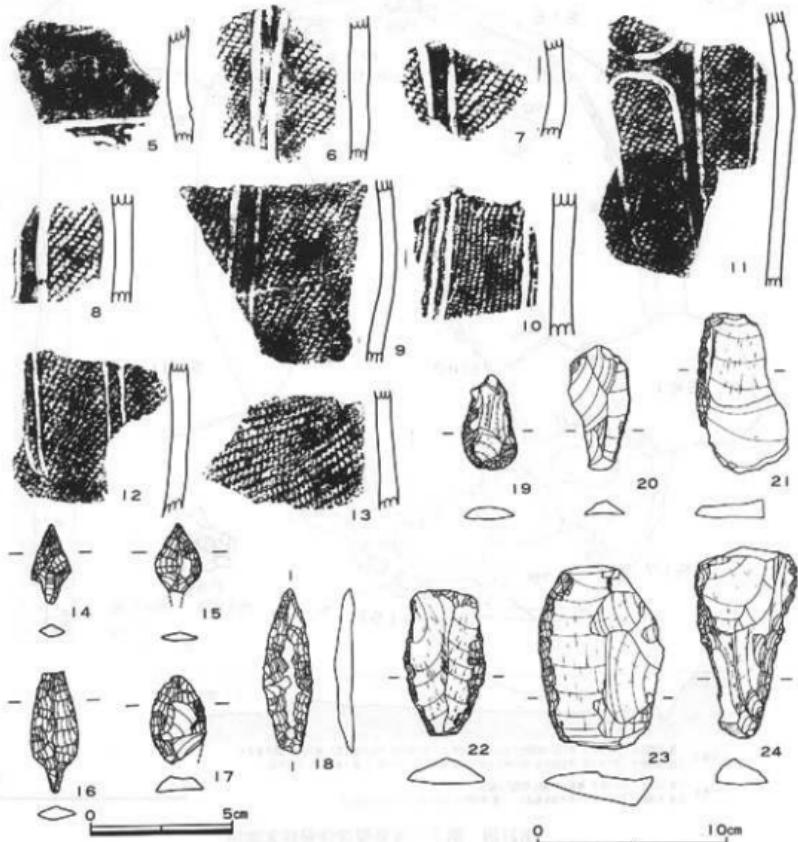
〈炉〉 住居跡南西壁際に位置する。半壊しているが、石の抜き取り痕等から石囲部十掘り込み部より成る182×120cmの規模の石囲複式炉と考えられる。石囲部は102×84cmの方形に石を配し、底面が若干焼土化している。掘り込み部は90×120cmの台形の掘り込みで、その北西側縁に1個の自然石が残存していた。全体として「匂」形の炉石の配置と考えられる。



第21図 第7・8号竪穴住居跡実測図



第22図 第7号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第23図 第8号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

〈出土遺物〉 (第23図, 399図8, 401図13)

床面より1個体の復元可能土器と深鉢形土器口縁部の他に5点の土器片、ピット内より5点の土器片と1点の石鏃・搔器、床直より3点の土器片を出土した。他に覆土中より1個の完形に近いミニチュア土器、170~180点の土器片、1点の石槍、3点の石鏃、4点の搔器を出土した。これらの遺物は、平面的には北東壁から北西壁にかけて多く分布している。

399図8は、が東側床面で横転しつぶれたような状態で出土した深鉢形土器で、口径2.4cmを計る。横位連続刺突文により区画された胴部に、沈線による「匚」文と1条の懸垂文を交互に施文し、口縁部は無文、胴部の地文はR L斜繩文である。胎土には砂粒を混入、焼成はやや良好で、色調はにぶい黄色(2.5Y6/3)を呈する。401図3は、南壁寄りの覆土中位より出土した完形に近いミニチュア土器で、口径5cm、底径2cm、器高4.5cmの鉢形を呈する。器面にはほぼ継位の沈線文を施し、色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉(大木9式併行期)と考えられる。

第9号竪穴住居跡と出土遺物 (第24~28, 400, 404, 421, 423, 427, 428図)

〈造構の位置と確認〉 A1区中央よりやや南寄りのC・D・E-17・18・19グリッドに位置する。試掘調査時にIV層上面において、8×6m前後の楕円形のプランとして確認された。

12・58・116号住居跡、12号土壙、及び1・2号溝と重複、本住居跡は1・2号溝より古く、他の造構より新しい。

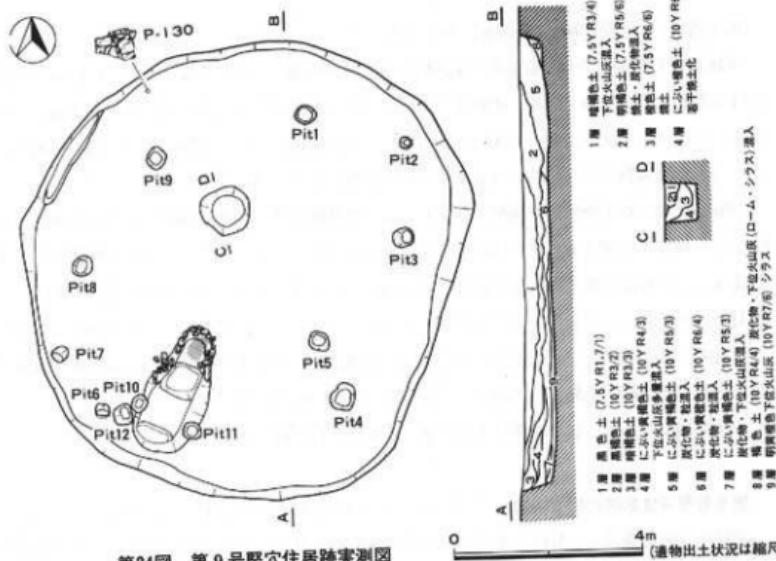
〈平面形・規模〉 長軸9.88×9.04mの円形を呈する。主軸方向はN-32°-E、床面積は73.28m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 9層に区分され、レンズ状の堆積で、その土質からも自然堆積と考えられる。

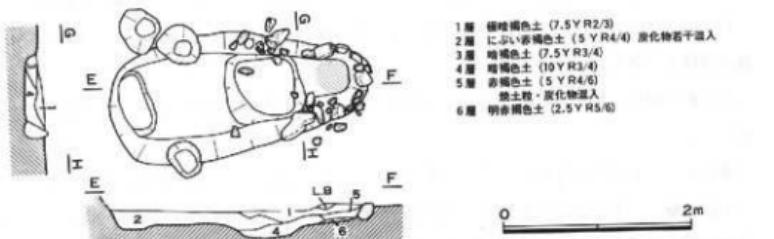
〈床面・壁〉 中央部より南東側は下位火山灰(シラス)、他は下位火山灰(地山・ローム)まで掘り込んで床面としている。床面は全体的に平坦であるが、シラスを床面とする部分はしまりがなくやわらかい。壁は重複部分においては各住居・土壙の堆積土、他はIV・V層から成り、ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は、東壁53.8cm、西壁61.6cm、南壁53.1cm、北壁65.1cmを計る。

〈周溝〉 北西壁に長さ2.4m、幅34cm、深さ31cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉 本住居跡より12個のピットが検出された。このうち、Pit 1・3・4・8・9を主柱穴とし、主軸線上のPit 1と、この軸線に対称な2対4個(Pit 3・9, Pit 4・8)の計5個を基本とする柱配置と考えられる。また、掘り込み部の両側に位置する1対のピットは、その配置より副柱穴と考えられる。



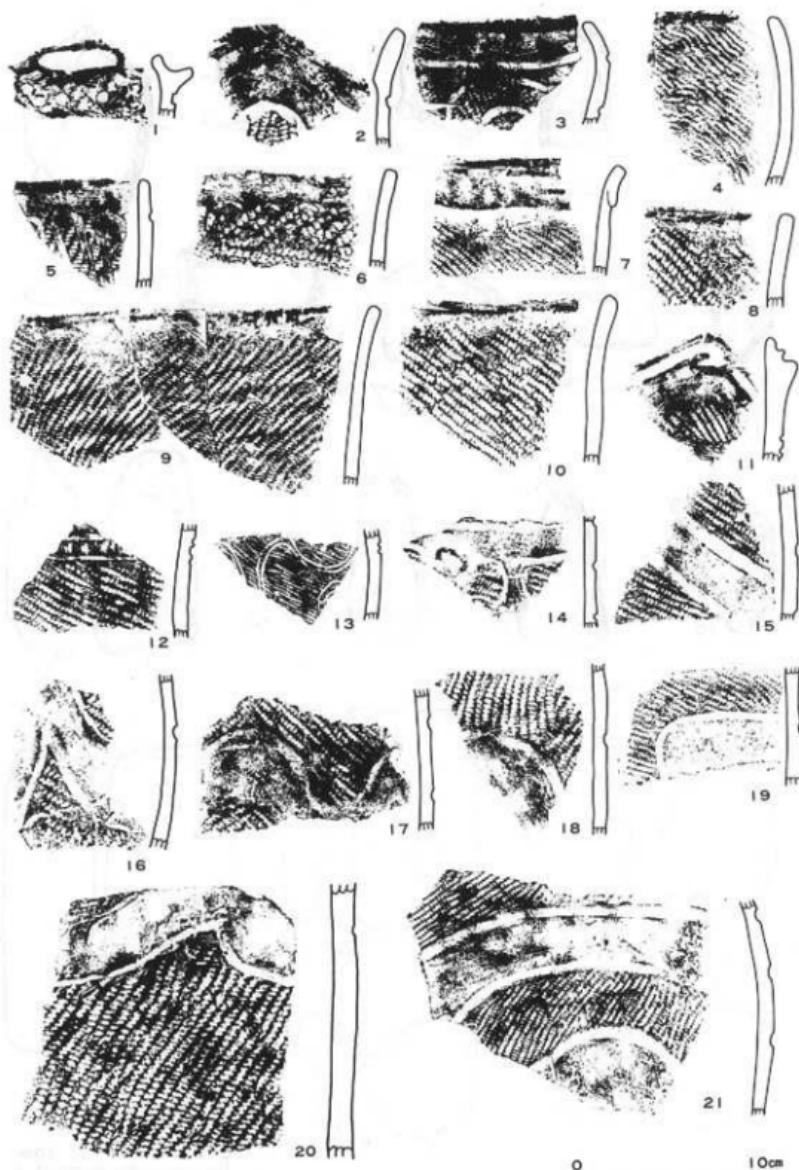
第24図 第9号竪穴住居跡実測図



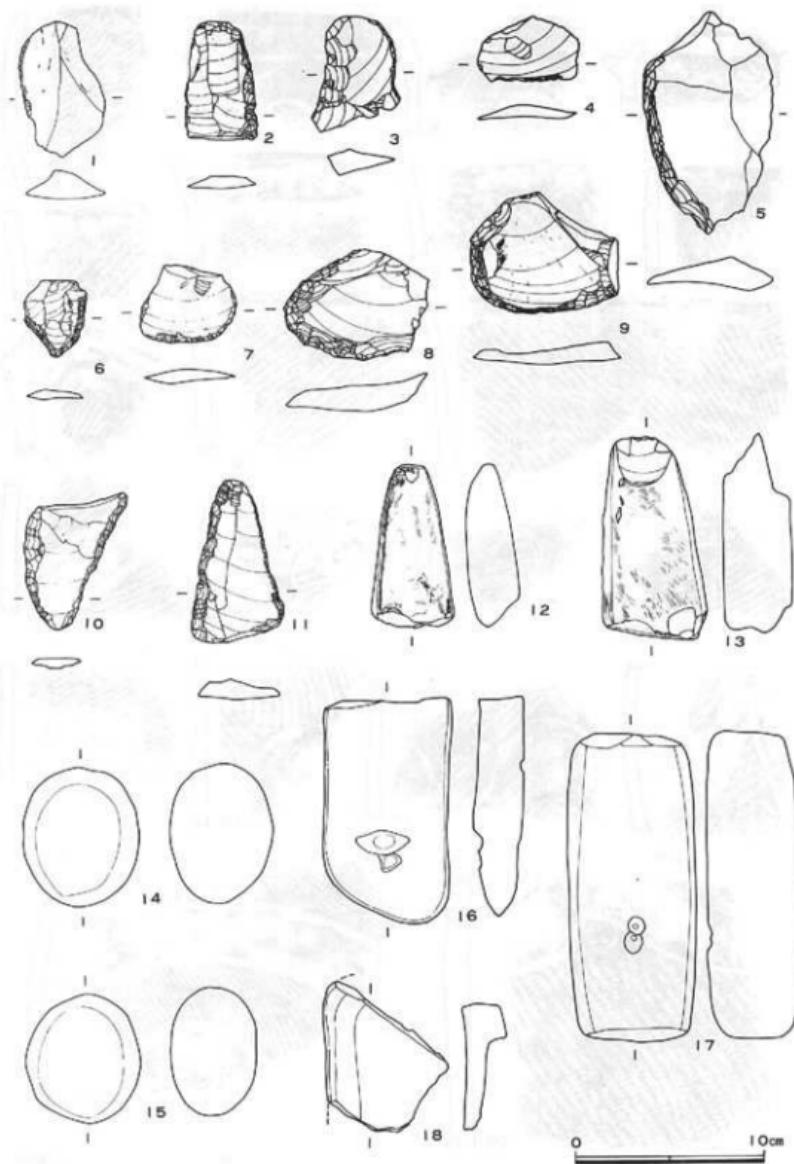
第25図 第9号住居跡微細図



第26図 第9号住居跡出土石器実測図(1)



第27図 第9号住居跡出土土器拓影図



第28図 第9号住居跡出土石器実測図(2) (ただし18は縮尺2/9)

第9号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規 模	47×36	23×16	47×41	55×53	41×36	30×22	44×29	41×36	45×40	36×28	40×36	43×40
深 底	37.5	21.8	46.1	61.5	30.9	43.4	43.2	52.3	36.4	34.3	28.9	39.7

〈炉〉 住居南西壁際に位置する。石囲部（II）の遺存状態が悪いが、石囲部（I）+石囲部（II）+掘り込み部より成る2.8×1.4mの規模の石囲複式炉である。石囲部（I）と石囲部（II）の境界に炉石はほとんど残存しないが、本来閉じていたものと考えられる。石囲部（I）の中央部は径35cmの円形、4cm程度の深さで焼土化している。石囲部（II）の掘り方は、石囲部（I）の焼上面より20cmほど低くなっている。

〈出土遺物〉 （第26～28図、400図7、404図9・10、421図3～5、423図1～14、427図1、428図9）

本住居の出土遺物は多く、ダンボール箱5箱にも及ぶ。また、円盤状土製品を初めとする土製品、石製品の出土量が他の住居跡に比べ、非常に多い点が特異である。床面からは3個体の復元可能土器、100点弱の土器片、2点の石錐、3点の搔器・円盤状土製品、床直より3個の復元可能土器、60数点の土器片、1点の石匙・石皿・碗状石製品、3点の円盤状土製品を出土した。また炉内からは、20数点の土器片、1点の石錐・搔器、Pit 1より10数点の土器片と1点の磨石を出土した。この他に覆土中より3 1/2箱の土器片、1点の石匙・凹石・有孔石製品、2点の石錐、3点の磨製石斧・スタンプ状土製品、5点の搔器・磨石、8点の円盤状土製品を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央部から南西側にかけて多く分布している。

400図7は、中央床直出土の2つの大波状口縁の深鉢形土器で、口径22.2cmを計る。胴上部の波状沈線文により区画された口縁部に、磨消繩文による縦位横円文と「U」文を交互に施文、横円文には刺穴文が伴う。地文はL R斜繩文であり、色調は黒褐色(10YR3/2)である。389図9は、北壁際覆土中位出土の小型深鉢形土器で、底径4.1cmを計る。器面にはL Rの斜繩文を施文、色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)である。389図10は、中央床面出土の小型深鉢形土器で、底径4.1cmを計る。器面にはR L斜繩文を施文、胎土には小礫・砂粒を混入、色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。

407図1は北西壁寄り、3は西壁寄り、8は南壁際床面出土の円盤状土製品である。28図18の石皿は、中央床直上からの出土である。27図12・18・21は炉底面、1・3・4・6・10・19・20は床面、8・15は床直上からの出土土器である。

炉及び床面の出土土器より、本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。

#### 第10号竪穴住居跡と出土遺物（第29、30、33、423図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央のC-18グリッドに位置する。IV層中面にての確認である。

2号溝と重複関係にあり、本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 3.32×2.84mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-7°-W、床面積は7.28m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 2層に区分できる。堆積土の土質、混入物より人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層(地山)まで掘り込んで床面としている。床面は若干凹凸があるが、全域に渡り堅くしまっている。壁はIV・V(地山)層から成り、45~60°の傾斜の立ち上がりを呈する。壁高は東壁17.4cm、西壁29.6cm、南壁20.5cm、北壁20.4cmを計る。なお、北壁・南壁の一部を2号溝により破壊されている。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 北東壁際と中央より南東寄りから2個のピットしか検出されず、柱配置については不明である。

第10号竪穴住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2
規 模	36×32	22×22
深 さ	30.0	16.9

〈炉〉 検出できなかった。

〈出土遺物〉 (第30、33図、423図15)

ピット内より4点、床面より数点の土器片、床直より10数点の土器片と1点の磨石を出土した。他に覆土より、1/6箱の土器片、1点の円盤状土製品と3点の搔器を出土した。これらの遺物を平面的に見ると、住居中央より東壁側にかけて多く分布している。

30図5・9・11は、床直上からの出土である。

床面及び床直上からの出土土器より、本住居の時期は、中期後葉と考えられる。

#### 第11号竪穴住居跡と出土遺物 (第31、32、34、395、401、409、426、428図)

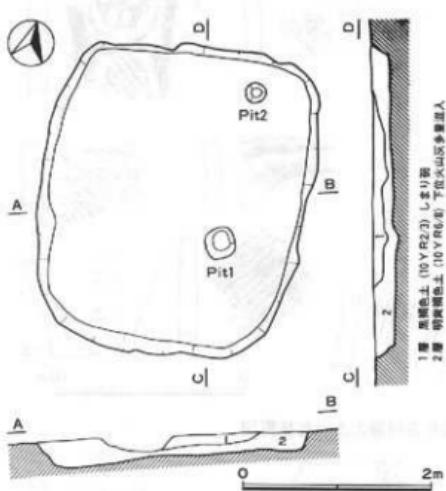
〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央部のB・C-16グリッドに位置する。VI層上面での確認である。

7・8号竪穴住居跡、1号溝と重複、本住居跡は1号溝より古く、7・8号住居跡より新しい。

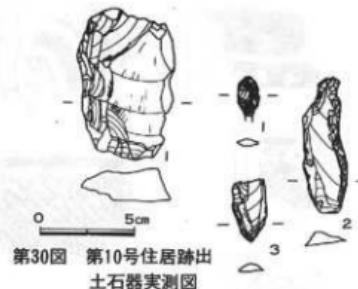
〈平面形・規模〉 4.29×4.24mの円形を呈する。主軸方向はN-33°-E、床面積は10.29m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 暗褐色土の單一層であり、人為堆積と考えられる。

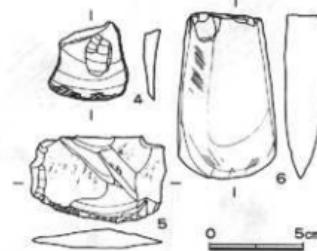
本住居跡下に、ほぼ本住居跡と同プランの掘り方を有する。か跡・柱穴等が検出されなかつたことより、本住居跡の掘り方としたが、この覆土に多数の土器片が混入していること、掘り方としては深すぎることから、一住居跡の可能性もある。この部分は5層に区分でき、人為堆積を呈し、堅くしまりが大である。



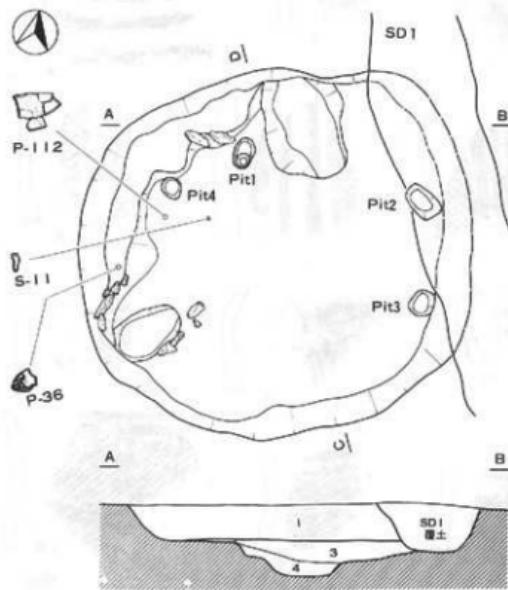
第29図 第10号竪穴住居跡実測図



第30図 第10号住居跡出土土石器実測図



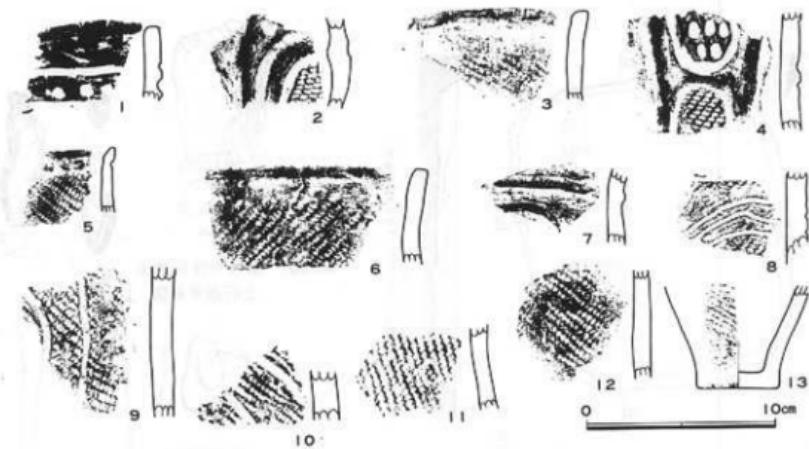
第31図 第11号住居跡出土石器実測図



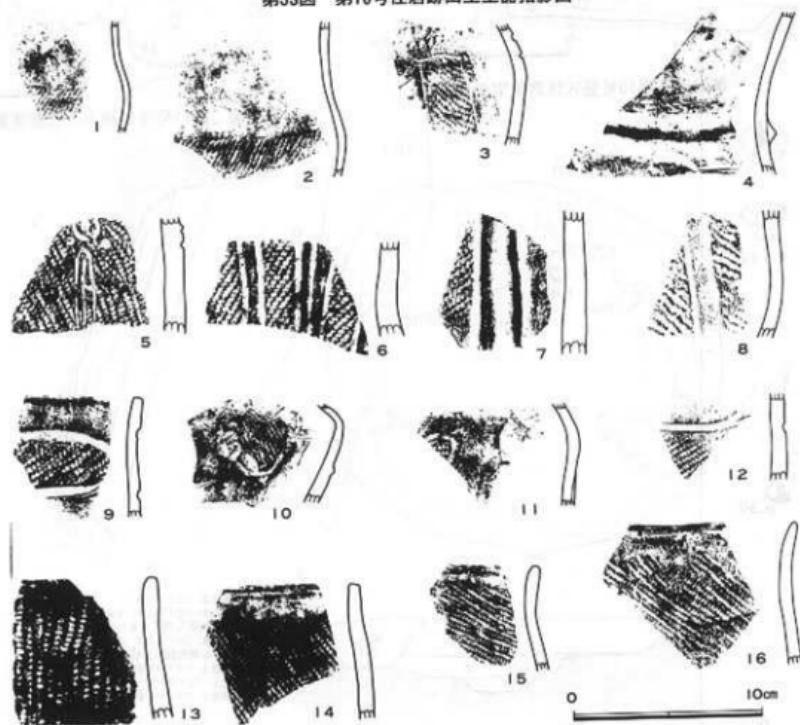
第32図 第11号竪穴住居跡実測図

(遺物出土状況は縮尺1/30)

- 1層 暗褐色土 (10YR 2/4)
- 2層 暗褐色土 (10YR 2/4) 下位火山灰ブロック・  
炭化物混入、堅くしまり大
- 3層 暗褐色土 (10YR 2/4) 2層より明・剥離高く、  
にぶい黄褐色粘土を混入
- 4層 暗褐色土 (10YR 3/4) 下層に粘土を多く含む
- 5層 黄褐色土 (10YR 4/6) 6層粘土を混入
- 6層 黄褐色土 (10YR 5/8) 粘土層



第33図 第10号住居跡出土土器拓影図



第34図 第11号住居跡出土土器拓影図

〈床面・壁〉 暗褐色土を床面とする。床面はほぼ平坦で、堅くしまりがある。壁は、西側の重複部分は7・8号住居跡覆土、他の壁はIV・V層より成り、いずれの壁も緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁31cm、西壁25cm、南壁33cm、北壁36cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 床面が暗褐色土であるため、柱穴の検出には困難を喫し、4個のピットしか検出できなかった。

第11号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4
規 模	32×22	40×25	30×25	22×20
深 さ	24	13.5	19	13.5

〈が） 南西壁下に10~32cm大の自然石の列と、76×49cm、深さ18cmの掘り込みが検出された。石囲炉または石囲複式炉と想定されるが、崩壊が著しく詳細は不明である。

〈出土遺物〉 （第31、34図、395図14、401図34、409図1、426図9、428図3）

ピット内より2点、床面より1個体の復元可能土器と数点の土器片、床直より2個体の復元可能土器と10数点の土器片を出土した。この他に覆土より2個体の復元可能土器、1/2箱の土器片、1点の石鎌・石匙・磨製石斧、2点の有孔石製品、3点の搔器を出土した。

395図14は、西壁寄り覆土上位出土の4つの小突起をもつ小型深鉢形土器で、口径9.0cm、底径4.3cm、器高10.3cmを計る。口縁部下半より胴下半にかけ、磨消繩文による「匚」文、綴位梢円文を施し、地文はL R斜繩文、色調は灰黄褐色(10YR 5/2)である。386図34は、南西壁寄りの床直上より出土の深鉢形土器と思われる土器の底部で、底径4.0cmを計る。「C」字文と考えられる区画内に、L斜繩文を充填、胎土には小礫・砂粒を混入、色調は浅黄橙色(10YR 8/3)である。409図1は、西壁寄り覆土中位出土の深鉢形土器で、口径17.6cm、底径7.0cm、器高24.1cmを計る。口縁部下半から胴部にかけ、L Rの斜繩文を施し、色調は灰褐色(7.5YR 6/2)である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

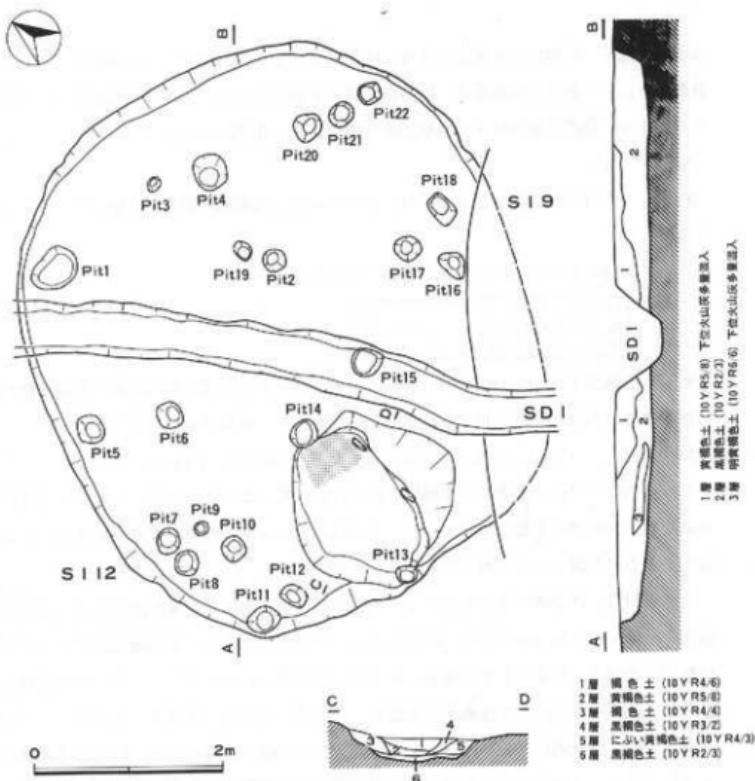
第12号竪穴住居跡と出土遺物（第35~37、407、427図）

〈造構の位置と確認〉 A1区ほぼ中央のC-16~18、D-17・18グリッドに位置する。試掘調査時、IV層上面にて確認された造構である。9号住居跡、1号溝と重複、本住居跡が最も古い。

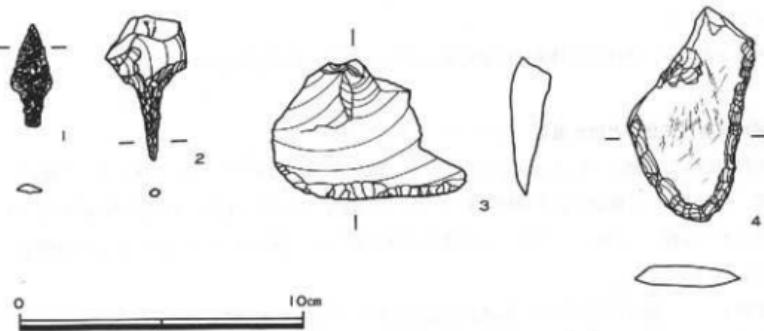
〈平面形・規模〉 5.96×(5.2)mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-26°-E、床面積は26.08m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 3層に区分できる。堆積状況及び堆積土より、人為堆積と考えられる。

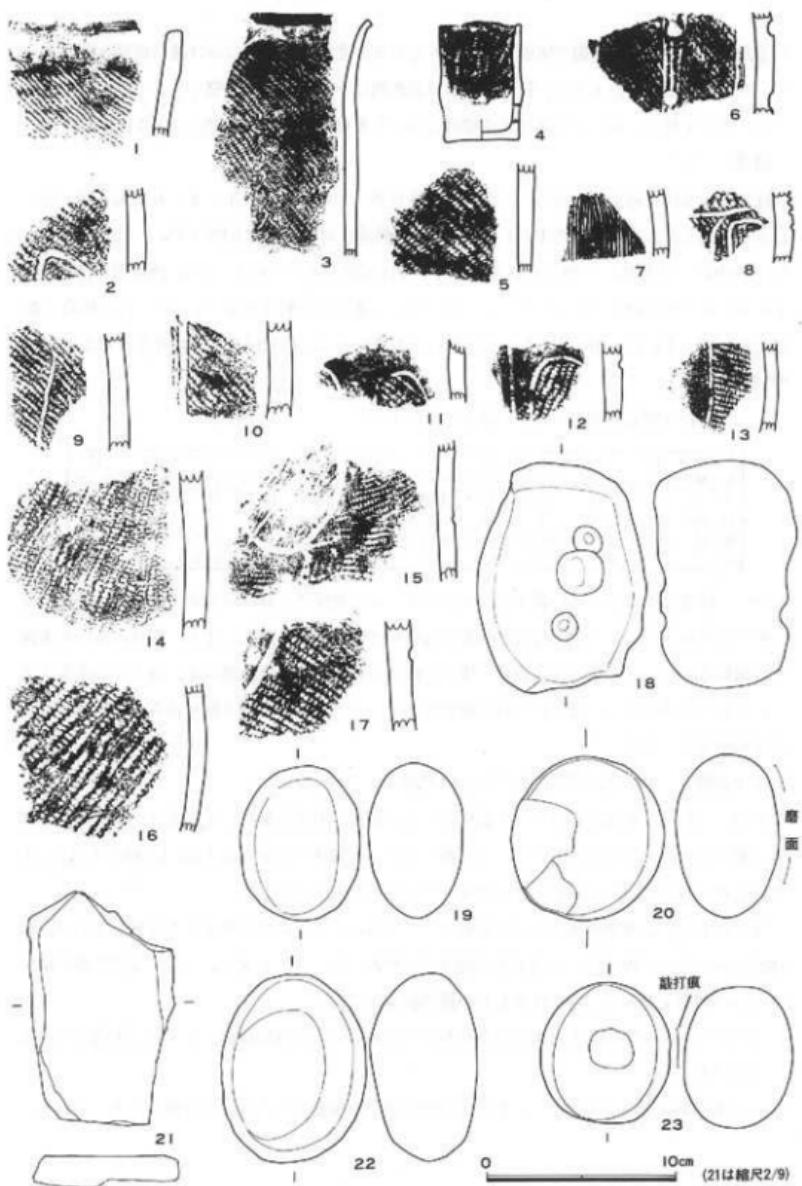
〈床面・壁〉 V層まで掘り込んで床面としている。北西方向に走る1号溝により、南東壁か



第35図 第12号竪穴住居跡実測図



第36図 第12号住居跡出土石器実測図(1)



第37図 第12号住居跡出土土器拓影図・石器実測図(2)

ら北西壁まで50~56cmの幅で床面が破壊されている。北西から南東にかけ緩い傾斜となっている。全体的にしまりがあるが、特に中央より北西側にかけての床面が堅くしまっている。

壁はIV・V層から成り、壁高は北東壁31.7cm、北西壁52.2cm、南西壁21.6cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より22個のピットが検出された。このうちPit 1・4・6・10・13・16・21を主柱穴とし、主軸線上のPit 4・13と、その軸線に対称な3対6個（Pit 1・21, Pit 6・16, Pit 10・（未検出））の計8個を基本とする柱配置と考えられる。また、西壁際に位置するPit 6・9・10・12とPit 5・7・8・11とは、ほぼ並列の配置となっている。この傾向は東壁において、Pit 17・20とPit 18・22においても見られる。出入口や間仕切り等を考えさせる配列である。

第12号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規 模	54×43	24×23	19×12	10×34	35×30	30×25	29×23	38×35	16×14	28×26	37×29
深 さ	20.3	5.7	9.5	34.0	19.1	35.3	23.7	12.4	17.2	32.5	11.9
Pit No.	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
規 模	29×20	22×14	30×27	40×30	39×27	28×27	36×26	24×19	34×29	30×28	27×25
深 さ	25.4	30.3	7.3	35.0	39.0	7.4	45.5	28.9	29.9	30.4	16.7

〈炉<sup>ア</sup>〉 住居跡南西壁際に位置する。1.8×1.3mの規模で、18cmの深さの主軸方向に長い楕円形の掘り込みと、その東側縁に20cm大の自然石2個が検出された。また、掘り込みの北東側（住居跡中央側）に60×42cmの範囲で焼土が確認された。遺存度が悪いが、焼土が偏在すること、2個とは言え炉石と見られる石が検出されたことから、石開部+掘り込み部から成る石団複式がとされる。

〈出土遺物〉 （第36、37図、407図6、427図4）

炉内より19点、床面より11点の土器片と1点の磨石・有孔石製品、床直より2個体の復元可能土器と23点の土器片を出土した。また覆土より、1個体の復元可能土器、1/3箱の土器片、1点の石鑿・石錐・凹石・石皿、2点の搔器と4点の磨石を出土した。

407図6は、北東壁際床直より、横転してつぶれたような状態で出土した深鉢形土器で、口径25.2cmを計る。折り返し口縁下から胴部に、沈線による「匁」文と、「匁」文間上部に縦位の3つの刺突文を施文、地文はR L Rの複節斜纏文である。

427図4は、東壁寄り床面出土の有孔石製品である。37図11は床面、5・6は床直からの出土土器である。

床面及び床直の出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

### 第13号竪穴住居跡と出土遺物（第38、39、40、396、408、409、427図）

〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央のA・B-17・18グリッドに位置する。IV層中面において、2軒の住居跡の重複として瓢箪形プランで確認されたもので、本遺構は南東側の住居跡である。14号住居跡、8号上塙、2号溝と重複、本住居跡は2号溝より古く、他の遺構より新しい。

〈平面形・規模〉 4.00×3.74mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-7°-E、床面積は10.52畝である。

〈堆積土〉 4層に区分できる。レンズ状の堆積土及び堆積状況より、自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 テラスを有する二段構造で、床・テラス面ともV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは、炉跡と北側の一部を除いた壁際に一巡するように位置する。その規模は48~70cmの幅で、壁際から住居の中央部へ緩く傾斜し、床面から10~20cmの高さにある。テラス面から本住居跡確認面までの高さは、南東壁で25.9cm、南西壁で57.9cmを計る。床面はややレンズ状で中央部が低く、中央部は非常に堅くしまっている。北壁の大部分と西壁の北半は14号住居跡覆土より、他の壁はIV・V層より成る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 13・14号住居跡より計20個のピットが検出された。このうち本住居跡に付随するピットは、Pit 2~10である。Pit 2または6・3・5・8または11・10を主柱穴とし、長軸線上のPit 8または11と、4壁際に位置する軸線に対称な2対4個（Pit 2または6・10、Pit 3・5）の計5個を基本とし、これに炉掘り込み部両側のPit 4・7を加えた7個より成る柱配置と考えられる。また、Pit 2または6・3~5・7・8または11・10を主柱穴とし、長軸線上のPit 4・8または11と、軸線に対称な3対6個（Pit 2または6・10、Pit 3・7、Pit 5・（未検出））の計8個を基本とする柱配置も考えられる。後者の方が平面的には整っているが、軸線が炉軸より若干ずれること、Pit 7が浅いことに疑問が残る。

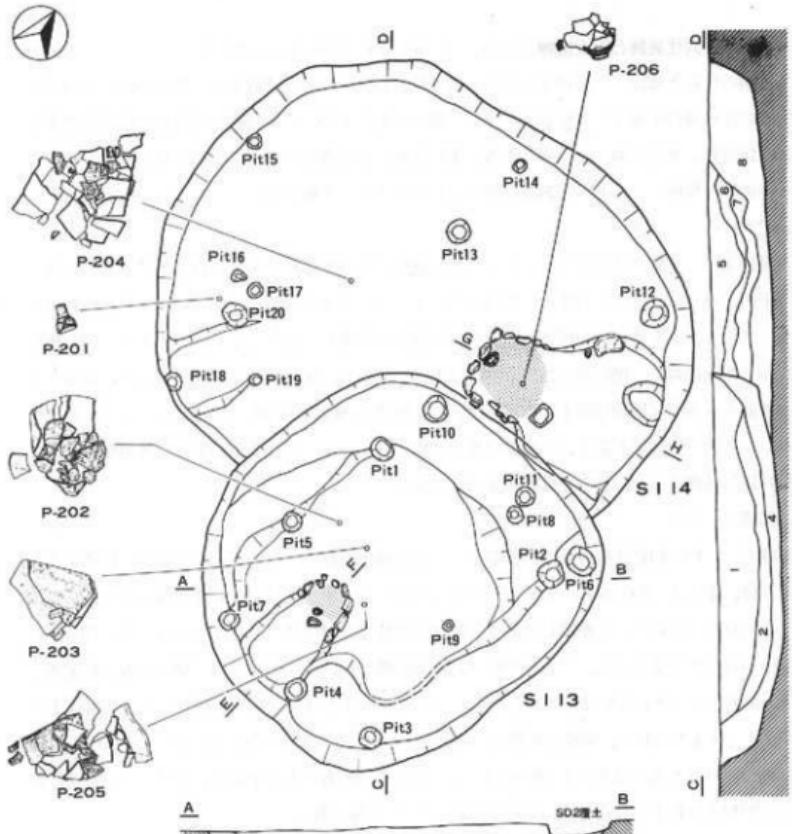
第13・14号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規 模	26×20	28×26	26×26	28×22	25×20	30×28	20×14	18×18	10×10	28×26
深 き	35.4	40.6	28.0	49.6	19.6	27.8	7.3	11.9	14.1	45.8
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
	22×20	30×28	27×26	16×14	14×14	16×12	18×14	18×18	14×10	30×24
深 き	22.5	19.3		17.6	24.6	18.8	6.0	15.2	20.7	39.7

〈炉〉 住居跡南壁に接する。石開部十掘り込み部から成る134×80cmの規模の石開複式炉である。石開部は9~19cm大の自然石を「U」状に配したもので、炉内底面は全域にわたり2~3cmほど橙色に焼土化している。

〈出土遺物〉（第39図、40図10、396図8、408図6、409図8・11、427図5）

床面より1個体の復元可能土器、13点の土器片、1点の有孔石製品、床直より2個の復元可



S113埋土

- 1層 黒褐色土 (10Y R3/3)
- 2層 増褐含土 (10Y R2/2) 明黄褐色下位火山・黒色土混入
- 3層 に少々黄褐色土 (10Y R5/4) 粒子が粗く、粘性・しまりなし
- 4層 増褐含土 (10Y R3/3) 下位火山灰多量混入

S114埋土

- 5層 増褐含土 (10Y R3/4) 下位火山灰ブロック若干混入
- 6層 増褐含土 (10Y R3/3)
- 7層 黒褐色土 (10Y R2/2) 下位火山灰混入、炭化物微量混入
- 8層 增褐含土 (10Y R3/3) 下位火山灰多量混入、炭化物を7層以上混入

E S113炉跡セクション図 F



- 1層 棕色土 (7.5Y R6/6) 焼土

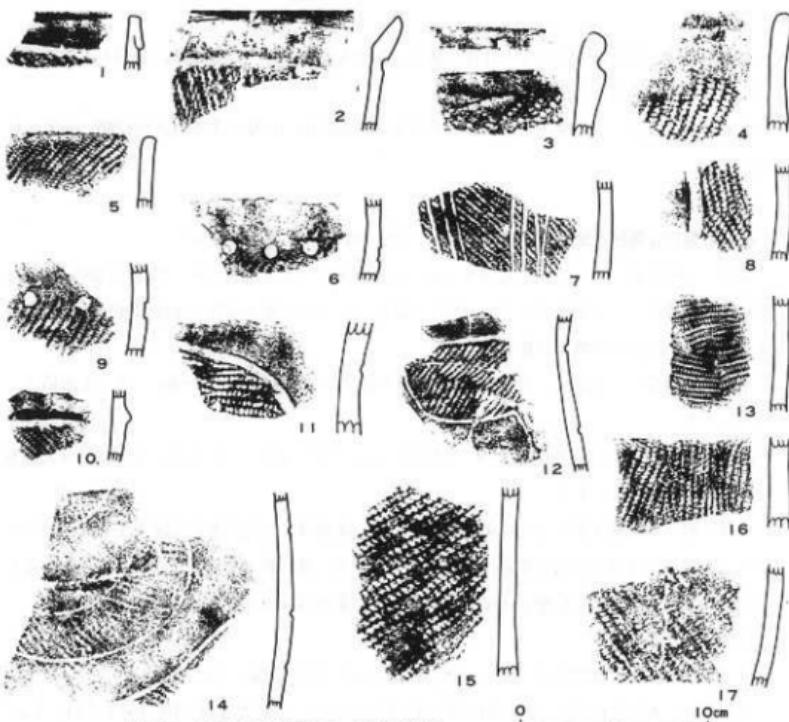
G S114炉跡セクション図 H



- 1層 増褐含土 (10Y R3/4) 増黄褐色土を多量混入
- 2層 黑褐色土 (10Y R2/3) 炭化物微量混入
- 3層 棕色土 (7.5Y R6/6) 焼土

O 2m (遺物出土状況図は縮尺1/30)

第38図 第13・14号竪穴住居跡実測図



第39図 第13号住居跡出土土器拓影図

能土器と10数点の土器片、覆土より1個体の復元可能土器、1/4箱の土器片、1点の搔器を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央から東壁寄りにかけての分布が多い。

396図8は、南東壁際床面出土の広口壺形土器で、横位沈線文と波状沈線文により区画された口縁部下半から胴上半部に磨消繩文による楕円形文を施し、地文はR L斜繩文、色調はにぶい褐色(7.5Y R 5/3)を呈する。408図6は、住居中央床直上からの出土の、若干胴上部が張り出る深鉢形土器で、口径28.5cm、底径11.0cm、器高49.5cmを計る。口縁部下半から胴下半までR L斜繩文を施し、色調は黒褐色(7.5Y R 3/1)である。409図8は、覆土中位出土の復元可能土器で、口径29.6cmを計る。器面にはR L斜繩文を施し、胎土には小礫・砂粒を混入、焼成はやや不良、色調は暗赤褐色(5 Y R 3/2)である。409図11は、住居中央床直上から横転しつぶれたような状態で出土した。口縁部が内側する深鉢形土器で、口径26.3cm、底径11.1cm、器高39.9cmを計る。器面にはR L斜繩文を施し、底面には網代痕を有する。器表面口縁部から胴上半にすすを付着、色調はにぶい橙色(5 Y R 6/3)を呈する。

427図5は、西壁寄床面出土の有孔石製品、39図6・9・10・13は床面、39図4・7・11・17、40図10は床直からの出土土器である。

床面及び床直上からの出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

#### 第14号竪穴住居跡と出土遺物（第38、40～42、401、409、423、426図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央のA・B-17・18グリッドに位置する。13号住居跡と同時にIV層中面で確認された造構である。13号住居跡、7・70号土壙と重複、本住居跡は13号住居跡より古く、7・70号土壙より新しい。

〈平面形・規模〉 5.7×(4.7)mの楕円形を呈する。主軸方向はN-88°-W、床面積は、19.4m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 4層に区分できる。5～7層までレンズ状に堆積しているが、土質及び混入物等より人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。床面は、中央部が最も深くなる若干のレンズ状で、中央部付近の床面が非常に堅くしまっている。壁はIV・V層より成り、やや急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁47.6cm、西壁50.2cm、北壁51.6cmを計る。

#### 〈周溝〉 なし

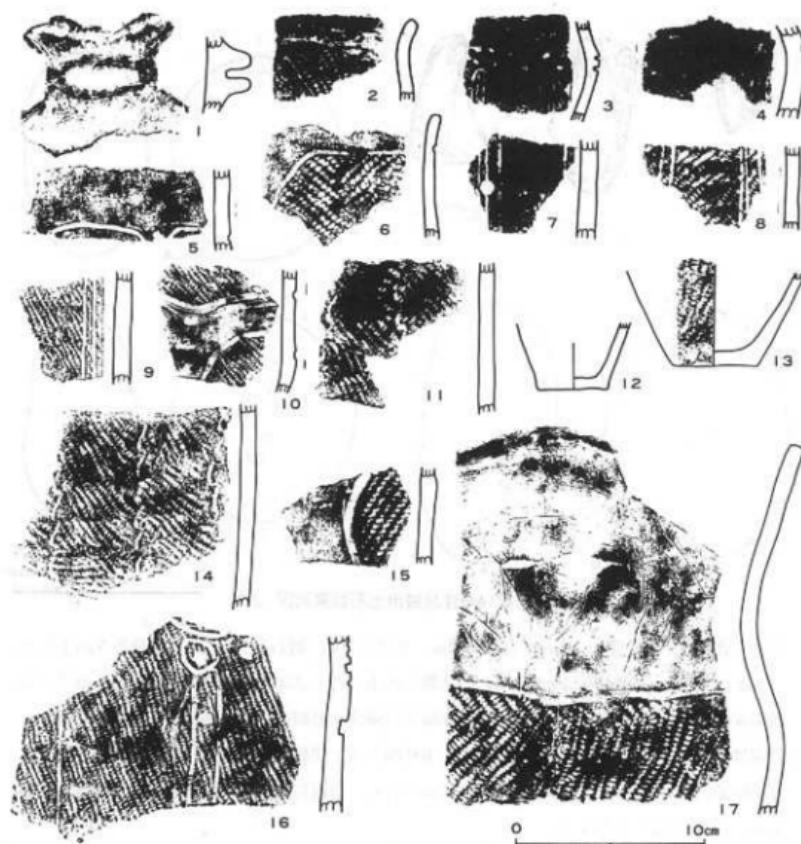
〈柱穴〉 本住居跡に関連するピットは、Pit 1・11～20の11個である。このうち、Pit 1・8・12・14・15・20を主柱穴とし、主軸線上のPit 15と、軸線に対称な3対6個（Pit 1・14、Pit 8・12、Pit 20・（未検出））の計7個を基本とする柱配置と考えられる。（ピット一覧は、13号住居跡に付す）

〈炉〉 住居跡東壁に接する。石團部+掘り込み部から成る1.95×1.93mの規模の石團複式炉である。石團部は、8～20cm大の自然石を84×70cmの規模の「コ」状に配したもので、その底面全体は1～2cmの深さまで橙色に焼土化している。掘り込み部は隅丸方形を呈する。北側縁に32cm大の自然石1個を配し、壁寄りに45×43cmの規模で、掘り込み部底面より10～12cmの深さのピットが検出された。

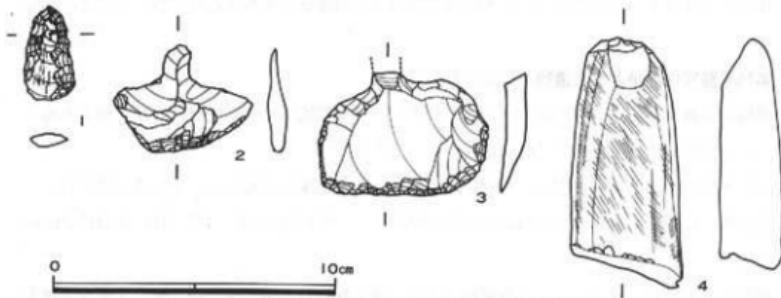
〈その他の施設〉 先に述べたように本住居跡の床面は、ゆるいレンズ状であるが、南西壁寄りの1部に幅60cmの間隔で若干壁側に傾斜するスロープが検出された。このスロープの始まる両端にはPit 19・20が対峙し、壁際にはPit 18が配置されている。

#### 〈出土遺物〉（第40～42図、401図31、409図7、423図16、426図6）

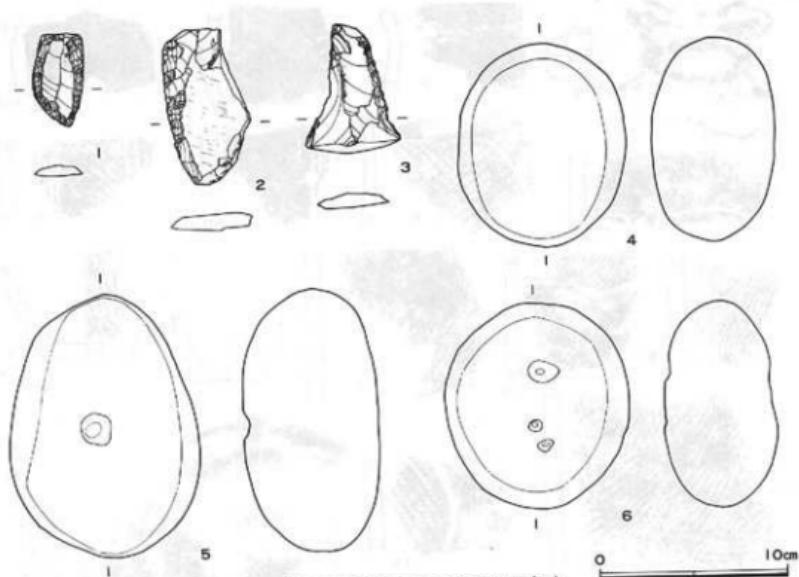
床面より3個の復元可能土器と5点の土器片、床直より2個の完形土器と1個の復元可能土器、14点の上器片を出土、この他に覆土中より1個体の復元可能土器、1/2箱の土器片、1点の



第40図 第14号住居跡出土土器拓影図（ただし10は第13号住居跡出土土器）



第41図 第14号住居跡出土石器実測図(1)



第42図 第14号住居跡出土石器実測図(2)

石錐・磨製石斧・円盤状土製品・有孔石製品、2点の石匙・磨石・凹石、3点の搔器を出土した。

401図31は、南西壁際床直から横転の状態で出土した、ほぼ完形に近い小型壺形土器で、底径7.8cmを計る。口頸部は無文、胴部との境界に横位連続刺突文、胴部にL R斜繩文を施し、色調はにぶい黄橙色(10YR 6/3)である。409図7は、住居中央床直で、横転しつぶれたような状態で出土した深鉢形土器で、口径27.7cmを計る。器面にはL R斜繩文を施し、色調は灰黄褐色(10YR 4/2)を呈する。

40図1・16は床面、40図3・6・9・12・13は床直からの出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より、本住居の時期は中期後葉(大木9式併行期)と考えられる。

#### 第15号豎穴住居跡と出土遺物(第43~45図)

〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央部のA-15グリッドに位置する。本住居跡はV層地山上面において、不整形のプランとして確認されたものである。

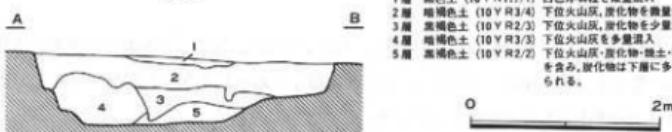
6号土壙、1号溝と重複関係にあり、本住居跡は6号土壙より新しく、1号溝より古い。

〈平面形・規模〉 3.6×(3.0)mの橢円形を呈する。主軸方向はN-15°-W、床面積は6.84m<sup>2</sup>である。

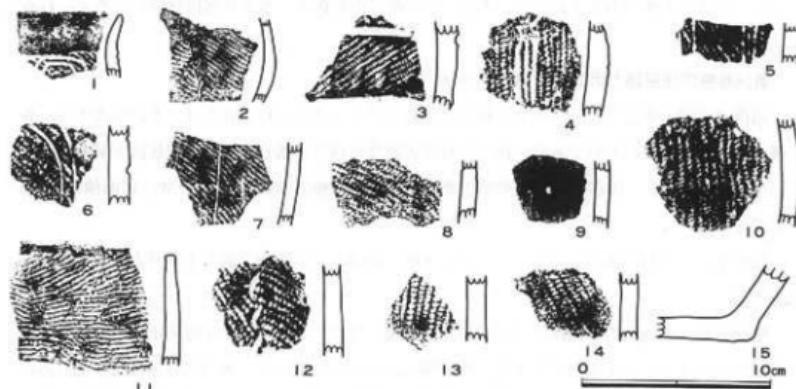
〈堆積土〉 5層に区分でき、人為堆積である。第5層には多量の炭化物・焼土を混入、焼失



第44図 第15号住居跡出土石器実測図



第43図 第15号竪穴住居跡実測図



第45図 第15号住居跡出土土器拓影図

家屋と考えられる。

〈床面・壁〉 中央から北東壁際へかけ1段低くなる二段構造で、V層及び6号土壤覆土を掘り込んでそれぞれの面としている。下段は平坦で堅くしまりがあるが、上段は下段ほど堅くはない。上・下段の比高は30~35cm、北東壁際で下段からの壁高は約70cmである。上段からの壁高は東壁33cm、南壁39cm、西壁40cmである。壁はV層から成り、ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡から5個のピットが検出された。

第15号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5
規 模	37×31	25×24	26×21	20×18	30×25
深 さ	15.5	54.5	23.0	20.0	17

〈炉〉 住居跡南壁寄りに位置する。崩壊が著しく、自然石2個と焼土及び不定形の掘り方が確認されたのみである。炉跡直下の下段に10~20cm大の炉石と見られる石が散在していることから、本炉は石圓複式炉と考えられる。掘り方は98×92cmの規模で、住居跡中央側の掘り方が一段高く、その北側（住居跡中央側）の底面が26×22cmの範囲で焼土化している。

〈出土遺物〉（第44、45図）

ピット内より5点の土器片と1点の石鐵、床面より6点、床直より10数点の土器片を出土、この他に覆土中より1/6箱の土器片と、石鐵・搔器をそれぞれ1点出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央から南西部にかけて多く分布している。

45図7・13・14はPit 5・10・11・15は床面、8は床直からの出土土器である。

ピット及び床面の出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

#### 第16号竪穴住居跡と出土遺物（第46~48、401、404図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央よりやや北側のZ C・Z B-17・18グリッドに位置する。IV層上面で確認されたものである。19・22号住居跡及び14号土壙と重複、本住居跡が最も新しい。

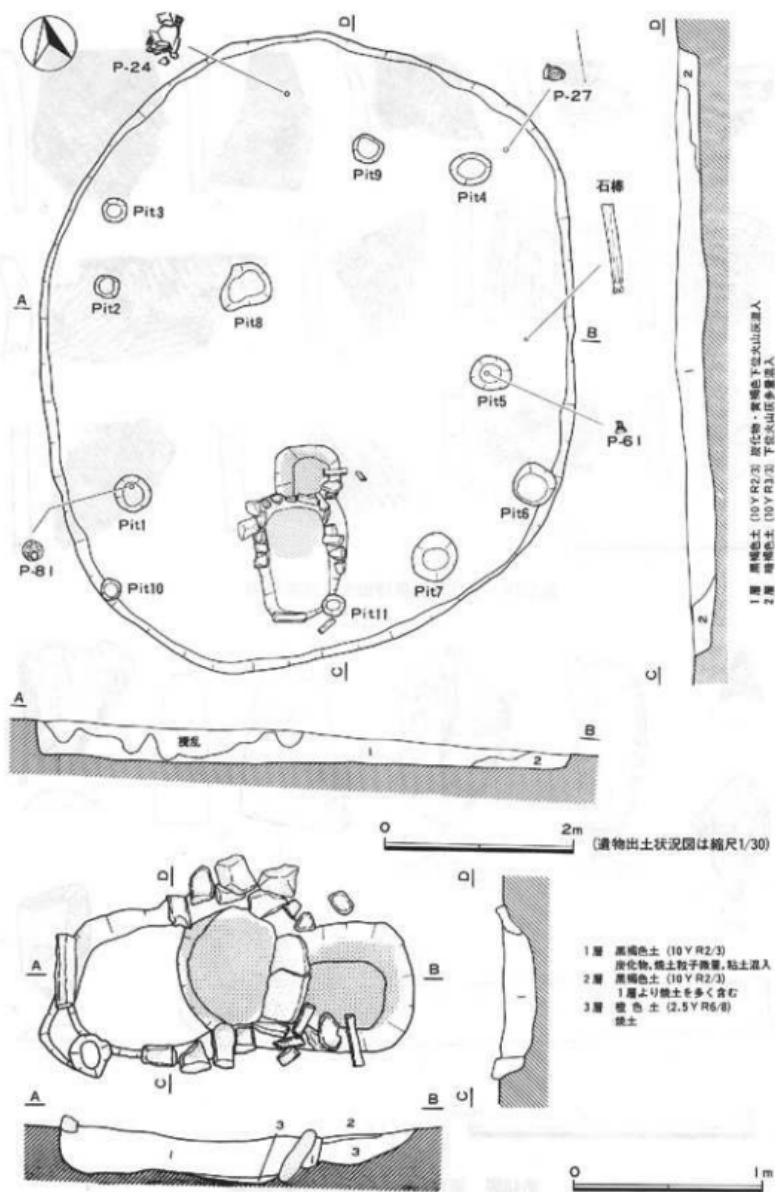
〈平面形・規模〉 6.67×5.71mの橢円形を呈する。主軸方向はN-16°-W、床面積は23.88m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 2層に区分できる。ややレンズ状に堆積しているが、混入土より人為堆積と考えられる。

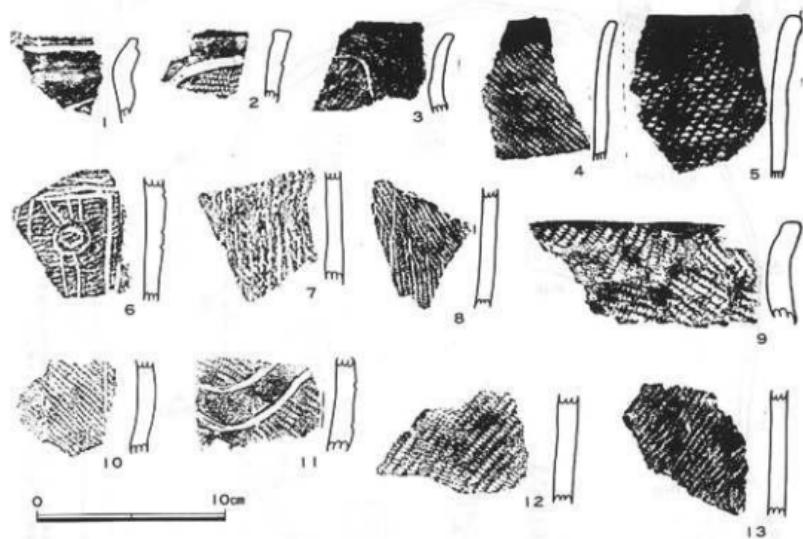
〈床面・壁〉 南端の重複部分は、22号住居跡覆土及び、その上への下位火山灰（地山土）を多量に混入する土による貼床を施し、西壁際は19号住居跡覆土を、他の部分はV層を掘り込んで床面としている。平坦で、炉を中心とし、南北に3.3×2.6mの範囲が特に堅くしまっている。南壁は22号住居跡覆土、西壁は19号住居跡覆土、他の壁はIV・V層より成る。急な立ち上がりを呈し、壁高は東壁15.5cm、西壁17.0cm、南壁8.5cm、北壁19.0cmを計る。

〈周溝〉 なし

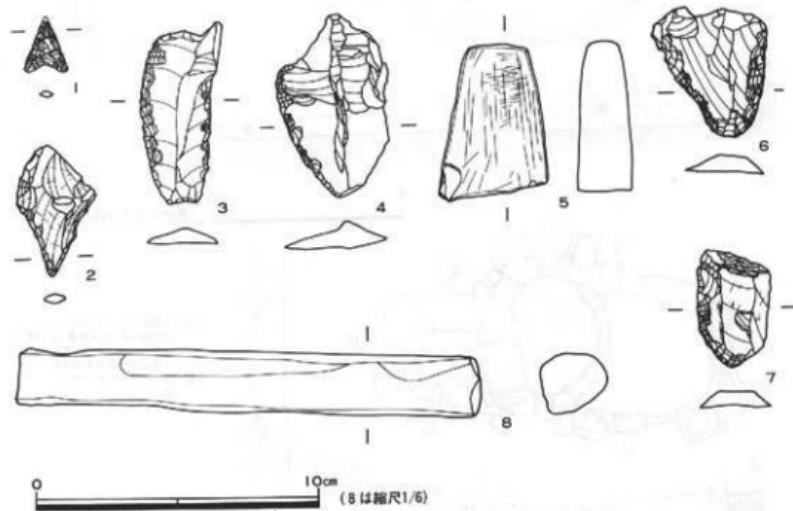
〈柱穴〉 本住居跡より11個のピットが検出された。このうちPit 1・2・4・5・7・9を主柱穴とし、長軸線上のPit 9と、3対6個（Pit 1・7、Pit 2・5、Pit 4・（未検出））の計7個を基本とする柱配置と考えられる。



第46図 第16号竪穴住居跡実測図・同住居炉跡微細図



第47図 第16号住居跡出土土器拓影図



第48図 第16号住居跡出土石器実測図

第16号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
幅 横	40×40	26×25	25×25	45×35	45×36	47×46	52×47	58×48	32×30	23×22	24×22
深 底	40	22	9	40	18	29	44	29	18	36	19.5

〈が<sup>1</sup>〉 住居跡南壁に接する。石圓部（I）+石圓部（II）+掘り込み部から成る1.9×1.1mの規模の石圓複式が<sup>1</sup>で、石圓部（II）と掘り込み部の境界には仕切りがない。石圓部（I）は78×70cmの隅丸方形の掘り込みで、東側に3個、西側に1個の自然石が検出された。いずれも定位位置から若干動いているが、少なくとも両縁には石が配置されていたものと推測される。石圓部（I）内は良く焼けており、焼土の最大の厚さは13cmにも達する。石圓部（II）の掘り込みは70×110cmのやや楕円形に近い形状で、床面より25cmの深さで、最も低い。両縁には8～20cm大の自然石が配され、石圓部（I）とは長さ46cm、幅32cmの扁平石1個を斜面に配して分離している。石圓部（II）内底面も全域に渡って火熱を受けた痕跡があるが、石圓部（I）ほどではなく、3cmほどの厚さの焼土が確認されただけである。掘り込み部は63×80cmの楕円形で、東縁に2個、南縁に1個のが<sup>1</sup>石が確認された。全体として「匂」形の炉石の配置と考えられる。掘り込み部内においては、火熱を受けた痕跡は見当らない。

〈出土遺物〉 （第47・48図、401図30、404図1）

ピット内より完形土器、復元可能土器それぞれ1個体、床面より数点の土器片、床直より1個体の完形土器、10数点の土器片を出土し、他に覆土中より1/6箱の土器片、1点の石鐵・石錐・石匙・磨製石斧・石棒、3点の搔器を出土した。

401図30は、Pit 5上位で完形で出土した小型壺形土器で、底径6.4cmを計る。口頭部と胴部の境界に一条の横位沈線文、胴部に沈線による「匂」文、横位楕円形文を施文、地文はL R 斜繩文、色調は浅黄橙色（10YR 8/3）を呈する。404図1は、北東壁床直から完形で出土した小型深鉢形土器で、口径8.6cm、底径4.0cm、器高10.8cmを計る。口縁部下半から胴下部までR L R 斜繩文を施文、色調は灰褐色（7.5YR 5/2）を呈する。

47図11は床直の出土土器、48図8は東壁際覆土上位出土の石棒（完形）である。

ピット内、床面及び床直の出土土器より、本住居の時期は中期後葉～末葉（大木9～10式併行期）と考えられる。

#### 第17A号竪穴住居跡と出土遺物（第49、52、54、396図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央のZ A・A-17グリッドに位置する。IV層上面にてダルマ状のプランを確認、2軒の重複と考え、南側の造構を17号住居跡、北側のものを18号住居跡とした。新田の解明のためさらにIV層下面まで下げたが、平面プランではつかめず、土層観察用ベルトを設定し、同時に造構精査を行った。

17号住居跡の精査中に覆土中位よりが跡らしい石の配列を確認したので、土層を再度確認した結果、覆土内にもう1軒の住居跡が存在することが判明した。このため、先に17号住居跡としたものを17A号住居跡、この17A号の覆土内に存在する住居跡を17B号住居跡として調査を進めた。以下17A号住居跡について記述する。

18号住居跡の新旧関係については、ベルトの設定場所が悪く、土層からも確認できなかった。18号土壤と重複し、本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 5.00×4.93mの楕円形を呈する。主軸方向はN-30°-E、床面積は16.20m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 17B号住居跡覆土を除くと、8層に区分できる。堆積状況より、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。多少凹凸があり、全体的にしまりがある。壁はIV・V層から成り、西壁はやや緩い立ち上がりを、他の壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁58.7cm、西壁56.4cm、南壁56.6cm、北壁42.1cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より16個のビットが検出された。このうちPit 1・2または3・5・11またはその周辺の未検出のビットの計4個を基本とする柱配置と考えられる。またPit 6・7、Pit 8・9は、その規模及び配置より、出入口との関連が考えられる。

第17A・18号竪穴住居跡ビット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規 模	43×36	48×39	39×35	54×52	30×29	36×30	35×24	29×27	38×34	25×18
深 さ	25.0	73.4	43.9	26.0	58.0	23.2	33.3	34.7	43.5	13.8
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規 模	19×17	15×12	21×14	16×16	14×13	21×17	40×40	28×25	43×36	38×36
深 さ	22.0	11.2	11.8	16.5	21.3	22.1	21.7	42.3	58.7	45.1
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27	28		
規 模	25×19	28×27	39×38	18×16	24×20	19×16	15×12	25×24		
深 さ	31.4	40.9	38.1	16.1	28.0	10.5	20.4	32.6		

〈炉<sup>a</sup>〉 住居南壁際に位置する。遺存度が悪く、3個の自然石と不定形の掘り込みしか検出できなかったが、114×116cmの規模の石圓複式爐と考えられる。石圓部は60×57cmの方形で、北側（住居跡中央側）に33×32cmの範囲で火熱を受けた痕跡が確認された。

〈出土土器〉 （第52、54図、396図9）

床面より3点の土器片と1点の石錐、床直より1個体の完形に近い土器と13点の土器片を出土、他に覆土より1/4箱の土器片、1点の磨石・凹石、2点の石匙、3点の石錐、4点の搔器を出土した。

396図9は、本住居中央床直より出土した完形に近い朱塗りの、一对の把手を有する菱形土器で、底径5.5cmを計る。胴上半部に、調整隆線による楕円文、「の」文、変形楕円文等の混

合文を施し、区画文外及び底部下端を磨消し、朱を塗っている。この他朱は、内面全体に及んでいる。

54図1・5・8・11は、床直の出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。

#### 第17B号竪穴住居跡と出土遺物（第49、50、53、55図）

〈造構の位置と確認〉 A1区中央部のZ A-17グリッドに位置する。17A号住居跡の土層断面において確認されたものであり、17A号住居跡の発掘によりそのほとんどを破壊してしまった。

17A号住居跡と重複関係にあり、本造構が新しい。また推定プランでは、18号住居跡と若干重複する。

〈平面形・規模〉 前述のように本造構の壁及び床面は、土層観察用ベルトと石圓い炉周辺を除いてほとんど見逃している。このため平面形は不明、規模は土層断面より3.68×2.86m程度と考えられる。

〈堆積土〉 4層に区分できる。人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 17A号住居跡覆土を掘り込んで床面としている（6・7・9層）。壁は17A号住居跡覆土（5・7・9層）より成り、やや急な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁39.0cm、北西壁32.0cm、南東壁26.0cm、南西壁53.0cmを計る。

〈周溝〉 南東一北西方の土層断面において、南西端に幅30cm、深さ7cmほどの落ち込みが見られ、周溝の可能性がある。

〈柱穴〉 検出できなかった。

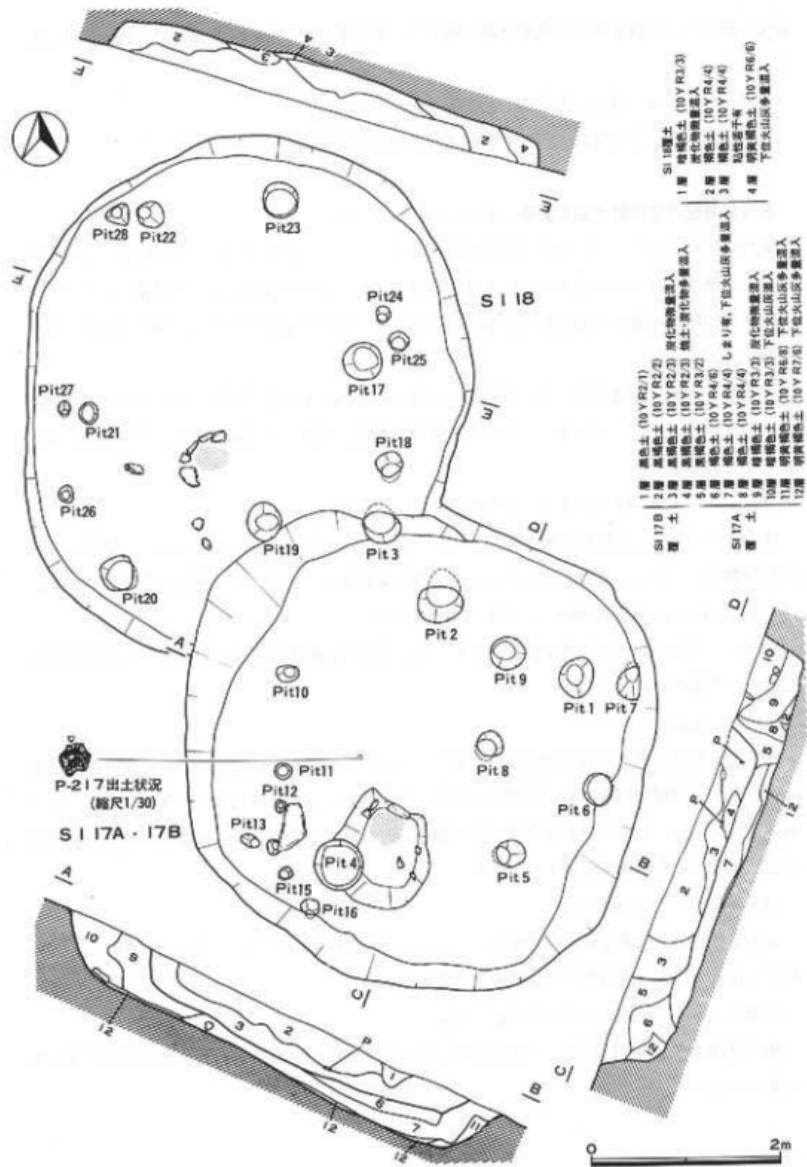
〈炉〉 住居跡中央より若干南東側に位置する。12cm大の3個の自然石しか定位位置に存在しないが、周辺に同規模の大きさの自然石が散在することから、円形の石圓炉と推測される。土層断面図によると、炉上と思われる第3層に炭化粒が微量ながら混入、60cm離れた地点の第4層には、焼土・炭化物を多量混入している。

〈出土遺物〉（第53、55図）

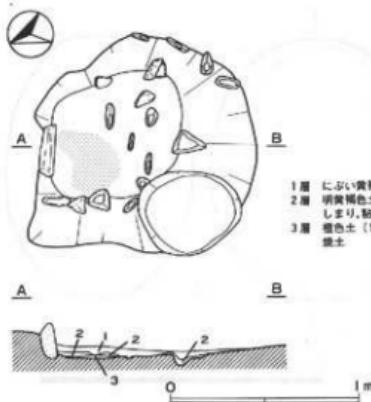
床面より18点、床直より34点、覆土より1/4箱の土器片を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央から南西寄りに比較的多く分布している。

53図1～4は、床直からの出土土器である。

出土遺物及び17A号住居跡との新旧関係より、本住居跡の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。



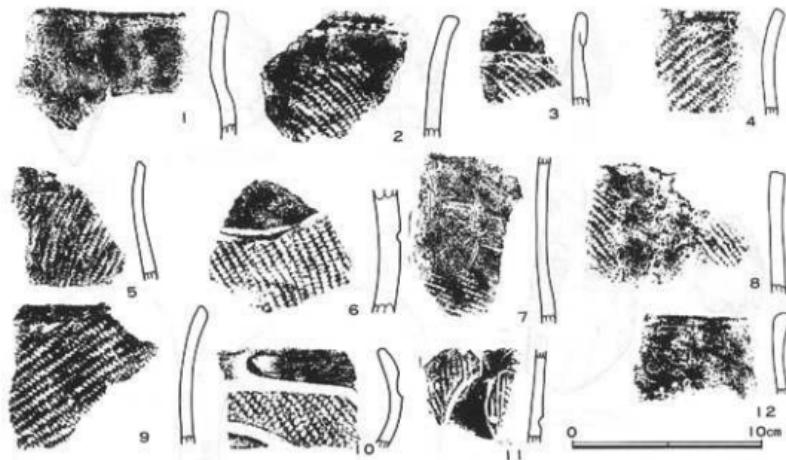
第49図 第17A・17B・18号竪穴住居跡実測図



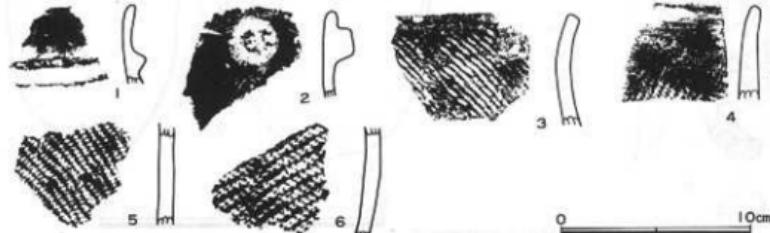
第50図 第17B号住居跡微細図



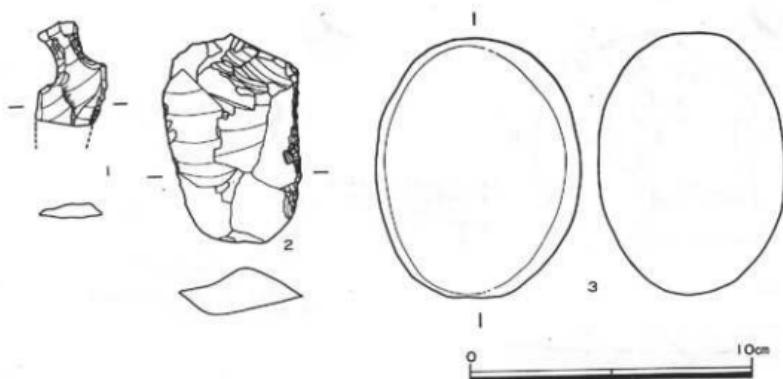
第51図 第18号住居跡微細図



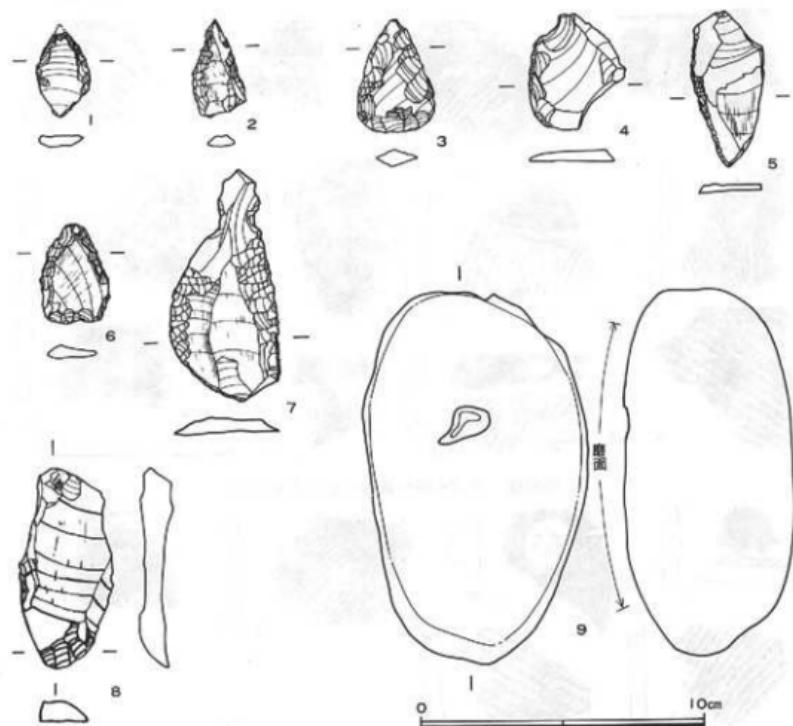
第52図 第17A号住居跡出土土器拓影図



第53図 第17B号住居跡出土土器拓影図



第54図 第17A号住居跡出土石器実測図



第55図 第17B号住居跡出土石器実測図

### 第18号竪穴住居跡と出土遺物（第49、51、56図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央部のZB・ZA-16・17グリッドに位置する。17A号住居跡と共にIV層上面で確認された。

17A・B号住居跡、18号土壙と重複関係にある。先に述べたとおり、17A・B号住居跡とは平面及び上層断面からは新旧関係がつかめなかった。18号土壙とは、本造構が新しい。

〈平面形・規模〉 5.60×4.85mの楕円形を呈する。主軸方向はN-23°-E、床面積は17.96m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 4層に区分できる。堆積状況より人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で、全般的にしまりが弱い。壁はIV・V層から成り、ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁35.7cm、北西壁29.5cm、南東壁22.7cm、南西壁39.0cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 Pit 3・20-23・25を主柱穴とし、主軸線上のPit 20・23と、軸線に対称な2対4個（Pit 3・21、Pit 22・25）の計6個を基本とする柱配置と考えられる。（ピット一覧は、17A号住居跡に付す）

〈炉〉 住居跡中央より若干南側に位置する。半壊しているが、石の抜き取り痕より、10~22cm大の自然石を76×62cmの楕円形に配した石圓がと考えられる。炉内の覆土は焼土粒・炭化粒を混入し、底面は35×28cmの範囲で、最大2cmの深さまで焼土化している。

〈出土遺物〉 （第56図）

ピット内より2点の土器片、床面より14点、床直より34点、覆土より1/2箱の土器片を出土、また覆土中より、1点の石錐・磨石・石皿、2点の凹石を出土した。これらの遺物は、平面的には、炉周辺に多く分布している。

56図1・6・12は床面、2・3・11・14・16は床直からの出土土器である。

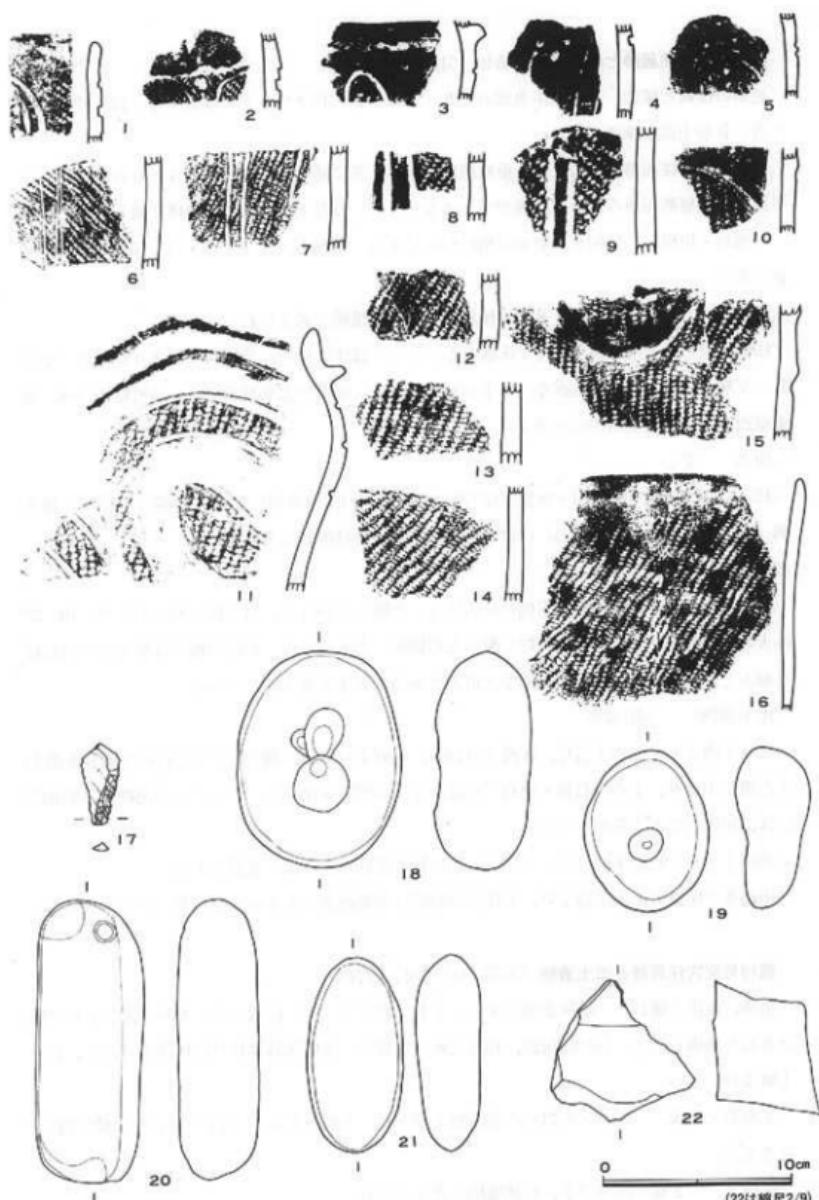
床面及び床直の出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

### 第19号竪穴住居跡と出土遺物（第57~60、401、427図）

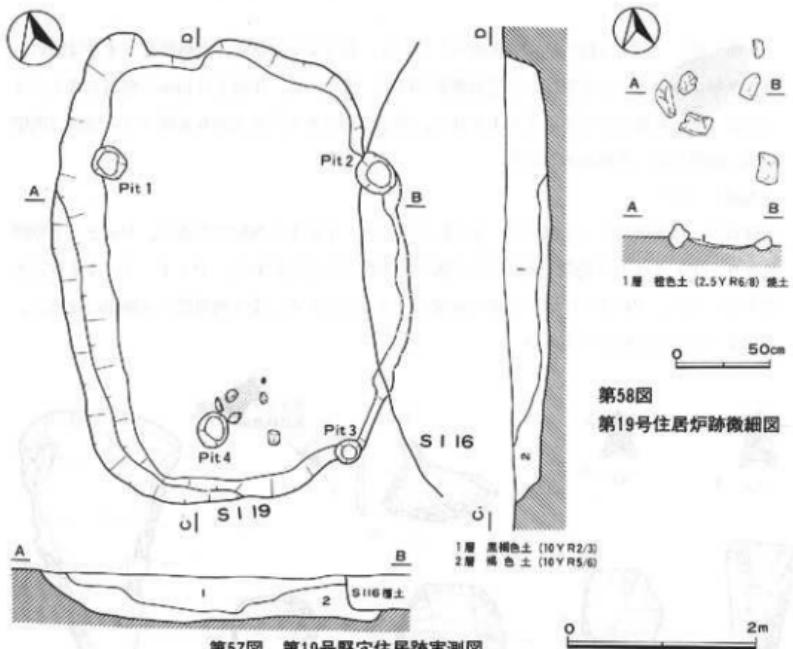
〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北側のZC・ZB-17グリッドに位置する。V層上面において確認された造構である。16号住居跡、15号土壙と重複し、本住居跡は16号住居跡より古く、15号土壙より新しい。

〈平面形・規模〉 4.83×3.74mの楕円形を呈する。主軸方向はN-13°-E、床面積は11.72m<sup>2</sup>である。

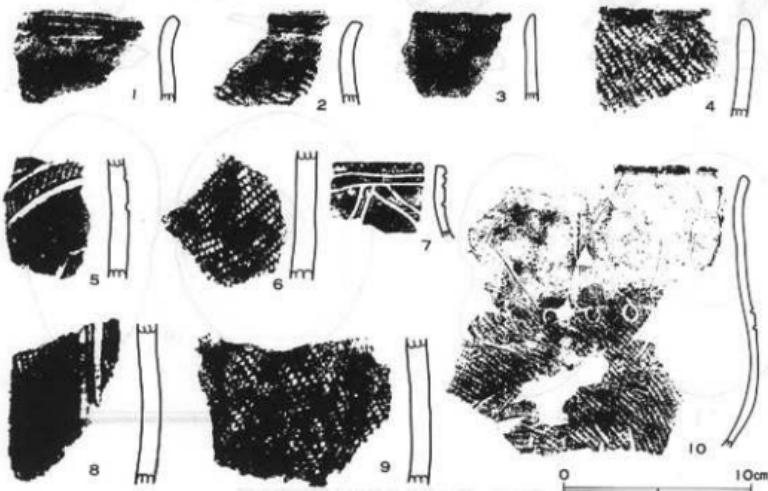
〈堆積土〉 2層に区分でき、自然堆積と考えられる。



第56図 第18号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第57図 第19号竪穴住居跡実測図

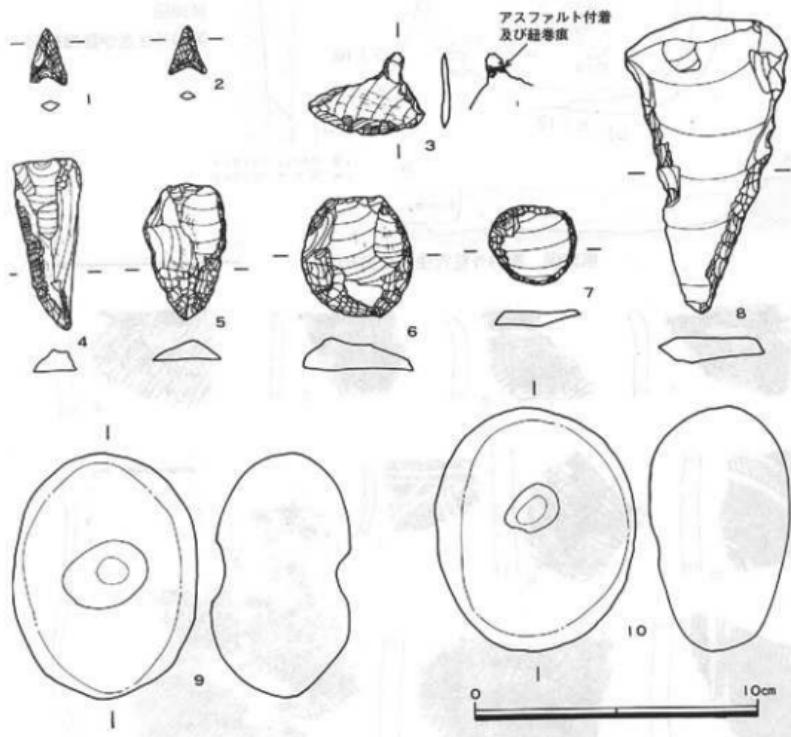


第59図 第19号住居跡出土土器拓影図

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。若干レンズ状で、全体的にしまりは弱い。壁はV層より成るが、東壁は16号住居構築の際に一部壊され、床面より14cmの壁高を残すのみである。南・北壁はやや急な立ち上がりを、西壁は緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は西壁48cm、南壁27cm、北壁46cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡から4個のピットが検出された。Pit 1は西壁際北寄り、Pit 2は東壁際北寄り、Pit 3は南東壁際にそれぞれ位置し、主柱穴と考えられる。Pit 1～4の4本柱とも考えられるが、Pit 4の位置が炉跡に近接しすぎることから、南・西壁際の未検出の柱穴と、Pit 1～3の4本柱と考えたい。



第60図 第19号住居跡出土石器実測図

第19号竪穴住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4
規 模	37×36	47×36	27×26	38×34
深 さ	18	30	8	18

〈炉〉 本住居跡の主軸線上南壁際に位置する。崩壊が著しいが、12~16cmの大の自然石を径56cmの円形に配した石匂炉と考えられる。炉内底面は、46×32cmの範囲で、最大2cmの深さまで焼土化している。

〈出土遺物〉 (第59、60図、401図4、427図16)

床面より数点の土器片、床直より10数点の土器片と1点の有孔石製品を出土、他に覆土中より1個の完形に近いミニチュア土器、1/3箱の土器片、1点の石匙、2点の石鏃と凹石、4点の搔器を出土した。これらの遺物は、平面的には北東壁際に多く分布している。

401図4は、覆土中位より出土の完形に近い無文のミニチュア土器である。鉢形を呈し、推定口径6cm、底径2.7cm、器高5cmを計る。色調は、オリーブ黄色(5YR 6/4)を呈する。

59図9は、床面からの出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉(大木9式併行期)と考えられる。

第20号竪穴住居跡と出土遺物 (第61、62図)

〈造構の位置と確認〉 A1区北東端のZ E-24・25グリッドに位置する。この周辺は南方向への緩斜面となっており、東・西・北の3壁をV層上面にて確認できたが、南壁はつかめなかつた。本住居跡の東側に23号住居跡、南側に26号住居跡、北西側に25号住居跡が接続する。

〈平面形・規模〉 南壁をつかめなかつたが、3壁及び床面の延長より、(3.48)×3.34mの隅丸方形を呈すると考えられる。

〈堆積土〉 3層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 IV・V層を掘り込んで床面としている。平坦で、全体的に非常に堅くしまっている。東・西・北壁はIV・V層より成り、ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁7.0cm、西壁8.0cm、北壁14.8cmを計る。

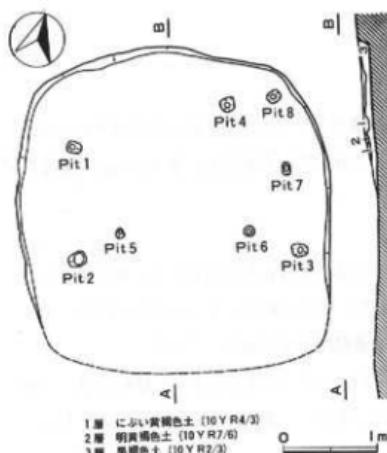
〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より8個のピットが検出された。Pit 1・2・4・6、または、Pit 1~3・8を主柱穴とする柱配置が考えられる。

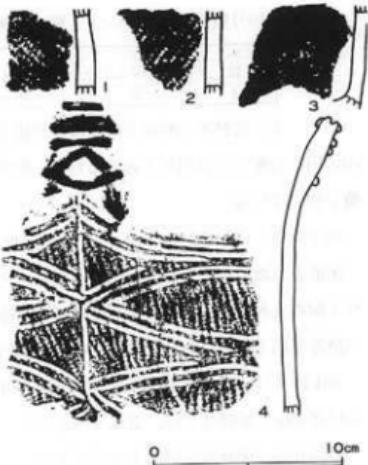
第20号竪穴住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規 模	16×14	20×16	20×13	16×16	7×7	12×9	15×7	14×12
深 さ	8.8	14.0	21.0	14.0	10.0	17.0	12.4	11.5

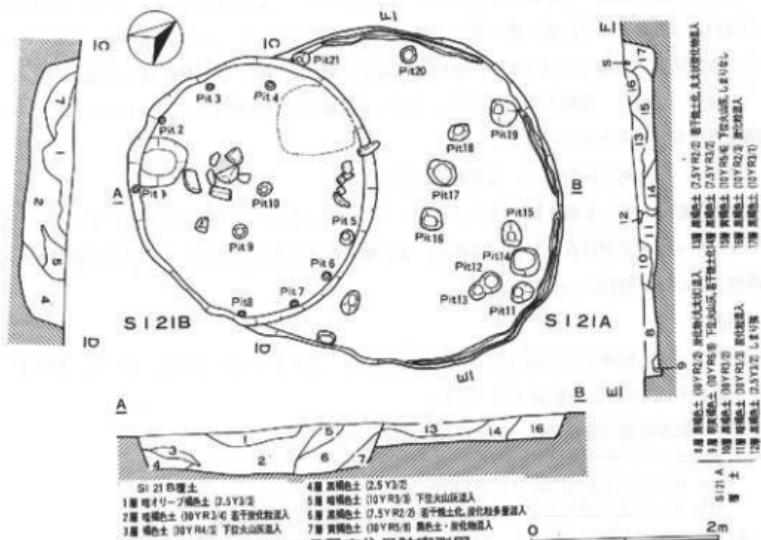
〈炉〉 検出できなかつた。



第61図 第20号竪穴住居跡実測図



第62図 第20号住居跡出土土器拓影図



第63図 第21A・21B号竪穴住居跡実測図

〈出土遺物〉 (第62回)

本住居からの出土遺物は少なく、床面より4点、床直より5点の他、覆土より少量の土器片を出土したのみである。これらの遺物は、平面的には住居中央から北寄りに多く分布している。

62図2~4は床面、1は床直の出土土器である。

床面の出土土器より、本住居の時期は中期中葉（円筒上層e式併行期）と考えられる。

第21A号竪穴住居跡と出土遺物 (第63、64図)

〈造構の位置と確認〉 A1区北東部のZ E・Z D-22・23グリッドに位置する。IV層上面でダルマ状のプランを確認、北東側のものを21A号住居跡、南西側のものを21B号住居跡として調査を進めた。この2軒の新旧関係については、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 (3.50) × 3.45m の円形を呈すると考えられる。主軸方向はN-49°-E、床面積は(10.16) m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 10層に区分でき、人為堆積である。8・13層には丸太状炭化物の他に炭化物・粒を多量混入、南東壁・北東壁際覆土には焼土・炭化物を混入、またほぼ中央部床直上からも焼土が確認されていることから、本住居は焼失家屋と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で、しまりは弱い。壁はIV・V層より成るが、西壁及び南壁の一部は、21B号住居構築により消失している。ほぼ垂直な立ち上がりを呈し、壁高は北東壁28cm、北西壁36.9cmを計る。

〈周溝〉 南壁の一部及び21B号住居跡との重複部分を除き、幅約10cm、深さ8cmの周溝がほぼ一巡している。

〈柱穴〉 21A・21B号住居跡より計23個のピットが検出された。このうちPit 12・18・23を主柱穴とし、搅乱のため未検出のピットを加え、計4個を基本とする柱配置と考えられる。また、Pit 9・11・19~22の6個は壁柱穴と考えられる。

第21A・21B号竪穴住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

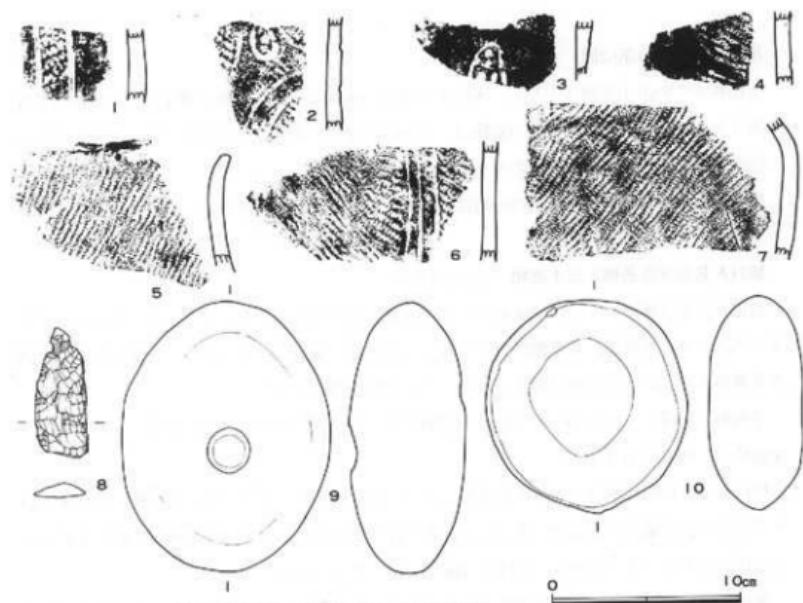
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規 模	9×6	7×6	6×6	9×9	9×8	5×5	6×5	7×7	14×14	15×14	25×23	22×21	18×16
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23			
規 模	44×33	28×24	24×24	34×28	25×18	35×27	18×18	20×15	37×15	27×18			

〈炉〉 21B号住居構築により消失したものか、残存部からは検出できなかった。

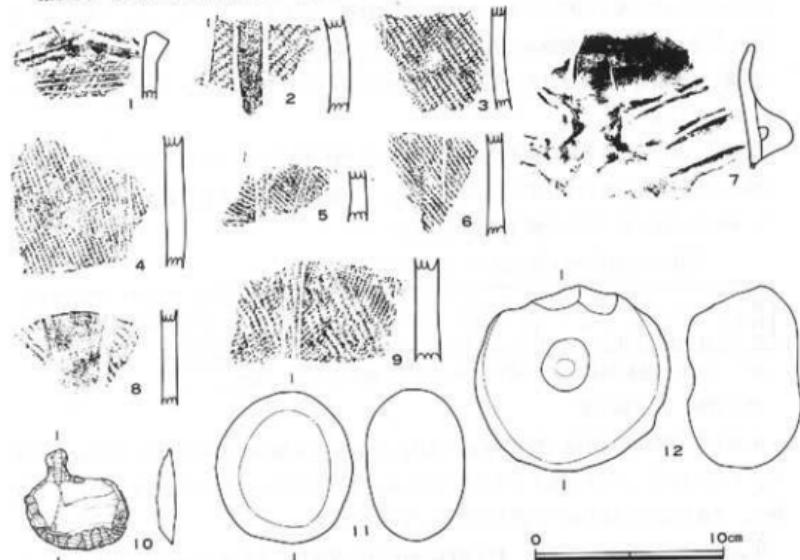
〈出土遺物〉 (第64図)

床面より1個の復元可能土器と4点の土器片、床直より1個の復元可能土器、10数点の土器片、1点の磨石、この他に覆土より少量の土器片と1点の石匙・凹石を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央から西寄りに多く分布している。

床面及び床直の出土土器より、本住居跡の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。



第64図 第21A号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第65図 第21B号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

### 第21B号竪穴住居跡と出土遺物（第63、65図）

〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部Z D-22・23グリッドに位置する。21A号住居跡と同時にIV層上面にて確認された。21A号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 2.82×2.66mの円形を呈し、主軸方向はN-46°-E、床面積は4.96m<sup>2</sup>である。  
〈堆積土〉 7層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。炉周辺は堅くしまっているが、他は比較的軟らかい。北壁際が70×80cmの範囲で擾乱を受けている。東・北壁は21A号住居跡覆土及びV層より、他の壁はIV・V層より成る。緩やかな立ち上がりを呈し、壁高は南東壁38.8cm、北西壁31.7cm、南西壁21.7cm、北東壁42.0cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡ほぼ中央のPit 10を主柱穴とし、壁際に一巡するPit 1~8が壁柱穴と考えられる。（ピット一覧は21A号住居跡に付す）

〈炉〉 住居跡中央よりやや南西寄りに位置する。崩壊が著しいが、焼土を中心にガラスが散在すること、南西壁に接して浅い掘り込み部があることから、石囲部十掘り込み部から成る1.2×0.57mの規模の石囲複式炉と考えられる。

〈出土遺物〉（第65図）

床面より1個の復元可能土器、10点の土器片、1点の閃石、床直より16点の土器片、1点の磨石を出土、この他に覆土より少量の土器片と1点の石匙、4点の磨石を出土した。これらの遺物は、平面的には炉周辺から北東寄りにかけて多く分布している。

65図7は床面、3・5・9は床直の出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

### 第22号竪穴住居跡と出土遺物（第66~69図）

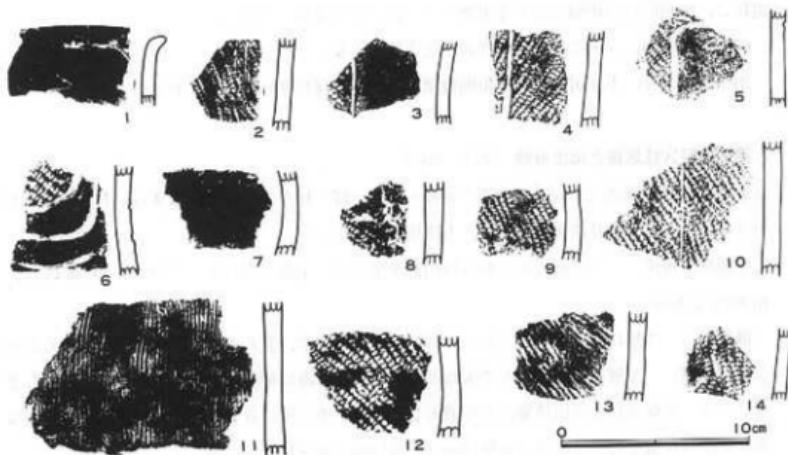
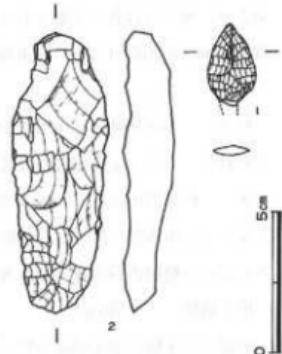
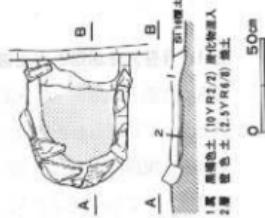
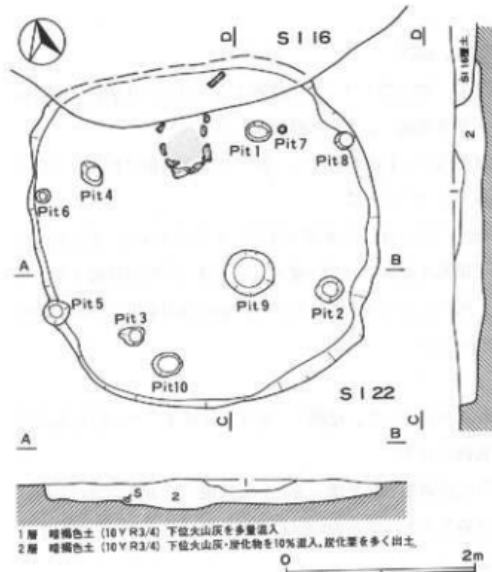
〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部のZ B・Z A-17・18グリッドに位置する。IV層上面において確認された。16号住居跡と重複、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 (3.68) ×3.45mの円形を呈する。主軸方向はN-7°-W、床面積は、10.04m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 2層に区分できる。レンズ状の堆積であるが、混入土から人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層まで掘り込んで床面としている。床面は緩やかな凹凸があるが、堅くしまっている。北壁は16号住居構築により消失している。他の壁はIV・V層から成り、ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は、東壁17cm、西壁15cm、南壁12cmを計る。

〈周溝〉 なし



〈柱穴〉 本住居跡より10個のビットが検出された。このうちPit 1～4を主柱穴とし、主軸線に対称な2対4個（Pit 1・4、2・3）を基本とする柱配置と考えられる。

第22号竪穴住居跡ビット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規 模	26×22	30×27	28×19	29×20	30×26	16×15	10×9	20×20	50×50	32×24
深 さ	30	35	48	38	34	9	17	15	37	16

〈炉〉 住居跡北壁際に位置する。16号住居跡により掘り込み部の大半を消失しているが、石圓部十掘り込み部より成る石圓複式炉である。石圓部は6～23cmの大自然石を、63×58cmの規模で「コ」字形に配したもので、石圓部全体に火熱を受けた痕跡があり、最大2cmほどの深さまで橙色に焼土化している。

〈出土遺物〉（第68、69図）

Pit 1より1点の石錐、床面より1点、床底より10数点の土器片を出土、この他に覆土より少量の土器片と1点の石錐を出土した。これらの遺物は、平面的には炉周辺に多く分布している。

69図7・12は床直、他は覆土中からの出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第23号竪穴住居跡と出土遺物（第70～73図）

〈遺構の位置と確認〉 A1区最北東端の東方向への緩斜面、Z E・Z F-25・26グリッドに位置する。西壁側V層上面で半円状のプランを確認、住居跡と判断、調査を進めた。

21号配石遺構と重複関係にあり、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 3.64×3.26mの円形を呈する。主軸方向はN-82°-W、床面積は8.24m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 2層に区分でき、自然堆積である。

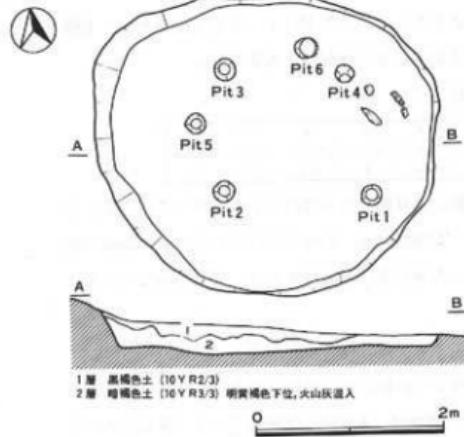
〈床面・壁〉 V層まで掘り込んで床面としている。床面は若干レンズ状で凹凸があるが、堅くしまりがある。緩斜面での確認ということもあり、西壁が高く東壁が低い。壁高は北東壁14.7cm、北西壁12.7cm、南東壁32.7cm、南西壁47.7cmを計る。いずれもややなだらかな立ち上がりを呈する。

〈周溝〉 なし

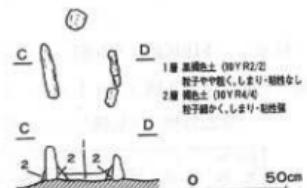
〈柱穴〉 本住居跡から6個のビットが検出された。Pit 1～4が主柱穴、Pit 5が副柱穴と考えられる。

第23号竪穴住居跡ビット一覧表（単位：cm）

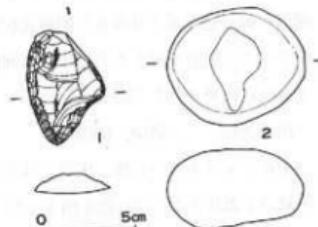
Pit No.	1	2	3	4	5	6
規 模	22×21	23×22	24×22	20×20	22×20	20×16
深 さ	33.8	34.6	38.5	40.2	33.8	34.8



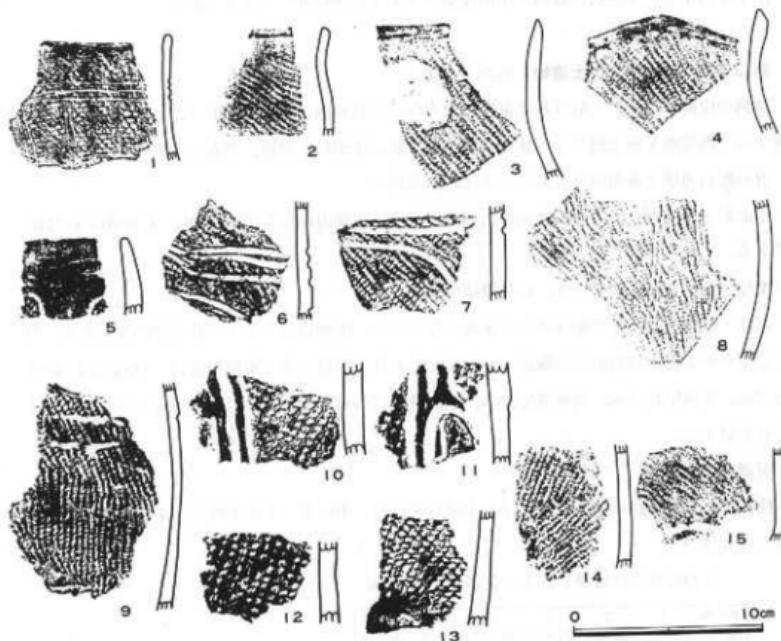
第70図 第23号竪穴住居跡実測図



第71図 第23号住居跡微細図



第72図 第23号住居跡出土石器実測図



第73図 第23号住居跡出土土器拓影図

〈炉〉 本住居跡東壁際より、炉石と見られる4個の石が確認された。これらの石は床に掘り込みを持たず、床上に置いて周りを粘性のある土で固定させたもので、炉内より焼土等の確認はできなかった。若干不自然な位置であることから、定位置からずれている可能性もある。

〈出土遺物〉 (第72、73図)

床面より10数点、床直より20点弱の土器片を出土、他に覆土中より少量の土器片と搔器・磨石それぞれ1点を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央から北西側にかけての出土が多い。

73図6・9・11は床面、1~5・12は床直上からの出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より、本住居の時期は中期後葉(大木8b式併行期)と考えられる。

#### 第24号竪穴住居跡と出土遺物 (第74~77図)

〈遺構の位置と確認〉 A1区北東部のZ E-22・23グリッドに位置する。IV層中位で25号住居跡と重複した円形プランを確認、これを24号住居跡とした。25号住居跡、60号土壙と重複、本住居跡は25号住居跡より古く、60号土壙より新しい。

〈平面形・規模〉 (4.17) ×3.50mの楕円形である。主軸方向はN-78°-E、床面積は(9.44)m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 9層に区分でき、自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 60号土壙との重複部分は同造構覆土、他はV層まで掘り込んで床面としている。レンズ状で大きな凹凸があり、しまりはやや弱い。壁はIV・V層より成るが、北壁及び東壁の一部は、25号住居構築により消失している。東・南壁は緩やか、他の壁はやや急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁64.0cm、西壁71.3cm、南壁46.4cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より15個のピットが検出された。Pit 1または2・10の2本柱か、Pit 4・9・6・5を主柱穴、Pit 2・10を副柱穴とする6本柱の柱配置が考えられるが、後者はピットの深さについて疑問が残る。

第24号竪穴住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規 模	26×24	24×23	19×15	32×31	21×17	34×32	21×12	31×24	20×16	23×16	19×18	22×22	16×10
深 度	44.3	35.0	10.2	28.6	8.5	12.9	6.2	4.8	3.7	16.3	3.3	1.1	3.9

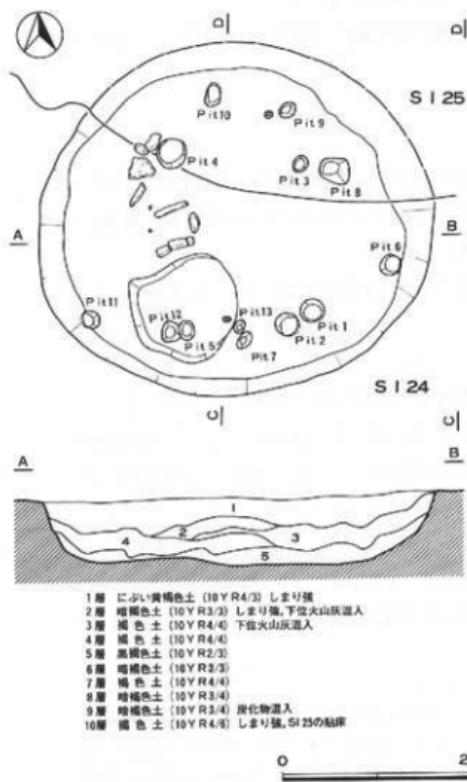
〈炉〉 住居跡中央よりやや西寄りに位置する。16~40cm大の自然石を56×48cmの方形に配した石圓炉である。炉内に炭化粒・焼土粒を若干混入するが、一様な焼土化は見られない。

〈出土遺物〉 (第76、77図)

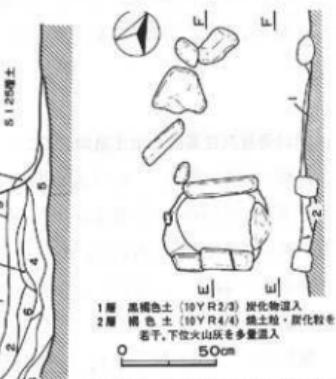
床面より26点、床直より22点の土器片を出土。他に覆土中より1/2箱の土器片と1点の凹石を出土した。これらの遺物は平面的には、ほぼ全城より出土しているが、特に住居中央から西壁にかけての出土が多い。

77図2・8・13-15・18・21・22・25・26は床面、3・6・7・19・20・27は床直の出土土器である。

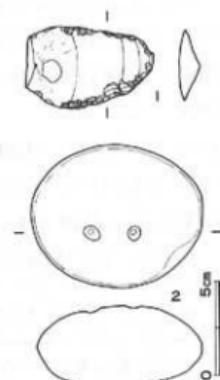
床面及び床直からの出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。



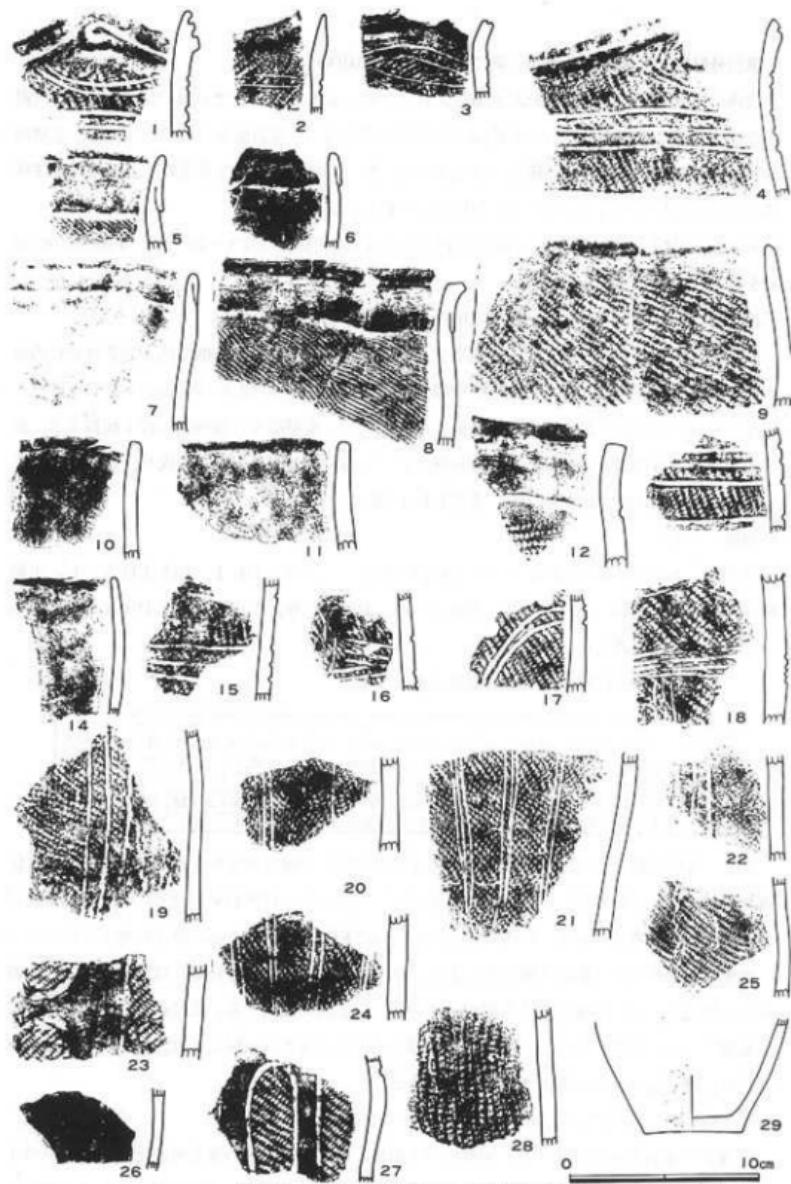
第74図 第24号竪穴住居跡実測図



第75図 第24号住居跡微細図



第76図 第24号住居跡出土石器実測図



第77図 第24号住居跡出土土器拓影図(ただし9, 10, 12, 28は第25号  
住居跡出土土器)

### 第25号竪穴住居跡と出土遺物（第77~81, 396, 403図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区最北東端のZ H・Z G・Z F・Z E-22・23・24グリッドに位置する。本造構はIV層中位において確認されたが、南方への緩斜面となっているため、北壁側はV層上面まで下がたがよく確認できなかった。24・43号住居跡、2号屋外炉と重複、本住居跡は2号屋外炉より古く、24・43号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 14.24×10.46mの楕円形を呈する。主軸方向はN-10°-E、床面積は99.68m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 10層に区分でき、自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 テラスを有する二段構造で、床・テラス面ともV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは、東壁中央部の壁際に位置し、その規模は2.8×0.6mの不整形を成し、床面からの高さは10~20cmである。床面はほぼ平坦で、東壁際から西壁際へ若干傾斜する。24号住居跡との重複部分には、一部貼床が施されている。壁はIV・V層より成り、壁高は東壁47.4cm、西壁24.0cm、南壁56.0cm、北壁4.1cmである。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より22個のピットが検出された。このうちPit 1~10を主柱穴とし、主軸線に對称な5対10個（Pit 1・2, Pit 3・10, Pit 4・9, Pit 5・8, Pit 6・7）を基本とする柱配置と考えられる。

第25号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

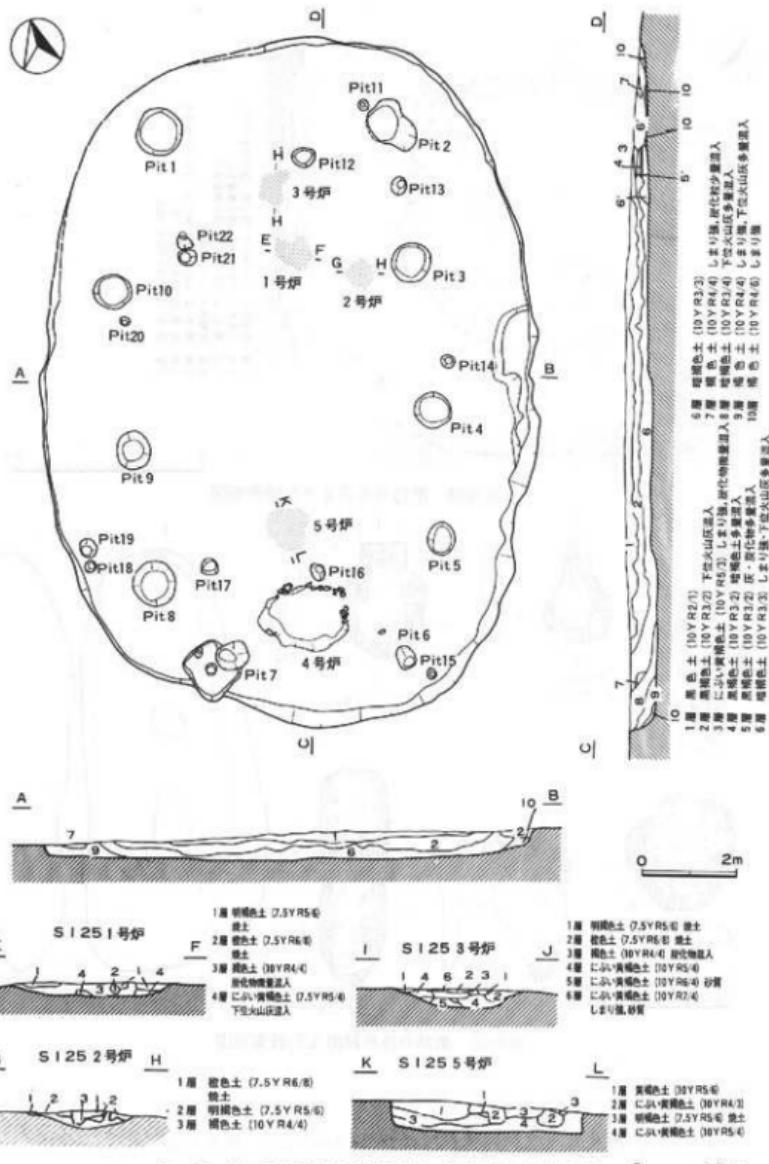
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規 模	144×100	100×92	83×84	60×51	69×57	50×25	68×56	98×92	82×77	81×72	24×23
深 さ	23.6	62.0	55.8	66.9	60.4	48.0	74.7	93.2	92.9	75.7	7.4
Pit No.	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
規 模	50×44	37×32	29×29	24×20	36×28	35×34	25×24	38×36	20×18	19×16	36×28
深 さ	14.5	39.5	34.0	13.5	49.7	50.0	18.1	27.0	14.5	25.6	45.2

〈炉〉 本住居跡からは、1つの石圓炉と4つの地床炉が検出された。石圓炉は南壁寄りに位置する。半壊しているが、その掘り込みより、7~21cm大の自然石を1.42×1.65mの横に長い方形の石圓炉と考えられる。炉内に1.03×1.16mの範囲で、最大4cmの厚さの焼土が見られる。

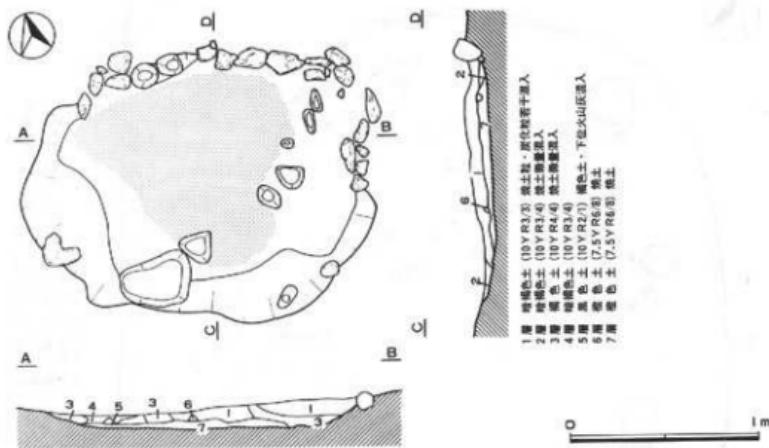
地床炉4個のうち3個は主軸線上にあり、そのうち2つ（1・3号炉）は住居中央より北寄りに、他の1つは、南壁寄りの石圓炉（4号炉）の北側に位置する。2号炉は、主軸線から若干東側にずれた位置にある。いずれも浅い掘り込みの上位から中位にかけ、焼土及び炭化粒が見られ、焼土範囲は60×60cm~88×92cmである。

〈出土遺物〉 （第77, 80, 81図, 396図6・7, 403図）

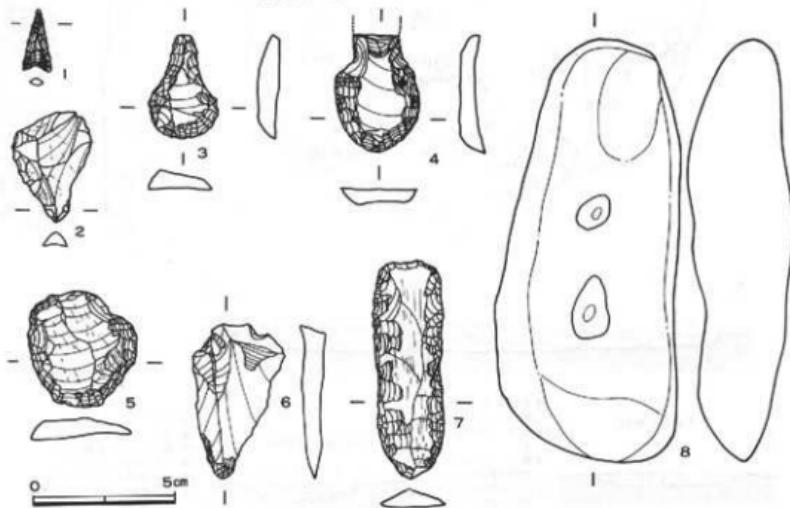
床面より1個の復元可能土器、70数点の土器片、床直より1個の復元可能土器、80数点の土器片を出土、他に覆土中より2個の復元可能土器、1箱の土器片、1点の石錐・石錐・圓石、



第78図 第25号竪穴住居跡実測図・同住居炉跡微細図



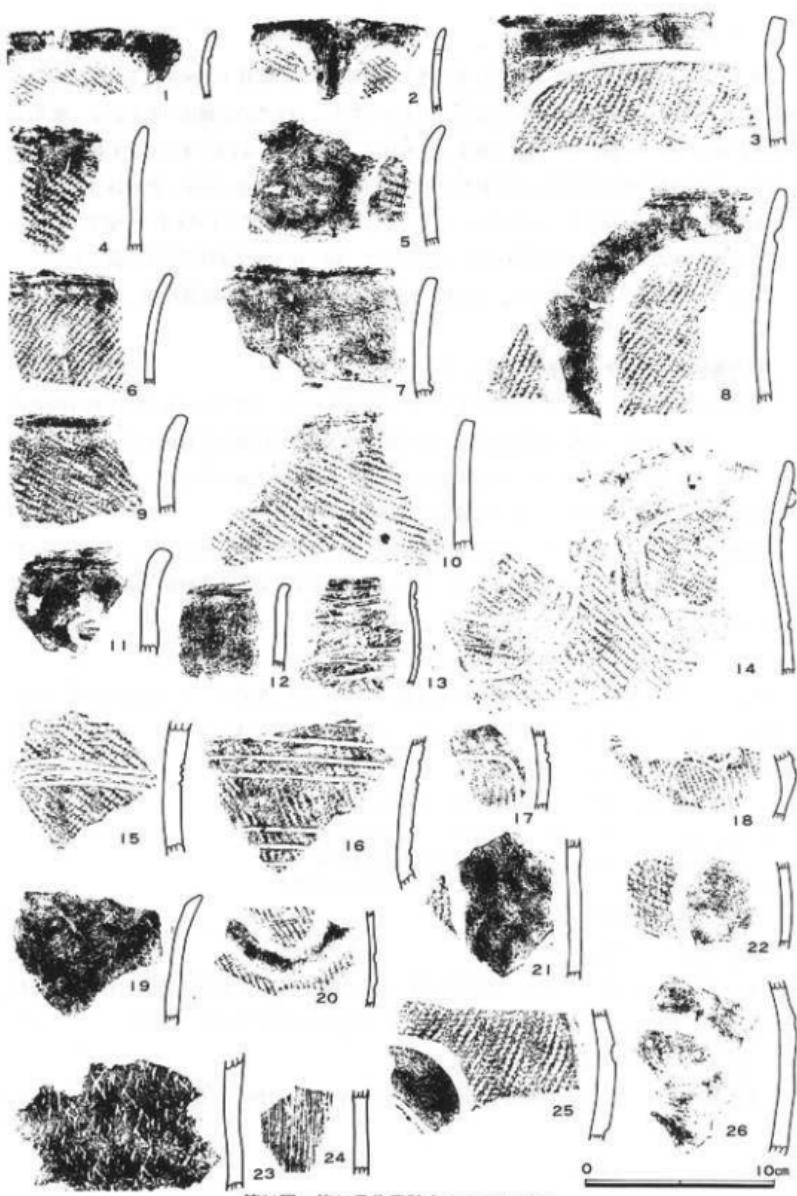
第79図 第25号住居4号炉跡微細図



第80図 第25号住居跡出土石器実測図

2点の石砲、3点の搔器を出土した。

396図6は、覆土より出土の壺形土器で、底径5cmを計る。胴上半部に「L」または「C」文が磨消繩文技法により施文、地文はLR斜繩文、色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。



第81図 第25号住居跡出土土器拓影図

396図7は、南西壁寄床直出土の広口壺と考えられる土器で、底径4.8cmを計る。磨消繩文による文様が胴中央部に施文されているが、上半を欠損しているため詳細は不明である。地文はR L原体を斜位に回転押圧した縦位繩文、色調はにぶい橙色(7.5Y R 7/4)を呈する。403図11は、北西壁寄り覆土中位出土の深鉢形土器で、口径12.4cm、底径4.9cm、器高18.4cmを計る。器面全体にR L斜繩文を施文、焼成はやや不良、色調は褐灰色(7.5Y R 4/1)を呈する。

77図12、81図22は床面、77図10・28、81図1・2・10・11・20は床直の出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より、本住居の時期は中期末葉(大木10式併行期)と考えられる。

#### 第26号竪穴住居跡と出土遺物(第82、83、427図)

〈構造の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東側のZ D-24・25グリッドに位置する。IV層上面で円形プランとして確認された。本住居跡北側に20号住居跡、西側に27号住居跡が近接する。

〈平面形・規模〉 2.37×2.34mの円形を呈する。床面積は3.92m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 2層に区分でき、自然堆積である。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。床面は全体的に平坦であり、しまりはやや弱い。壁はIV・V層から成り、やや急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁19.9cm、西壁27.3cm、南壁21.9cm、北壁33.2cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡内より3個、住居跡外周縁より4個の計7個のピットが検出された。住居跡内の3個はいずれも浅く、柱穴とは考えられない。周縁にあるPit 5・6・7が本住居跡に関連する柱穴と考えられる。

第26号竪穴住居跡ピット一覧表(単位:cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7
規 模	23×20	11×8	12×11	12×7	21×21	20×12	34×32
深 さ	1.7	2.0	2.0	2.2	8.5	20.0	39.0

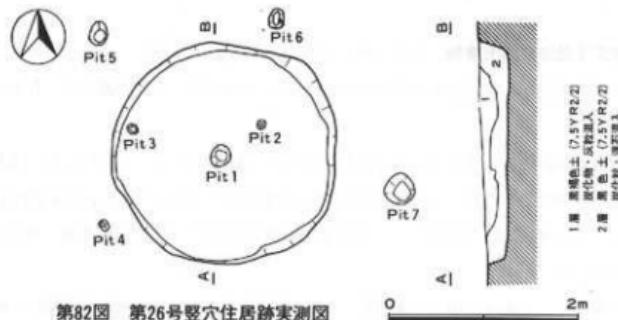
〈かご〉 検出できなかった。

〈出土遺物〉 (第83図、427図2)

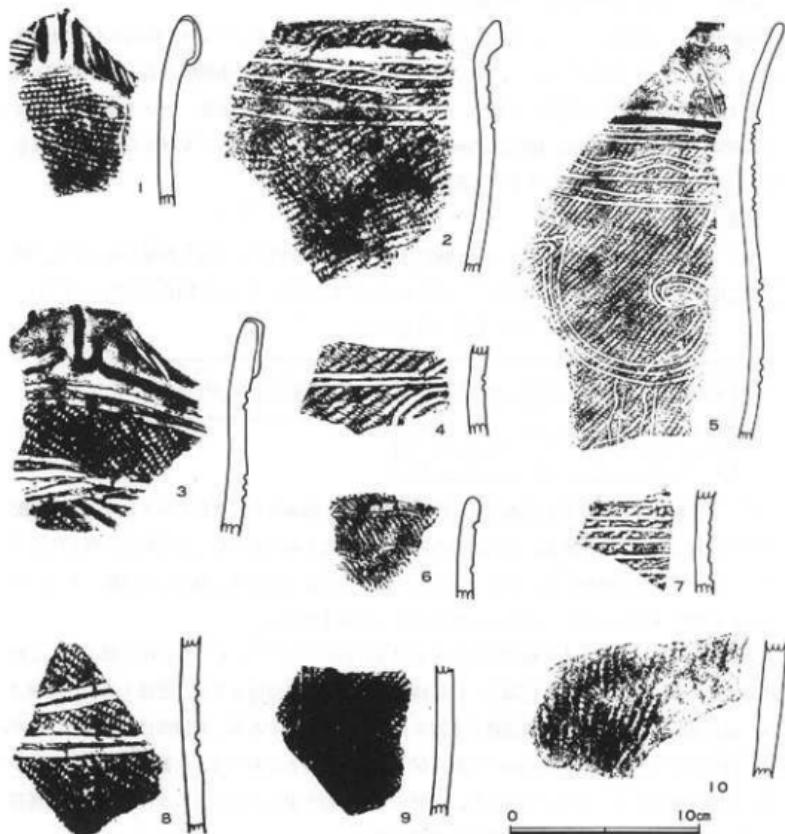
床面より7点、床直より14点の土器片を出土、他に覆土より1/5箱の土器片と1点の有孔石製品を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央部に多く分布している。

83図4・6は、床直上からの出土土器である。

出土遺物より、本住居の時期は中期中葉(円筒上層e式併行期)と考えられる。



第82図 第26号竪穴住居跡実測図



第83図 第26号住居跡出土土器拓影図

### 第27号竪穴住居跡と出土遺物（第84~87, 401, 404, 408, 423図）

〈遺構の位置と確認〉 A1区北東部のZD・ZC-23・24グリッドに位置する。Ⅳ層上面で確認された。

本住居跡覆土精査中に、第1層より土器埋設石圓炉が検出された。この炉に伴う住居跡の検出に務めたが、確認できなかった。本住居跡覆土を確認面とすることから、住居内炉、屋外炉のいずれとしても本住居跡より新しい。また本住居跡北西壁の一部で16号土壙と重複しており本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 3.90×3.01mの梢円形である。主軸方向はN-79°-E、床面積は8.08m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 5層に区分でき、人為堆積である。

〈床面・壁〉 壁際にテラスを有する二段構造の掘り込みである。テラス、床面ともⅣ層を掘り込んでそれぞれの面としており、堅くしまりがある。テラス面は南壁側が広く、最大幅66cm上段は住居中央部へやや傾斜しており、床面との比高は20~30cmを計る。テラス面からの壁高は東壁34.5cm、西壁41.5cm、南壁26.5cm、北壁36.7cmを計る。壁はⅣ・V層から成り、北壁を除き、やや緩やかな立ち上がりを呈する。

〈周溝〉 なし

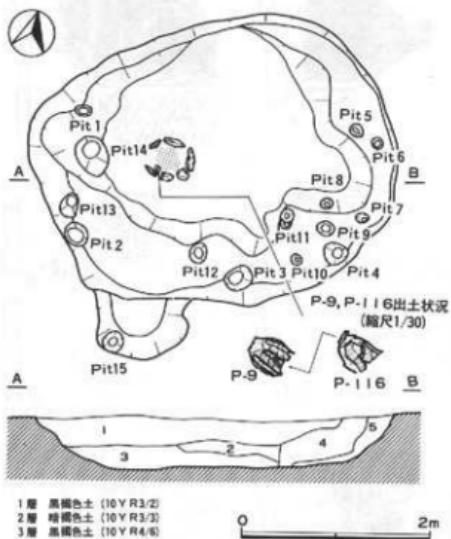
〈柱穴〉 本住居跡より15個のピットが検出された。これらのピットは北西壁を除くテラス壁際及び床面との境界部に位置している。Pit 1・2・3または12・4・5が主柱穴と考えられる。

第27号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規 模	17×12	26×22	29×24	23×22	15×13	13×13	14×12	13×13	18×16	12×10
深さ	10	10	27	7	21	7	10	16	9	15
Pit No.	11	12	13	14	15					
規 模	15×12	22×17	15×10	44×34	23×22					
深さ	15	18	13	9.5	4.3					

〈炉〉 住居跡中央より若干南西寄りに位置する。16~26cm大の自然石を56×47cmの円形に配した石圓炉である。炉内底面は25×27cmの範囲で、最大2cmの深さまで暗赤褐色に焼土化している。なお、本炉の西側が若干凹んでおり、中央部より西寄りに偏在した位置にあることから、石圓炉十掘り込み部より成る石圓複式炉の可能性もある。

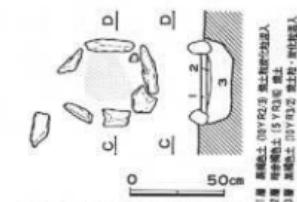
〈その他〉 本住居跡覆土中で確認された土器埋設石圓炉について、若干の説明を加える。土器埋設石圓炉は、住居南壁際に位置し、住居跡覆土第1層を確認面とする。埋設土器は口径19.1cm、底径8.8cm、器高32.2cmの深鉢形土器を正立させたものである。石圓炉は半壊しているが、12~31cm大の自然石9個を径25cmの円形に配していたものと思われる。土器内は3層に区分でき、2層が焼土化し、1層には炭化物、3層には焼土粒を混入している。また土器外も、径17~25cmの範囲が焼土化及び炭化物の混入が見られる。



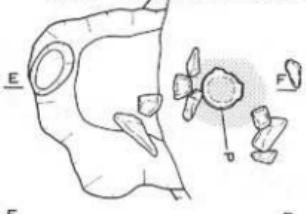
第84図 第27号竪穴住居跡実測図

1層 黒褐色土 (10Y R 3/2)  
2層 單褐色土 (10Y R 3/3)  
3層 黑褐色土 (10Y R 4/6)  
5層 單褐色土 (10Y R 3/4)

0 2m



第85図 第27号住居跡微細図

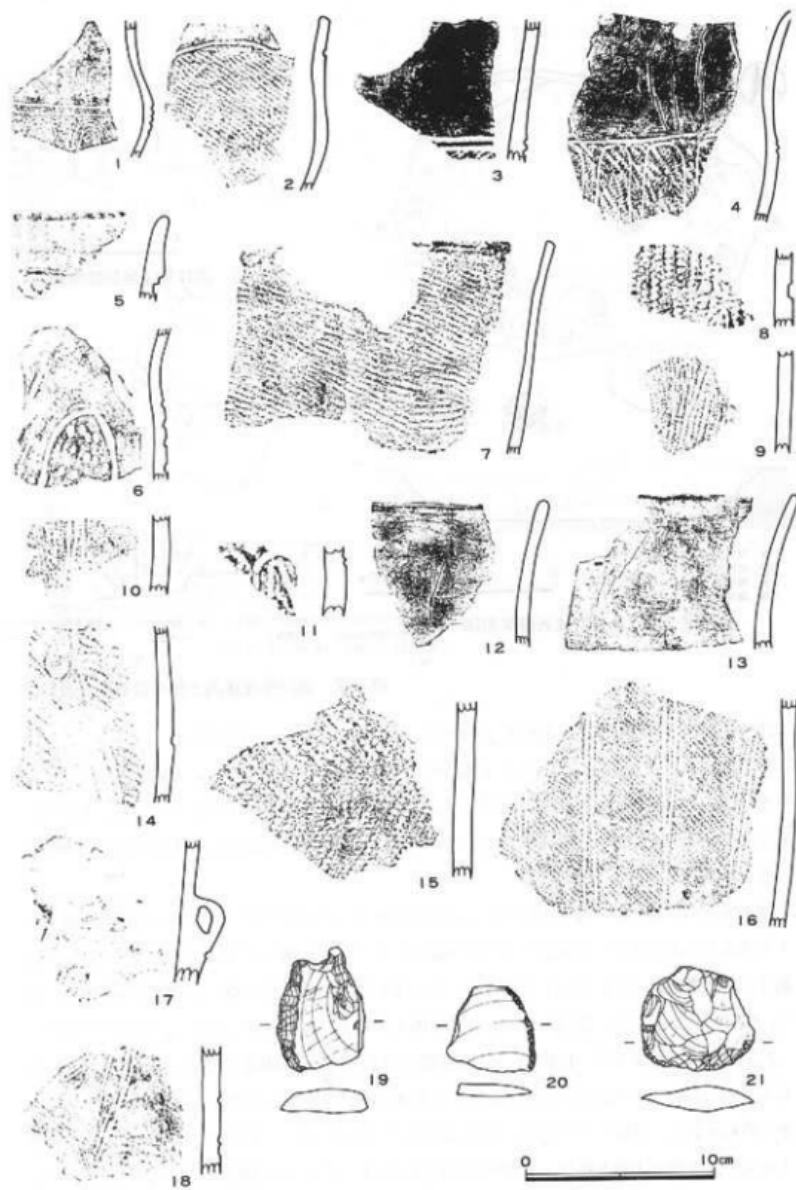


第86図 第27号住居内土器埋設石圓炉微細図

〈出土遺物〉 (第87図, 401図38, 404図2・4・7, 408図3, 423図18)

炉内より6点の土器片、床面より1個の復元可能土器と8点の土器片、床直より6点の土器片を出土。他に覆土中より1個の完形土器、3個の復元可能土器、1/3箱の土器片、1点の石匙・円盤状土製品、2点の搔器を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央から南壁側へかけて多く分布している。

401図38は、北壁寄り覆土中位で正立の状態で出土した完形土器で、一対の有孔小突起を有する浅鉢形土器である。口縁部下半から胴部下半までL R斜繩文を施文、焼成はやや良好、色調はにぶい黄褐色 (10Y R 5/4) を呈する。404図2は、南西壁寄り覆土上位出土の深鉢形土器で、口径13.2cmを計る。器面全体にL Rの斜繩文を施文、焼成はやや良好で、色調は灰褐色 (7.5Y R 4/2) を呈する。404図4は、南壁際床面より出土の深鉢形土器で、口径14.4cm、底径6.4cm、器高19.9cmを計る。口縁部中位より胴部下半に縦位の結節回転文を施文、胎土には小礫・砂粒を混入、焼成はやや良好、色調は黒褐色 (10Y R 3/2) を呈する。404図7は、中央覆土中位で、2個の土器が重なって横転した状態で出土したうちの内側の土器で、口径12.0cm、底径5.5cm、器高16.1cmを計る。器面全体に縦位の結節回転文を施文、焼成はやや良好、色調



第87図 第27居住居跡出土土器拓影図・石器実測図

は黒褐色（10YR 3/2）を呈する。

87図16は床直、87図9・10は炉跡出土土器である。

なお408図3は、本住居跡覆土上位で確認された土器埋設石圓炉の土器である。石圓部内ほぼ中央から正立の状態で出土した深鉢形土器で、口径19.1cm、底径8.8cm、高さ32.2cmを計る。口縁部中位より胴部下半までR L斜繩文を施し、胎土には小礫・砂粒を混入、焼成はやや不良で、色調はにぶい黄橙色（10YR 7/4）を呈する。

炉及び床面の出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

#### 第28号豊穴住居跡と出土遺物（第88~90、401、423図）

〈遺構の位置と確認〉 A1区中央部のZ A-15・16グリッドに位置する。IV層上面にて確認された。30号住居跡と重複、本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 3.60×2.86mの楕円形である。主軸方向はN-79°-W、床面積は7.48m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 6層に区分でき、人為堆積と考えられる。北壁際床直上に広い範囲で焼土が分布し、第5層に炭化物が混入されていることから、焼失家屋の可能性がある。

〈床面・壁〉 テラスを有する二段構造で、床、テラス面ともV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは南北壁際に位置し、その規模は最大幅61cm、床面からの高さ約10cmを計る。壁高は東壁59.7cm、北壁43.2cm、テラス上からの西及び南側の壁高はそれぞれ、33.4cm、34.1cmを計る。床面は、が周辺が若干レンズ状に落ち込み、全体に多少凹凸があり堅くしまっている。壁はIV・V層から成り、ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より7個のピットが検出された。配置及び深さから、Pit 1・2・5・7が主柱穴と考えられる。

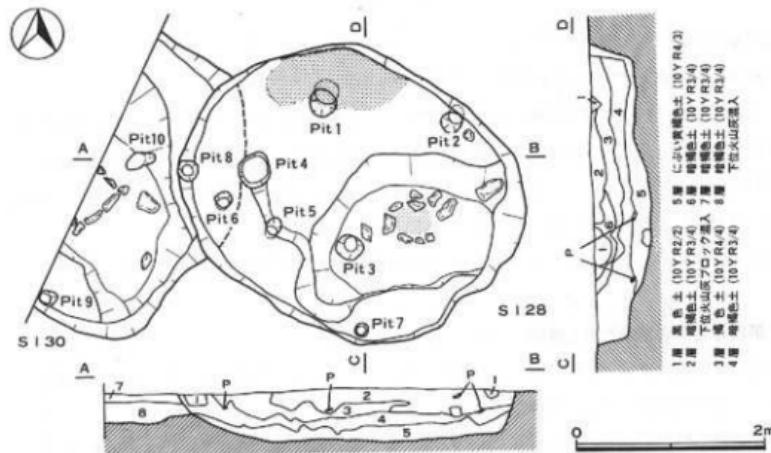
第28・30号豊穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規 模	30×28	24×20	30×27	40×34	23×16	20×20	16×14	22×22	16×16	22×18
深 さ	64.1	52.2	23.5	13.1	19.7	24.4	23.5	35.0	12.0	64.2

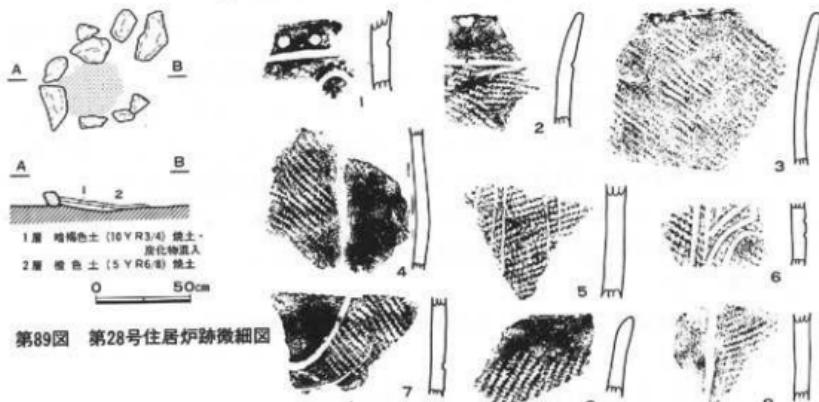
〈炉〉 住居跡中央よりやや南東寄りに位置する。8~28cm大の自然石を72×57cmの楕円形に配した石圓炉である。炉の南西側が若干低位であることや本炉の位置より、石圓部十掘り込み部の石圓複式炉の可能性もある。

〈出土遺物〉 （第90図、401図21、423図17）

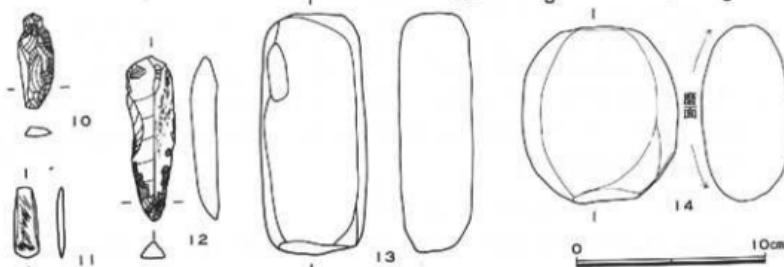
床面より11点の土器片、床直より48点の土器片と1点の石匙を出土し、他に覆土より1個の復元可能土器、1/5箱の土器片、1点の搔器・磨製石斧・磨石・円盤状土製品を出土した。これ



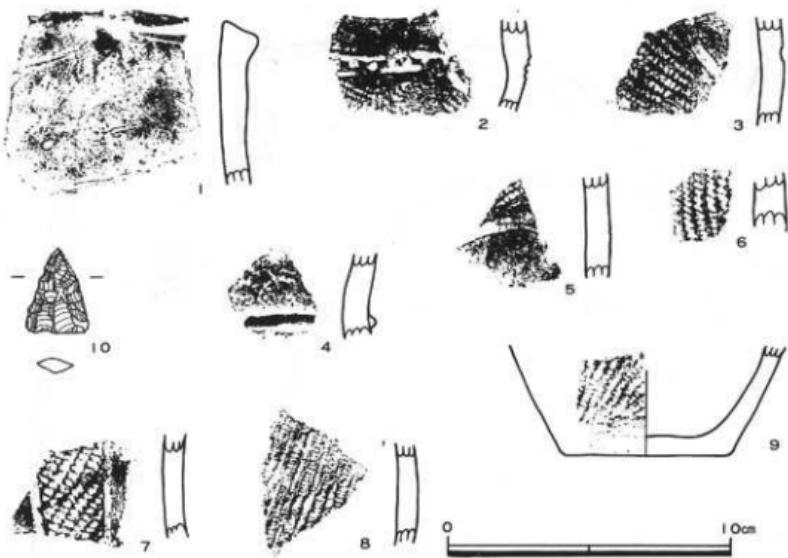
第88図 第28・30号竪穴住居跡実測図



第89図 第28号住居跡微細図



第90図 第28号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第91図 第30号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

らの遺物は、平面的には住居中央から北側に多く分布している。

401図21は、北東壁寄り覆土中位より出土した小型壺と考えられる土器で、底径2.5cmを計る。R Lの斜繩文で、胴中央部で施文方向を変え羽状繩文となっている。胎土には小礫・砂粒を混入、焼成は良好で、色調は灰褐色(7.5 YR 4/2)を呈する。

90図8は床面、他は覆土中からの出土土器である。

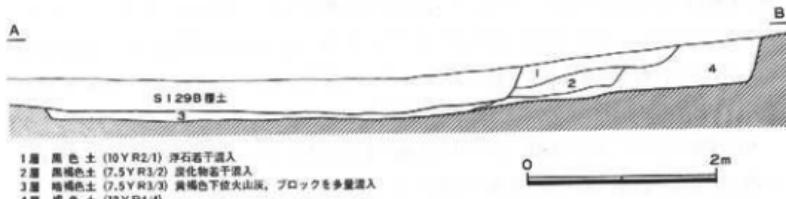
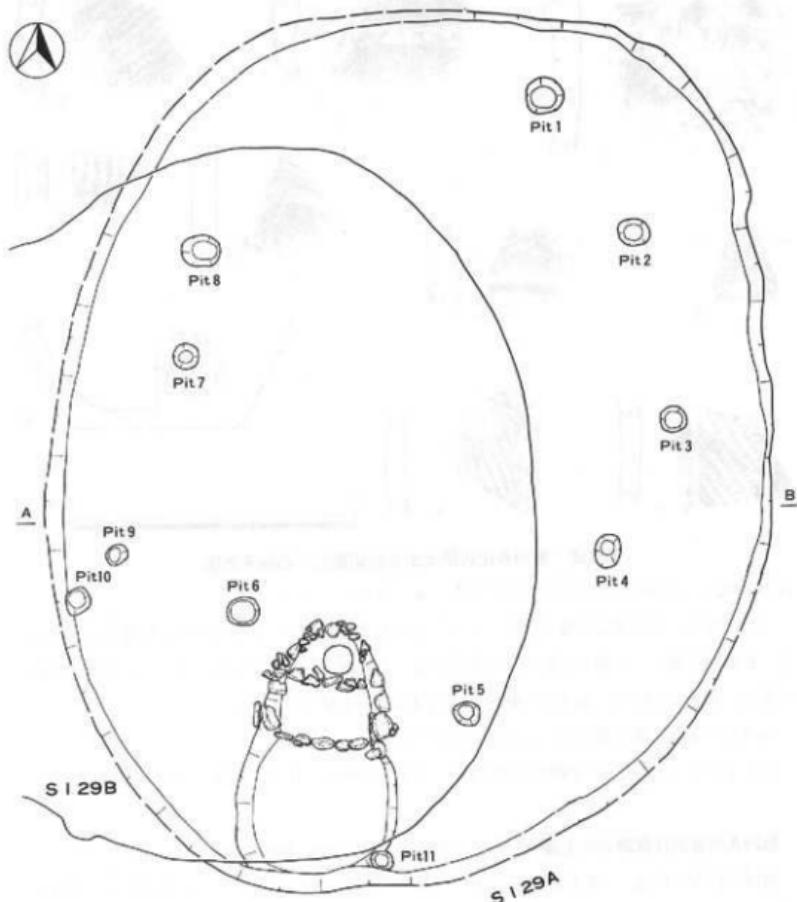
出土土器より、本住居の時期は中期後葉～末葉(大木9～10式併行期)と考えられる。

#### 第29A号竪穴住居跡と出土遺物(第92, 93, 95, 97, 400, 406, 428図)

〈遺構の位置と確認〉 A1区北東部のZ F・Z E・Z D-20・21グリッドに位置する。IV層上面で不整形の落ち込みを確認したが、本住居跡北側が北西方向への緩斜面であるため、プランの全容がつかめず、V層上面まで確認面を下げた。当初、本住居跡を不整橢円形の大型住居跡としていたが、精査の進むうち2軒の住居跡の重複と判明、東側のものを29A号住居跡、西側のものを29B号住居跡とした。以下、29A号住居跡について述べる。

本住居跡は29B・31号住居跡、30・31号土壙と重複関係にある。本住居跡は29B号住居跡より古く、31号住居跡、30・31号土壙より新しい。

〈平面形・規模〉 (9.48) × 7.68mの楕円形を呈する。主軸方向はN-4°-E、床面積は



第92図 第29A号竖穴住居跡実測図

(54.56) m<sup>2</sup> である。

〈堆積土〉 4層に区分でき、自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。北西壁は斜面のためつかめなかった。また西壁は、29B号住居構築により破壊され、底面から10cm程しか存在しない。他の壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し、壁高は東壁36.8cm、南壁37.8cm、北壁12.4cmを計る。

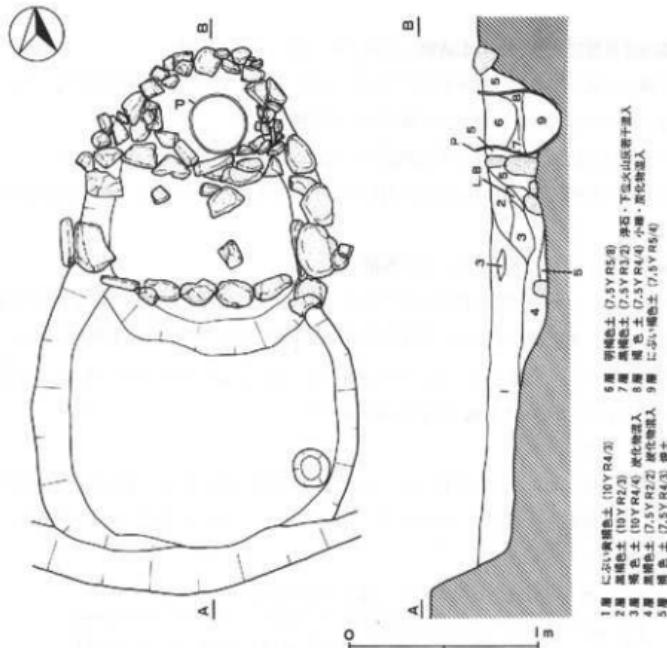
〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より11個のピットが検出された。Pit 1・2・3・4・5・7・8 及び未検出のピットを含めて主柱穴とし、主軸線に対称な5対10個 (Pit 1・(未検出), Pit 2・8, Pit 3・7, Pit 4・(未検出), Pit 5・(未検出)) を基本とする柱配置と考えられる。

第29A号住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規 模	40×40	35×29	30×28	28×25	29×25	35×30	29×27	43×32	23×22	28×25	38×3
深 さ	15.5	22.4	34.5	55.5	50.7	37.7	50.4	39.3	55.1	55.5	37.9

〈炉〉 本住居南壁に接する。土器埋設石囲部+石囲部+掘り込み部から成る2.68×1.72mの



第93図 第29A号住居跡微細図

規模の土器埋設石圓複式炉である。土器埋設石圓部は、底を欠いた広口壺に近い大型の深鉢とその周囲の5~20cm大の自然石を1~2段に、100×68cmの半円状に配した石圓より成る。土器周囲及び土器覆土上半が焼土化している。石圓部はやや大きめの石を140×76cmの横に長い方形に配している。底面は最大5cmの深さまで焼土化。その上層には炭化物を混入している。掘り込み部は、南壁まで延び、172×130cmの楕円形を呈する。

〈出土遺物〉 (第95・97図、400図2、406図5、428図6)

炉埋設土器以外、本住居炉（石圓部）より1個体の復元可能土器と40数点の土器片、床面から60数点、床直より50数点の土器片を出土した。また覆土中より1/2箱の土器片と石鐵、搔器、四石、磨石、磨製石製品をそれぞれ1点、磨製石斧、石皿をそれぞれ2点出土した。

400図2は炉石圓部中央底面から横転しつぶれたような状態で出土した深鉢形土器、406図5は炉埋設土器である。

95図1・5・7は床面、2は床直からの出土土器である。

炉内出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

#### 第29B号竪穴住居跡と出土遺物 (第94、96、98、398、409図)

(遺構の位置と確認) A<sub>1</sub>区北東部のZ F・Z E-19・20・21、Z D-20グリッドに位置する。IV層上面にて29A号住居跡と共に確認された遺構である。

29A号住居跡、25号土壤と重複関係にあり、本住居跡はいずれよりも新しい。

〈平面形・規模〉 7.46×7.02mの円形を呈する。主軸方向N-36°-E、床面積は37.08m<sup>2</sup>である。

〈堆積土〉 3層に区分でき、自然堆積である。

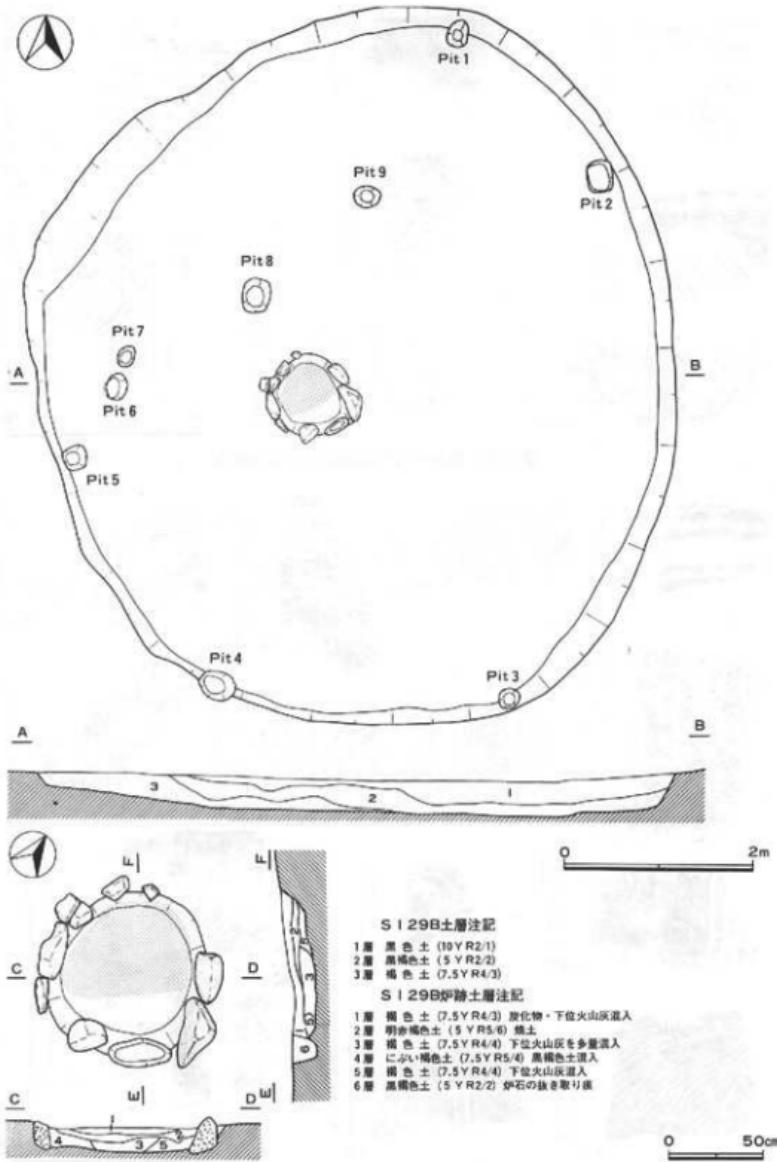
〈床面・壁〉 29A号住居跡覆土及びV層を掘り込んで床面としている。床面はほぼ平坦でしまりがある。東壁及び北壁の一部は29A号住居跡覆土、他の壁はIV・V層から成る。南壁から西壁にかけてはやや急な立ち上がりを、他の壁は緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁35cm、西壁14cm、南壁12.4cm、北壁36.8cmを計る。

〈周溝〉 なし

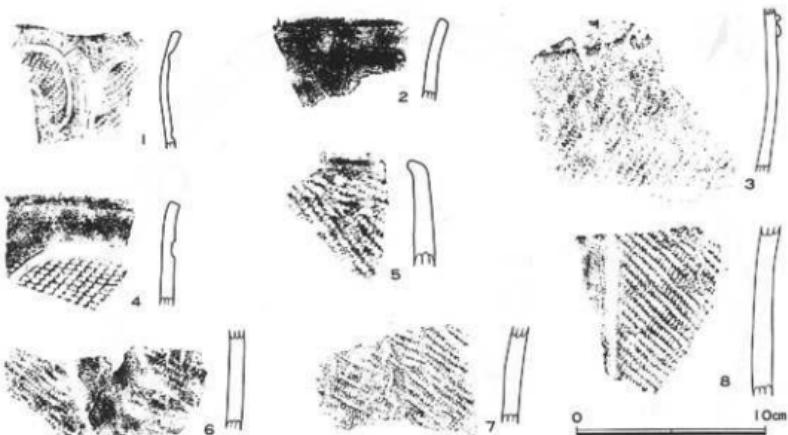
〈柱穴〉 Pit 1~5は壁に接し、その間隔に規則性が見られる。Pit 6・8・9も一直線上に並び、等間隔であることより主柱穴と考えられる。これに対応するピットがかきはさんで存在するものと思われる。

第29B号竪穴住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

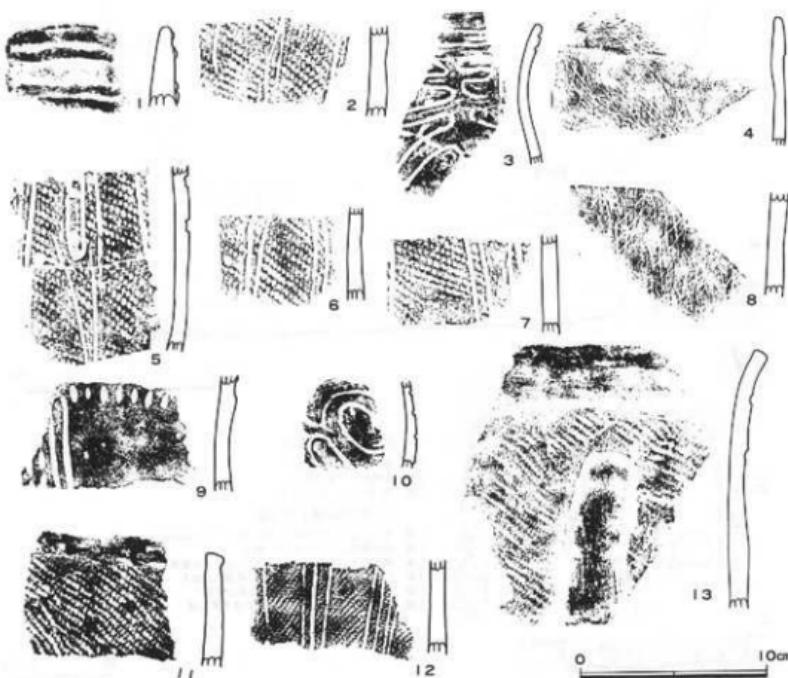
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
規 模	30×21	34×27	38×30	38×30	27×25	29×23	25×18	38×30	29×24
深 さ	32.8	25.0	37.9		16.2	36.0	47.5	37.9	30.7



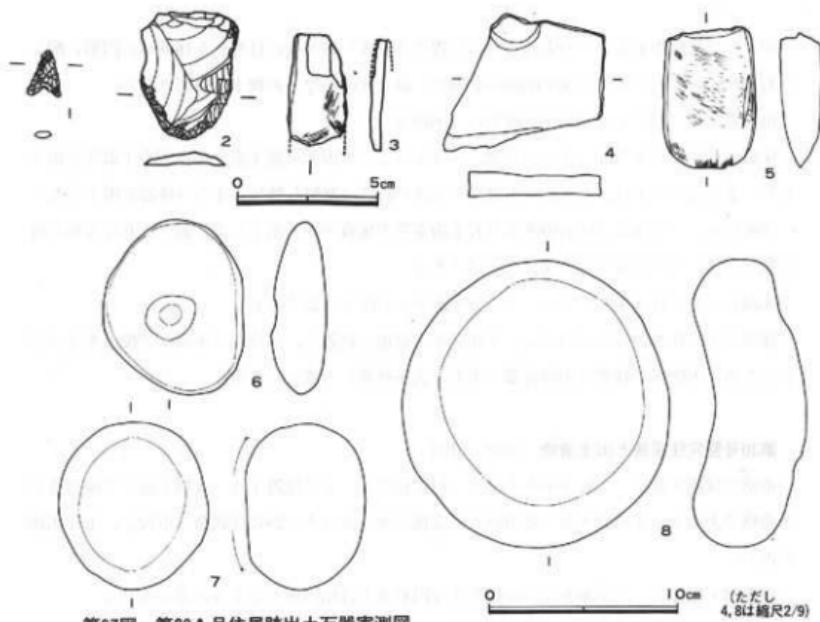
第94図 第29B号竪穴住居跡実測図・同住居炉跡微細図



第95図 第29A号住居跡出土土器拓影図

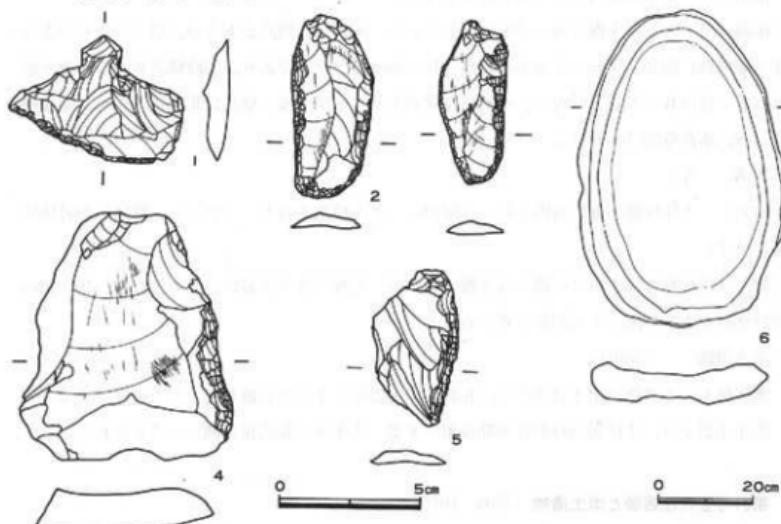


第96図 第29B号住居跡出土土器拓影図



第97図 第29A号住居跡出土石器実測図

(ただし  
4, 8は縮尺2/9)



第98図 第29B号住居跡出土石器実測図

〈炉〉 住居跡中央よりやや南西寄りに位置する。8~37cm大の自然石を径98cmの円形に配した石囲炉である。炉内には50×69cmの範囲で、最大8cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉 (第96, 98図, 398図6, 409図2)

床面より18点の土器片と1点の石皿、床底より2点の復元可能土器と60点弱の土器片を出土した。また覆土中より、1/2箱の土器片と1点の石匙・磨製石製品、4点の搔器を出土した。

398図6、409図2は住居中央より若干南寄りの床直上から出土した土器で、6は完全に近い無文土器、2は地文のみの深鉢形土器である。

96図6~9~11は床面、2~3~5は床底からの出土土器である。

後期の土器片を包含しているが、本住居が微高地に位置し、部分的に床面まで攪乱を受けていたため、本住居の時期は中期後葉(大木9式併行期)と考えられる。

### 第30号竪穴住居跡と出土遺物 (第88, 91図)

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区中央のZA-14・15グリッドに位置する。IV層上面にて確認された造構であるが、北西側半分は農道のため完掘できなかった。28号住居跡と重複し、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 3.26mを1つの径とする円形または椭円形を呈すると考えられる。

〈堆積土〉 発掘区域内では2層に区分できる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。床面には凹凸があるが、堅くしまりがある。北・南壁側に幅40~50cm、床面からの高さ10~20cmのテラスがあり、二段構造をとるものと思われる。壁はIV・V層より成り、やや急な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁31.3cm、南東壁35.4cm、南西壁20.1cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡発掘区域内より、3個のピットが検出された。(ピット一覧は、28号住居跡に付す)

〈炉〉 住居跡ほぼ中央に位置すると推測される。完掘できず全容はつかめないが、10~22cmの自然石を方形に配した石囲炉と考えられる。

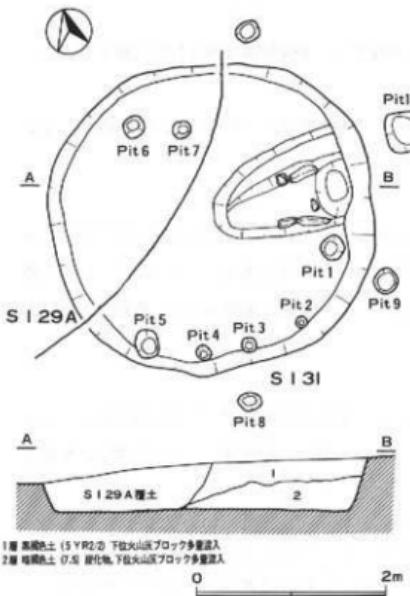
〈出土遺物〉 (第91図)

本住居からの遺物の出土は少なく、10数点の土器片と1点の石錐を出土したのみである。

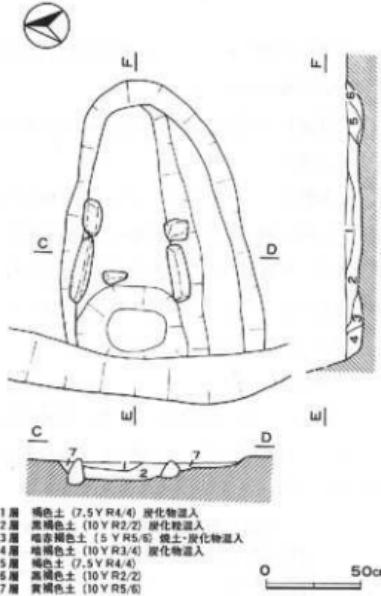
出土土器より、本住居の時期は中期後葉~末葉(大木9~10式併行期)と考えられる。

### 第31号竪穴住居跡と出土遺物 (第99~101図)

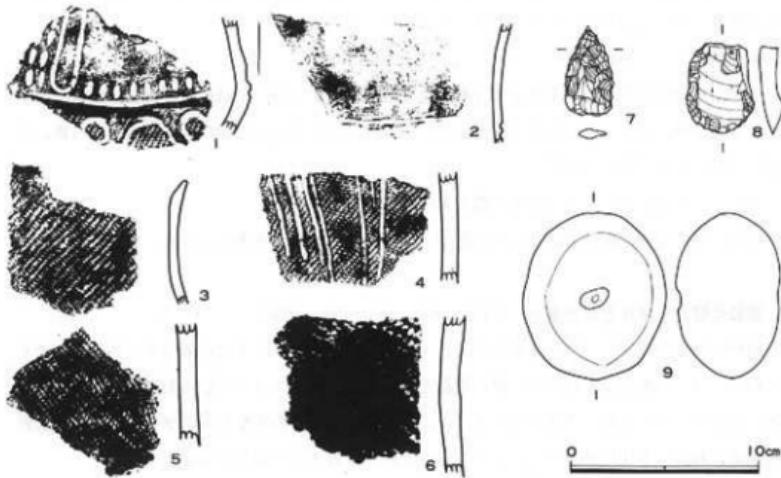
〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部のZ E・Z D-21グリッドに位置する。IV層上面にて確認



第99図 第31号竪穴住居跡実測図



第100図 第31号住居跡微細図



第101図 第31号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

された遺構である。29A号住居跡、24号土壙と重複する。本住居跡は29A号住居跡より古く、24号土壙より新しい。

〈平面形・規模〉 3.44×3.40mの円形を呈する。主軸方向はN-89°-E、床面積は7.52m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 4層に区分でき、人為堆積である。

〈床面・壁〉 24号土壙覆土とV層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で、堅くしまりがある。北西側の床面と西壁の北半及び北壁の西半は、29A号住居構築により消失している。残存壁はIV・V層より成り、やや急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁59.6cm、西壁24.5cm、南壁27.4cm、北壁57.4cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡内から7個、住居跡外周縁から4個の計11個のピットが検出された。Pit 1~5は南壁に接して配置されている。また、Pit 8~11は西壁外縁に、ほぼ等間隔に配置されている。

第31号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規 模	26×25	11×11	15×14	17×15	31×24	24×22	20×12	25×18	26×24	44×39	36×26
深 さ	14.0	6.9	8.1	9.0	32.4	14.2	27.5	32.9	21.5	70.0	46.0

〈炉〉 住居跡東壁に接する。半壊しているが、石開部十掘り込み部から成る石壠複式炉と思われる。石開部は12×32cmの自然石を、45×60cmの方形に配している。石開部の西側も若干の掘り込みとなっているが、本炉と関連すると思われる。

〈出土遺物〉 (第101図)

炉内より13点の土器片、床面より1個の復元可能土器、7点の土器片及び搔器、磨製石斧をそれぞれ1点、床底より5点の土器片を出土した。また覆土中より10数点の土器片と石鏃、石搔、凹石をそれぞれ1点出土した。

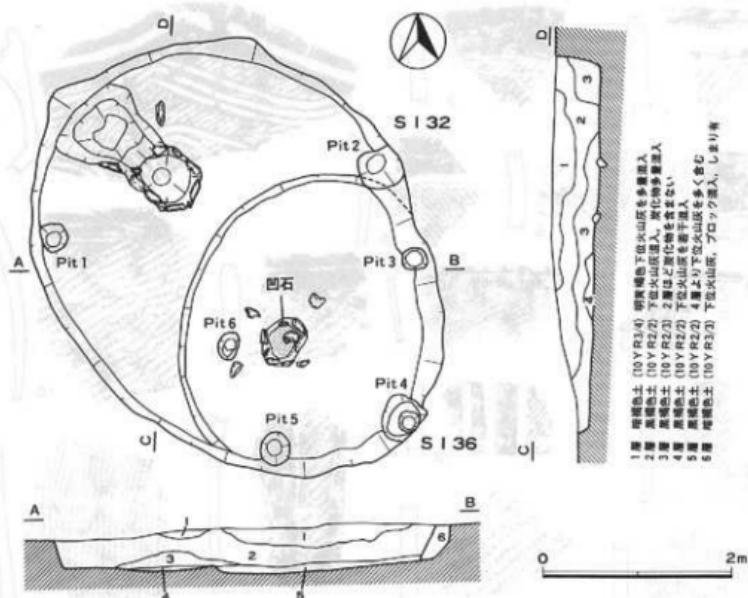
101図2・4は床面からの出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

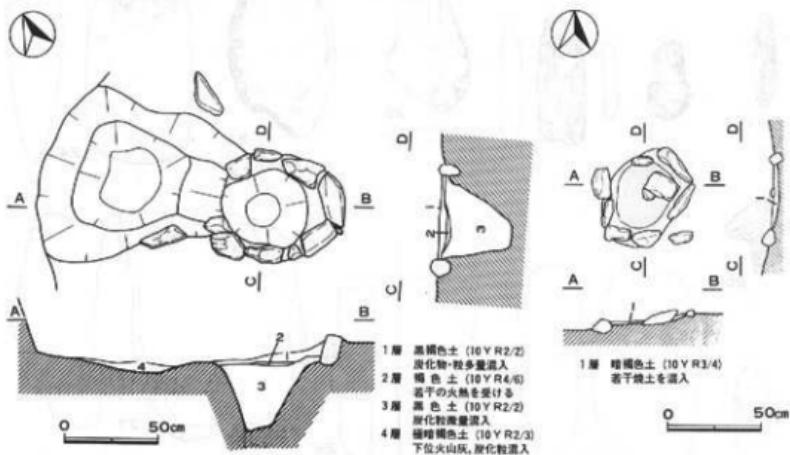
#### 第32号竪穴住居跡と出土遺物 (第102, 103, 105, 401, 426図)

〈遺構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部のZD-ZC-22・23グリッドに位置する。IV層上面で不整形のプランを確認、数軒の住居跡の重複と考え、各遺構のプラン及び新旧関係を把握するため、最終的にV層上面まで確認面を下げた。精査の結果、この不整形のプランは6軒の住居跡の重複と判明、本住居跡はこれらのうち最も北側に位置する住居跡である。

本住居跡は36・37号住居跡及び19号土壙と重複し、それらのうち最も新しい。

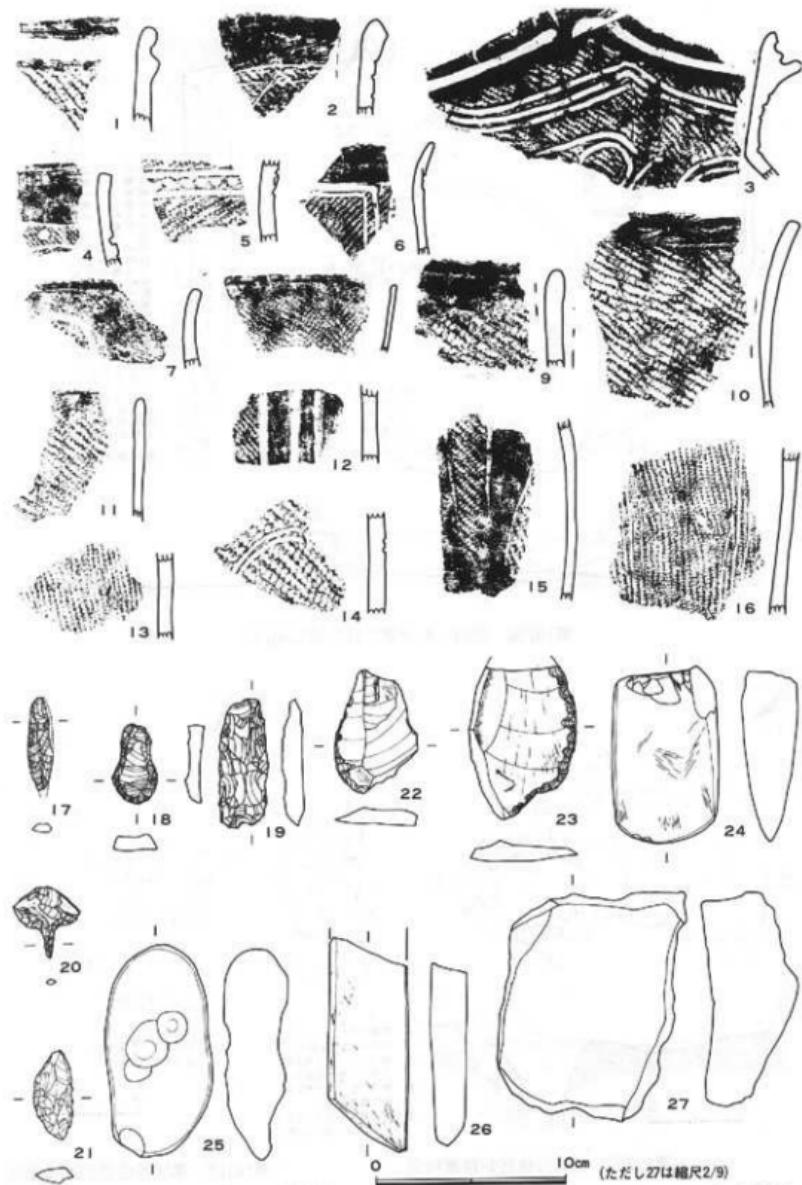


第102図 第32・36号竪穴住居跡実測図



第103図 第32号住居炉跡微細図





第105図 第32・36号住居出土土器拓影図・石器実測図 (10, 25は第36号住居出土遺物)

〈平面形・規模〉 (4.30) ×3.91mの楕円形を呈する。主軸方向は N-44°-W, 床面積は約11.68m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 4層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 南東側の重複部分は36号住居跡覆土、南西の重複部分は37号住居跡覆土、他の部分はV層を掘り込んで床面としている。床面はほぼ平坦で、堅くしまっている。南西壁は37号住居跡覆土、南東壁は36号住居跡覆土、他の壁はIV・V層から成り、ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁44cm、西壁45cm、南壁12cm、北壁42cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より3個のピットが検出された。Pit 1・2・6を主柱穴とし、軸線に対称な2対4個 (Pit 1・(未検出), 2・6) を基本とする柱配置と考えられる。

第32・36号竪穴住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6
規 模	30×28	50×48	26×23	46×39	36×33	30×20
深 さ	26	58	17	70	25	15

〈炉〉 住居跡北西壁に接する。石囲部十掘り込み部から成る 159×95cm の規模の石囲複式である。石囲部は一部炉石を欠くが 8~31cm 大の自然石を 71×60cm の楕円形に配していたものと考えられる。炉内中央部に径23cmの円形、1cmの深さで若干の火熱を受けた痕跡がある。焼土の北側に規模46×43cm、深さ33cmの円形のピットを有するが、性格はつかめなかった。掘り込み部は95×95cmの壁側が広がる台形で、深さは約13cmを計る。片縁辺に24cm大の自然石1個、対峙する縁辺部付近に同規模の自然石1個が検出された。

〈出土遺物〉 (第105図、401図15、426図8)

床面より6点、床直より10数点の土器片を出土。他に覆土中より1個の台付土器、1/4箱の土器片、1点の石鏃・石錐・磨製石斧・石皿・有孔石製品、2点の石箇・搔器を出土した。これららの遺物は、平面的には南東部に多く分布している。

401図15は、中央部覆土中位出土の小型台付土器で、底径3.1cmを計る。台部は無文、胴部はL Rの斜繩文と考えられる。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色 (10 YR 6/3) を呈する。

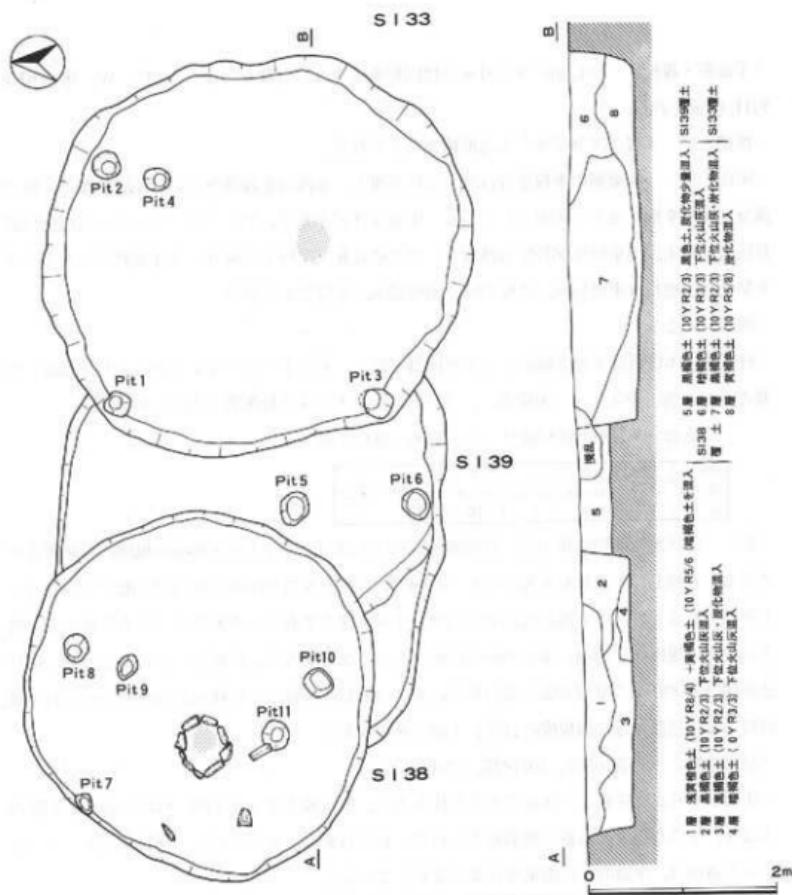
105図11は床面、8・14~16は床直上からの出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉 (大木9式併行期) と考えられる。

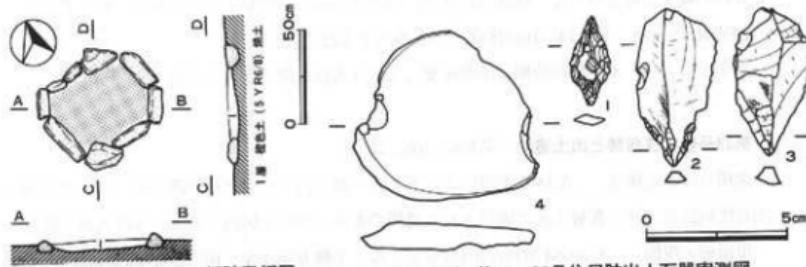
第33号竪穴住居跡と出土遺物 (第106、108、109図)

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部のZ C・Z B-23・24グリッドに位置する。32・37・38・39号住居跡等と共にIV層上面で確認された造構である。39号住居跡と重複、本住居跡が新しい。

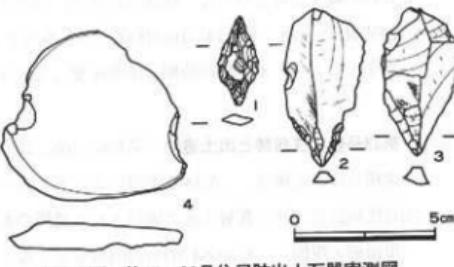
〈平面形・規模〉 4.38×4.09mの円形を呈する。主軸方向は N-10°-W, 床面積は12.80m<sup>2</sup>



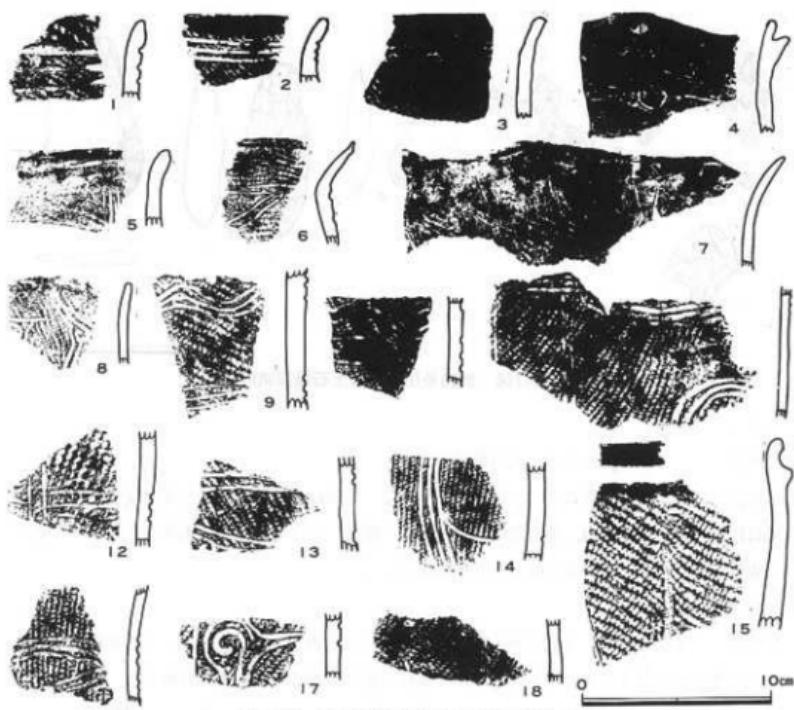
第106図 第33・38・39号竪穴住居跡実測図



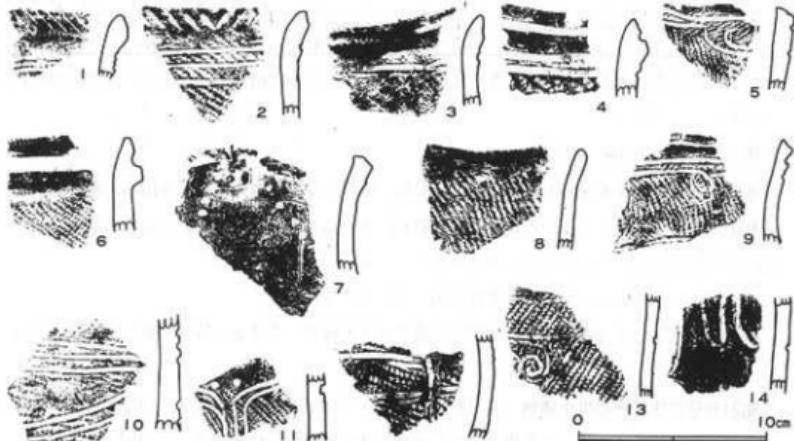
第107図 第38号住居跡微細図



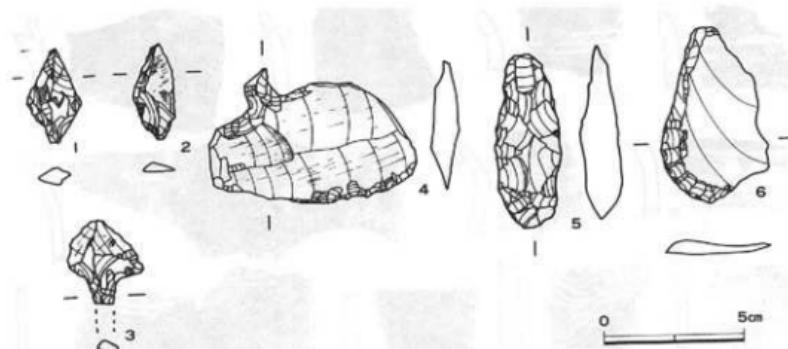
第108図 第33・38号住居跡出土石器実測図



第109図 第33号住居跡出土土器拓影図



第110図 第38号住居跡出土土器拓影図



第111図 第38号住居跡出土石器実測図

を計る。

〈堆積上〉 3層に区分でき、人為堆積である。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。床面はほぼ平坦で、しまりは弱い。西壁は39号住居跡覆土及びV層、他の壁はIV・V層から成り、ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁64cm、西壁65cm、南壁63cm、北壁88cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より4個のピットが検出された。このうちPit 1・2・3が主柱穴で、未検出の南東壁に接するピットを含めて、4本柱の配列となるものと考えられる。

第33・38・39号住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
幅 横	25×24	30×30	32×28	26×25	36×30	35×30	24×17	25×20	28×20	30×30	33×29
深 さ	13	15	17	4	7	17	16	15	15	17	12

〈炉〉 住居跡中央よりやや南東寄りに位置する。40×32cmの楕円形の地床がで、炉底面が若干赤変している程度である。

〈出土遺物〉 (第108, 109図)

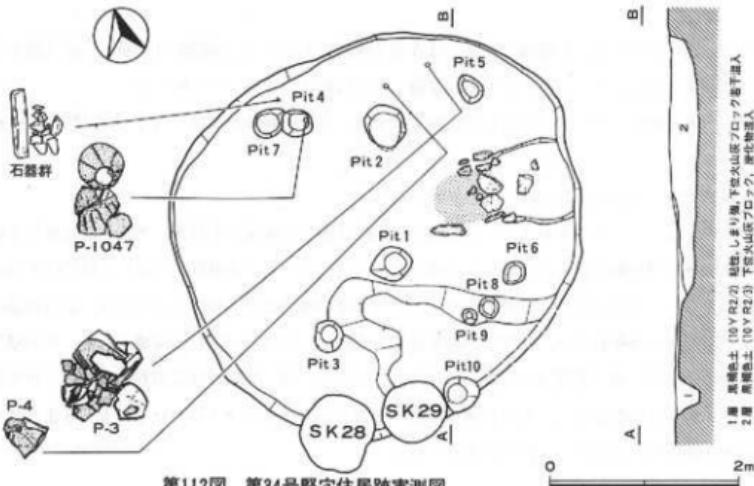
床面より1個の復元可能土器と8点の土器片、床直より10数点の土器片を出土し、他に覆土中より1/6箱の土器片と1点の石鏃・搔器・磨石。2点の石錐を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央から東壁寄りに多く分布している。

109図1・2・14は床面、10は床直の出土土器である。

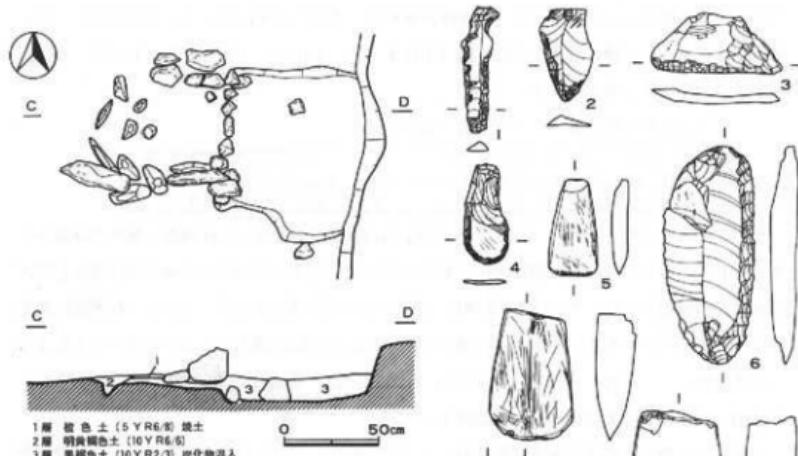
床面と床直上の出土遺物より、本住居の時期は中期後葉(大木8b式併行期)と考えられる。

第34号竪穴住居跡と出土遺物 (第112~115, 400~403, 408, 409, 423, 426, 428図)

〈遺構の位置と確認〉 A1区北東部のZ C-19・20グリッドに位置する。この周辺は南方向へ



第112図 第34号竪穴住居跡実測図



第113図 第34号住居跡炉跡微細図



第114図 第34号住居跡出土石器実測図

の緩斜面であるため、北壁側のプランはIV層で確認したものの、南壁側はV層まで確認面を下げるを得なかった。28・29号土壙と重複、本住居跡はいずれよりも新しい。

〈平面形・規模〉 4.36×4.24mの円形を呈する。主軸方向はN-72°-W、床面積は13.84m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 2層に区分でき、人為堆積である。

〈床面・壁〉 テラスを有する二段構造で、床面は28号土壙及びV層を、テラス面は29号土壙覆土及びV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは南壁際に位置し、規模68×70cm、床面から6~8cmの高さにあり、テラス面から南壁の確認面までの高さは7.6cm、他の壁高は東壁32.0cm、西壁43.7cm、北壁50.9cmを計る。南壁の一部は28・29号土壙覆土より、他の壁はV層より成る。東・西壁はやや緩やかな立ち上がりを、南・北壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈する。床面は凹凸が多く、非常に堅くしまりがある。また、テラスについてはPit 8または9とPit 10より、出入口との関連が考えられる。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より10個のピットが検出された。このうちPit 1~3・4または7・5・6を主柱穴とし、主軸に対称な3対6個（Pit 1・2、Pit 3・4または7、Pit 5・6）を基本とする柱配置と考えられる。

第34号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

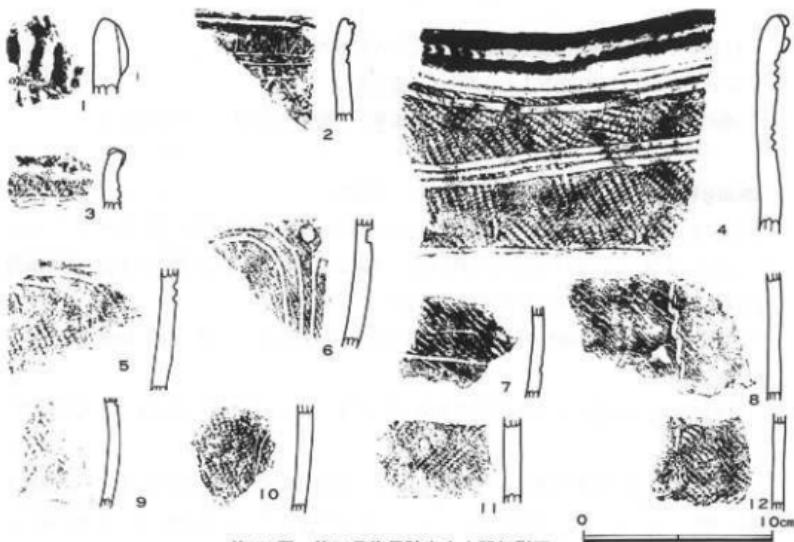
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規 模	44×38	46×41	36×28	31×28	31×24	26×24	30×30	24×21	18×16	38×38
深 度	42.2	37.1	35.7	52.0	32.3	21.1	32.5	9.8	10.3	

〈炉〉 住居跡東壁に接する。半壊しているが、石の抜き取り痕より、石圓部十掘り込み部から成る1.45×0.94mの規模の石圓複式炉であると考えられる。石圓部は5~38cm大の自然石を75×73cmの半椭円形状に配したもので、北側及び西側には2重に配したと考えられる。石圓部底面全周が1~2cmの厚さで焼土化している。掘り込み部は70×94cmの規模で、方形に近い形を呈する。

〈出土遺物〉 （第114、115図、400図9、401図9・28、402図13・18、403図21、408図7、409図10、423図19、426図11・12、428図8）

床面より9個の完形及び復元可能土器、8点の土器片、1点の石錐・石匙、4点の磨製石斧、7点の搔器、床面より10数点の土器片、1点の石劍を出土、他に覆土中より1個の完形土器と少量の土器片、1点の搔器、磨製石斧・円盤状土製品、2点の有孔石製品を出土した。これらの遺物は、平面的には住居中央から西壁寄りに多く分布している。

400図9は、北壁際床面で横転しつぶれたような状態で出土した深鉢形土器で、口径24cm、底径9cm、器高42.5cmを計る。口縁部から胴上半部に磨消繩文による「D」状区画文を施し、地文はL R斜繩文、底部には網代痕を有する。所々に結節回転文をアクセント用に付加し、色



第115図 第34号住居跡出土土器拓影図

調は明赤褐色（5 YR 5/6）を呈する。401図9は、北西壁寄り覆土中位より出土の完形土器で、無頸壺または口縁部が内側する鉢形とも言うべき無文のミニチュア土器である。口径3.3cm、底径1.5cm、器高5.0cmを計る。焼成は良好で、色調は橙色（5 YR 7/6）を呈する。401図28は、南壁寄り床面から出土した完形土器で、小型壺形土器と考えられる。底径5.5cmを計り、器面にはR L斜繩文を施文、焼成は良好、色調はにほい橙色（7.5 YR 7/4）を呈する。

402図13は、南壁寄り床面から出土の深鉢形土器で、底径4.4cmを計る。器面にはR L斜繩文を施文、焼成はやや良好、色調はにほい赤褐色（5 YR 4/3）を呈する。402図18は、北壁寄り床面で横転の状態で出土した完形土器で、深鉢形を呈し、口径14.7cm、底径7.1cm、器高18.2cmを計る。口縁部から胴部下半までL R斜繩文を施文、胎土には小礫・砂粒を混入、焼成はやや良好、色調は明赤褐色（2.5 YR 5/6）を呈する。403図21は、北壁際床面で横転しつぶれたような状態で出土した、口縁部の内側する深鉢形土器で、口径16.7cm、底径6.0cm、器高16.9cmを計る。口縁部下半より胴部下半までR L斜繩文を施文、焼成はやや不良、色調は灰褐色（5 YR 4/2）を呈する。408図7は、住居中央床面出土の深鉢形土器で、口径26.3cmを計る。口縁部下半より胴部にかけて縦位の結節回転文を施文、焼成はやや不良、色調は褐色（7.5 YR 4/3）を呈する。408図10は、北西壁寄り床面で横転しつぶれた状態で出土した深鉢形土器で、口径26.4cm、底径10.1cm、器高45.3cmを計る。口縁部中位から胴部下半にかけてR L斜繩文を施文、焼成はやや良好、色調は灰黄褐色（10 YR 6/2）を呈する。

114図は、北西壁際床面より密集して出土した石器である。

115図3・10・11は、床直上からの出土土器である。

床面の出土土器より、本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。

#### 第36号竪穴住居跡と出土遺物（第102・104・105図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部のZ C-22・23グリッドに位置する。本住居跡のプランの東・南壁はIV層、西・北壁は32号住居跡床面で確認された。32・37号住居跡と重複、本住居跡は37号住居跡より新しく、32号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 3.26×2.77mの円形を呈する。主軸方向はN-17°-E、床面積は5.88m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 そのほとんどを32号住居構築により消失し、2層を残すのみである。人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。床面は東壁側から西壁側へわずかに傾斜するが、堅くしまりがある。北壁及び西壁は、32号住居構築により、床面から6-7cmを残して消失している。東壁及び南壁はIV・V層から成り、壁高は東壁32cm、南壁26cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 Pit 3・4・5と未検出の2個のピットの計5個を主柱穴とする柱配置と考えられる。（ピット一覧は、32号住居跡に付す）

〈炉〉 住居跡中央よりやや南西寄りに位置する。若干炉石が動いている痕跡があるが、5-30cm大の自然石及び1個の凹石を用い、本来は55×45cmの楕円形に配された石囲爐と考えられる。炉内底面が40×33cmの範囲で、わずかに焼土化している。

〈出土遺物〉（第105図）

本住居からの出土遺物は少なく、わずかに、床面より2点の土器片、覆土より若干の土器片を出土したのみである。

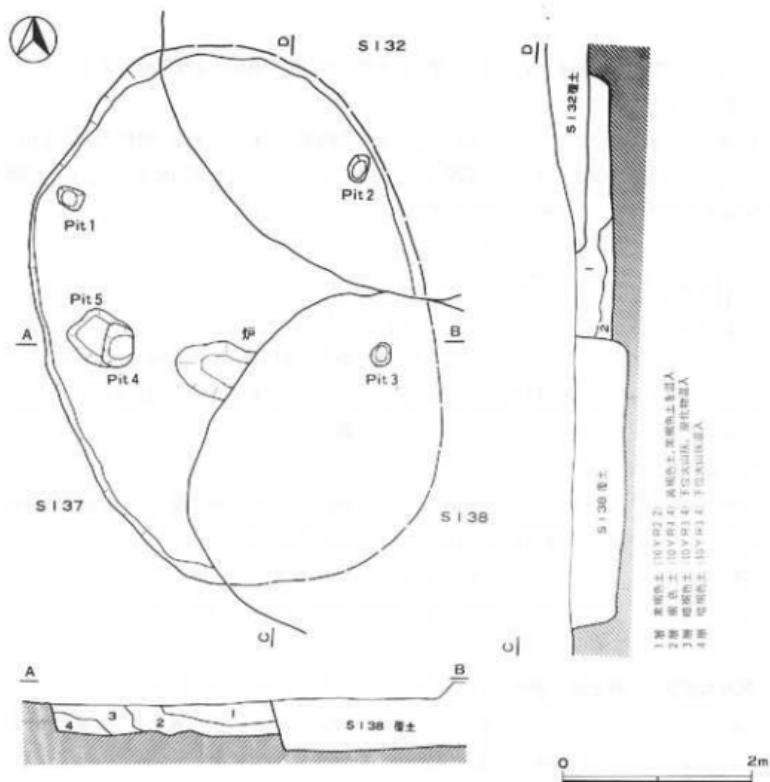
105図10は、床面からの出土土器、25は炉を形成する凹石である。

出土遺物及び新旧関係より、本住居の時期は中期後葉と考えられる。

#### 第37号住居跡と出土遺物（第116、117図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部のZ C・Z B-22グリッドに位置する。IV層上面での確認である。32・36・38号住居跡と重複し、本住居跡はいずれよりも古いと考えられる。

〈平面形・規模〉 東半の壁は他の造構との重複で不明であるが、(5.80)×(4.04)mの楕円形を呈すると考えられる。主軸方向はN-10°-W、床面積は(19.04)m<sup>2</sup>を計る。



第116図 第37号堅穴住居跡実測図



第117図 第37号住居跡出土土器拓影図

〈堆積土〉 4層に区分でき、自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。南東側は38号住居構築により破壊されている。床面は若干凹凸があり、堅くしまりがある。壁はIV・V層から成るが、南・東壁の一部は38号住居構築により消失、また北東壁は、32号住居跡との重複により壁高21cmを残すのみである。

る。ほぼ垂直な立ち上がりを呈するが、壁高は西壁29cm、南壁21cm、北壁59cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡に付随すると思われるピットが5個検出された。主軸に対称な2対（Pit 1・2、3・4または5）の4個の配置が見られるが、それぞれの位置関係から、さらに南側に未検出の1対のピットがあったものと考えられる。

第37号堅穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5
規 模	28×20	30×20	25×20	43×30	55×40
深 さ	17	15	15	44	20

〈炉〉 住居跡中央よりやや南東寄りに位置する。38号住居構築により部分的に破壊されており、全容は不明である。短軸60cmの浅い掘り込みと、その中に若干の焼土を確認したのみで、石の抜き取り痕が確認されなかったことと、炉の位置から、地床炉と考えられる。

〈出土遺物〉 (第117図)

本住居からの出土遺物は少なく、床面より2点、床直より6点の他、覆土より少量の土器片を出土したのみである。平面的には、住居中央部からの出土が多い。

117図3は床面、1・2・4は床直の出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。

### 第38号堅穴住居跡と出土遺物（第106～108、110、111、407、408、428図）

〈造構の位置と確認〉 A1区北東部のZ C・Z B-22・23グリッドに位置する。IV層上面での確認である。37・39号住居跡と重複、本住居跡がいずれよりも新しい。

〈平面形・規模〉 3.87×3.56mの円形を呈する。主軸方向はN-89°-E、床面積は10.16m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 4層に区分でき、人為堆積である。

〈床面・壁〉 V層を掘り込んで床面としている。床面はほぼ平坦で、堅くしまりがある。西南壁の一部は39号住居跡覆土とV層、他の壁はIV・V層から成る。ほぼ垂直な立ち上がりを呈し、壁高は東壁52cm、西壁50cm、南壁43cm、北壁55cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 38・39号住居跡より計7個のピットが検出された。このうちPit 7・8・10と、未検出の東及び南西壁際の2つの柱穴を加えた計5個を主柱穴とする柱配置と考えられる。（ピット一覧は33号住居跡に付す）

〈炉〉 住居跡中央よりやや南西寄りに位置する。10～30cm大の自然石を63×51cmの楕円形に配した石囲炉である。炉内全体が焼け、焼土は最大6cmの厚さがある。

〈出土遺物〉 (第108・110・111図, 407図5, 408図8, 428図17)

床直より10数点の土器片を出土。他に覆土中より2個の復元可能土器と1/6箱の土器片、1点の石錐・石匙・石鑓・石礫を出土した。

392図5は、覆土中位出土の折り返し口縁の深鉢形土器で、口径25.3cmを計る。頸部より胴部下半まで「O」状の区画文、「O」文間上位には刺突文を刻文、地文はR L斜繩文、焼成はやや不良、色調は灰黄褐色(10Y R 4/2)を呈する。393図8は、西壁寄り覆土中位出土の深鉢形土器で、口径24.9cmを計る。口縁部中位から胴部下半にかけ、L Rの斜繩文を施文、焼成はやや不良、色調はにぶい褐色(7.5Y R 6/3)を呈する。

110図2・3は床直、他は覆土中位からの出土土器である。

出土土器及び新旧関係より、本住居の時期は中期後葉(大木8b式併行期)と考えられる。

#### 第39号竪穴住居跡と出土遺物 (第106図)

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部のZ C・Z B-22・23グリッドに位置する。IV層上面での確認である。33・38号住居跡と重複、本住居跡がいずれよりも古い。

〈平面形・規模〉 33・38号住居構築により東・西壁を消失しているので、長軸方向の規模は不明である。残存壁から推定すると、短軸3.92mの楕円形を呈すると考えられる。

〈堆積土〉 2層に区分でき、自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 33・38号住居構築により、その大部分を破壊されている。残存部はほぼ平坦で、堅くしまっている。壁はIV・V層より成る。東・西壁は33・38号住居構築により消失している。壁高は南壁24cm、北壁49cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 Pit 6・9・11が本住居跡の柱穴と考えられる。これらと、本住居跡北東側の33号住居により消失したと思われる柱穴1個の、計4個を主柱穴とする柱配置と考えられる。(ピット一覧は、38号住居跡に付す)

〈炉〉 残存部からは検出されなかった。

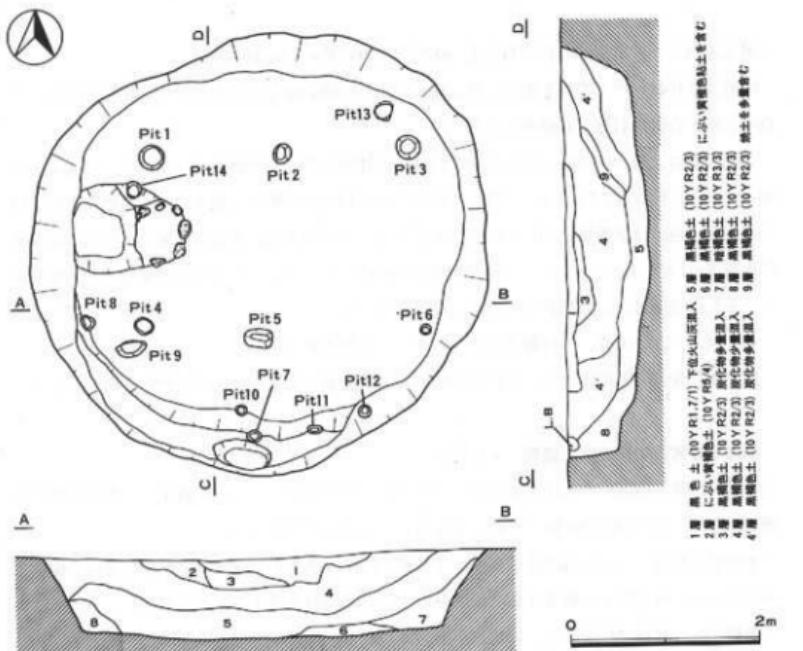
〈出土遺物〉

33・38号住居との重複により遺物の出土量は少なく、床面より4点、床直より2点の他、覆土中より若干の土器片を出土したのみである。

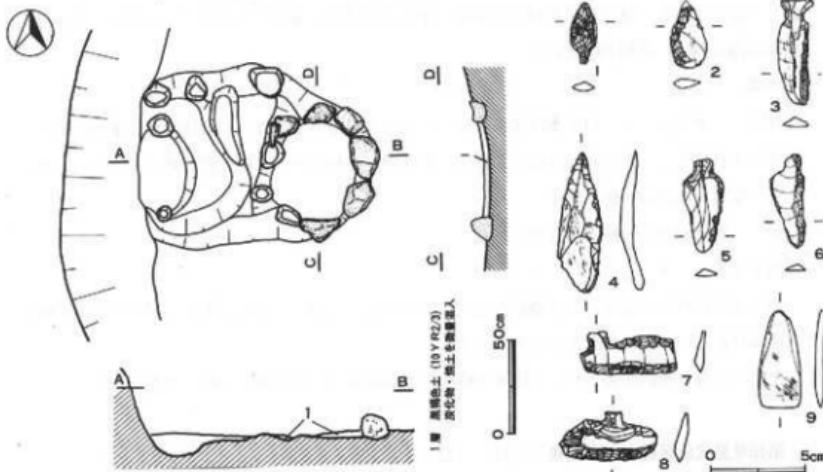
出土土器及び新旧関係より、本住居の時期は中期中葉(円筒上層e式期)と考えられる。

#### 第40号竪穴住居跡と出土遺物 (第118~122・401・403・428図)

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区南東部のE・F-20・21グリッドに位置する。IV層上面にて確認

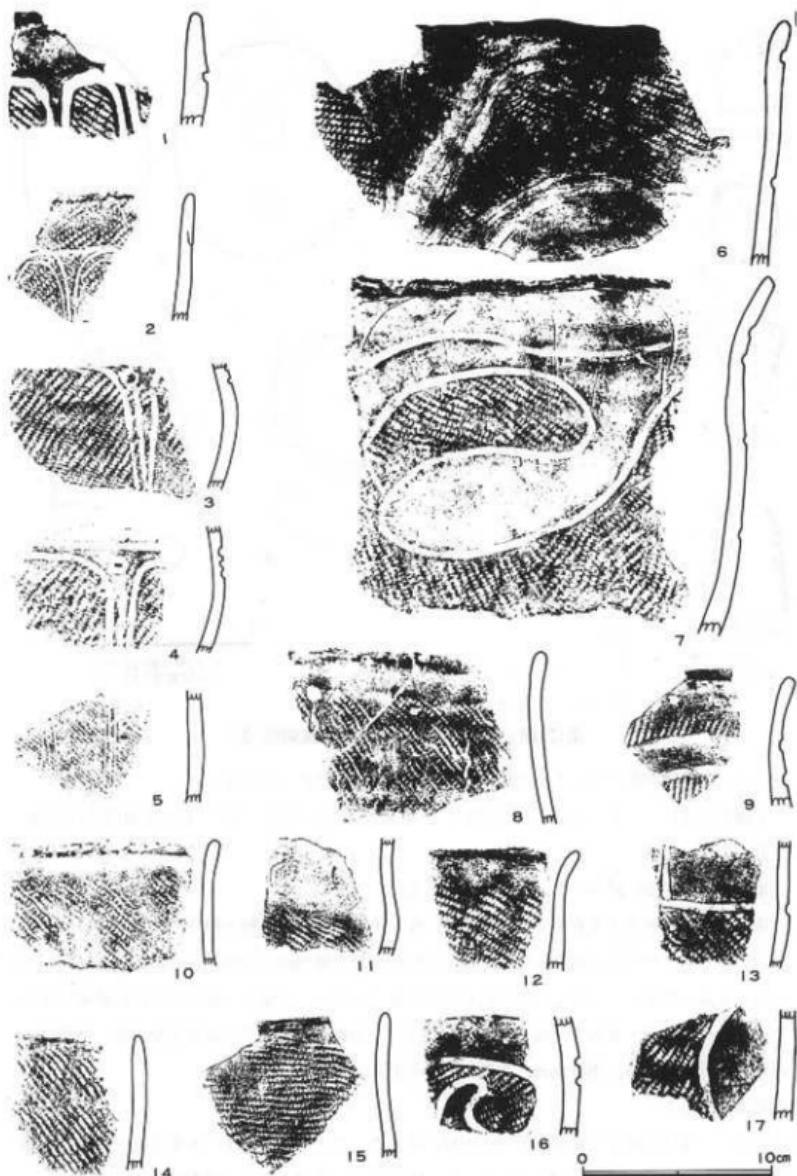


第118図 第40号竪穴住居跡実測図

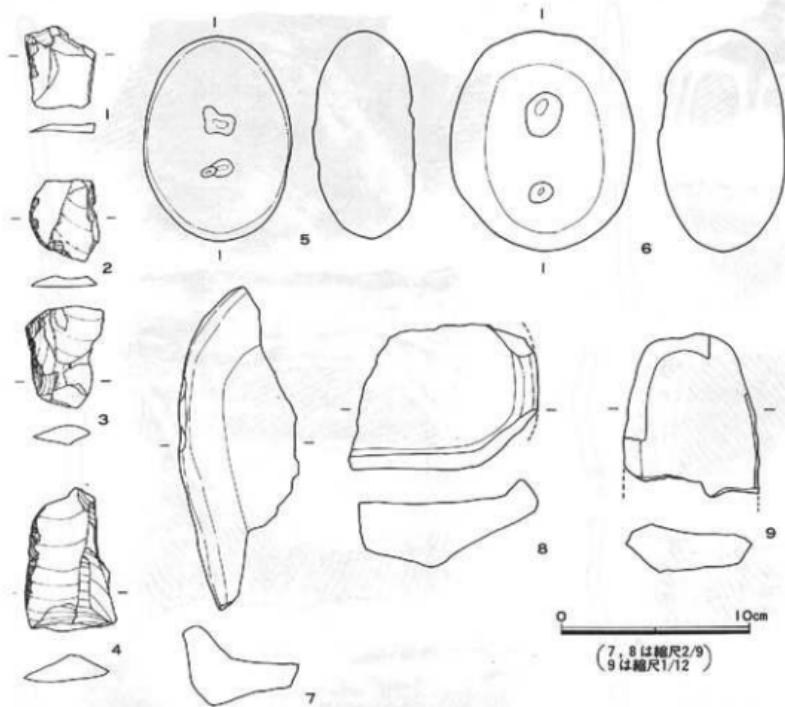


第119図 第40号住居跡火炉跡微細図

第120図 第40号住居跡出土石器実測図(1)



第121図 第40号住居跡出土土器拓影図



第122図 第40号住居跡出土石器実測図(2)

された。44号住居跡、27号土壤と重複し、本住居跡はいずれよりも新しい。

〈平面形・規模〉 4.85×4.66mの円形を呈する。主軸方向はN-80°-E、床面積は14.16m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 10層に区分でき、人為堆積である。

〈床面・壁〉 テラスを有する二段構造で、床・テラス面ともV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは南壁際に位置し、その規模は最大幅28cm、床面からの高さは8~10cmである。床面は若干レンズ状で、炉周辺が堅くしまりが強い。南壁の一部は44号住居跡覆土及びV層、他の壁はIV・V層より成る。南壁を除き、やや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は、東壁84cm、西壁79cm、南壁78cm、北壁62.5cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より14個のピットが検出された。このうちPit 1~6を主柱穴とし、主軸に対称なる3対6個(Pit 1・4, Pit 2・5, Pit 3・6)を基本とする柱配置と考えられる。

第40号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規模	26×25	20×20	26×25	19×18	30×17	13×13	14×13	17×14	27×15	11×11
深さ	39	22	25	43	52	13	12	7	36	17
Pit No.	11	12	13	14						
規模	15×16	13×13	20×15	16×14						
深さ	41	41	42	29						

〈炉〉 住居跡西壁に接する。石開部十掘り込み部から成る  $124 \times 95\text{cm}$  の規模の石圓複式炉である。石圓部は  $13 \sim 24\text{cm}$  大の自然石を  $63 \times 74\text{cm}$  の「U」形に配しているが、掘り込み部との境界に石の抜き取り痕が確認されたので、同規模の円形の配列であったものと思われる。石圓部内は、わずかながら焼土化している。掘り込み部は  $70 \times 95\text{cm}$  の方形で、床面からの深さは  $12.5\text{cm}$  である。この掘り込みの壁側には、さらに  $31 \times 46\text{cm}$  の規模で床面からの深さ  $24.0\text{cm}$  の、横に長い楕円形の落ち込みがある。この落ち込みの両側には 1 対のピットが対峙している。掘り込み部の一側線に、炉石の抜き取り痕と思われるピットが 3 個確認されたことから、掘り込み部まで石が配置され、全体として「H」形の炉石の配置であった可能性もある。

〈出土遺物〉 (第120~122図, 401図35・36, 403図17, 428図5・10)

床面より 10 数点の土器片と 3 点の石皿、床直より 20 数点の土器片と石匙 1 点を出土した。また覆土中より、1 個の完形土器、3 個の復元可能土器他 1-1/3 箱の土器片、12 点の石器(石鎌 2 点、石匙 2 点、石槍 1 点、搔器 3 点、磨製石斧 1 点、凹石 2 点)、1 点の磨製石製品、碗状石製品を出土した。

401 図35は住居中央覆土中位出土のほぼ完成に近い注口土器、386 図36は覆土中位出土の完形の朱塗の壺形土器、403 図17は住居中央覆土下位出土の復元可能の鉢形土器である。

121 図14は床面、3・13は床直の出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は中期後葉~末葉(大木 9~10 式併行期)と考えられる。

#### 第41号竪穴住居跡と出土遺物 (第123・124・422図)

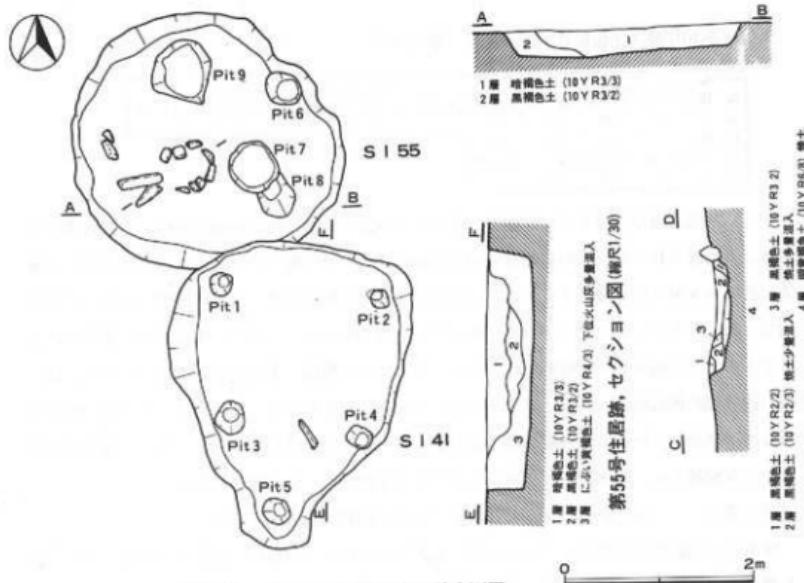
〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区南東部の G・H-23・24 グリッドに位置する。V 層上面での確認である。(攪乱の多い地点であるため V 層上面まで確認面を下げた。)

北壁の一部で 55 号住居跡と重複する。造構の重複関係からは新旧関係はつかめなかった。

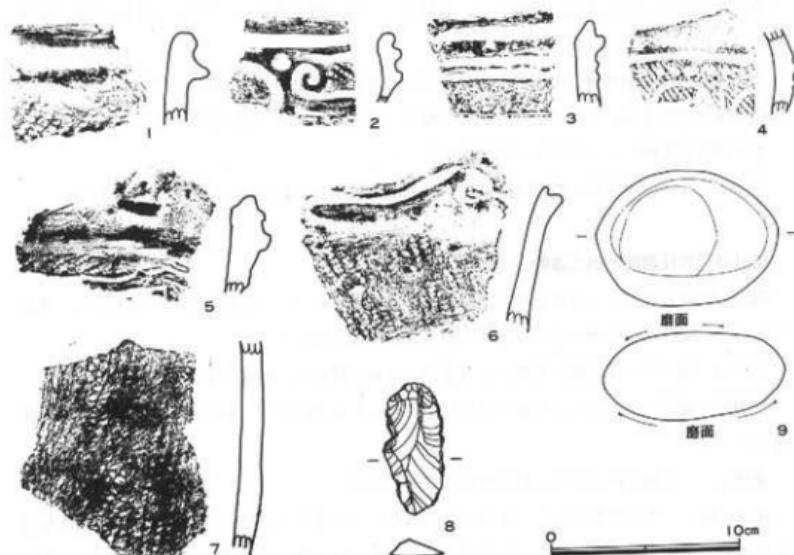
〈平面形・規模〉  $3.26 \times 2.42\text{m}$  の五角形である。主軸方向は N-10°-E、床面積は、 $4.56\text{m}^2$  を計る。

〈堆積土〉 3 層に区分でき、自然堆積と考えられる。

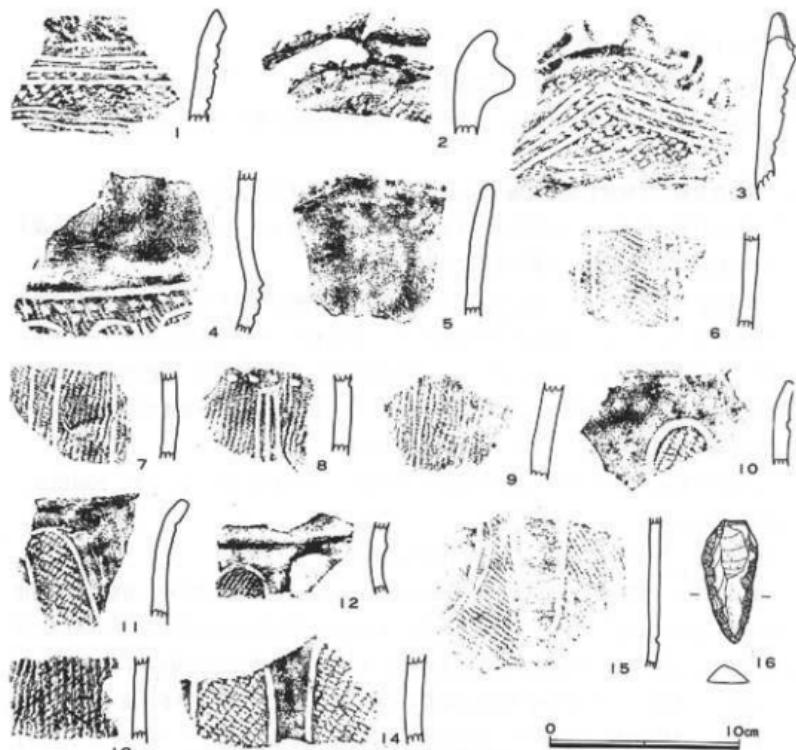
〈床面・壁〉 V 層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で、堅くしまりがある。壁は V 層から成り、ほぼ急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁  $41.0\text{cm}$ 、西壁  $41.5\text{cm}$ 、南壁  $46.3\text{cm}$ 、北壁



第123図 第41・55号竪穴住居跡実測図



第124図 第41号住居跡出土器拓影図・石器実測図



第125図 第55号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

44.1cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡より5個のピットが検出された。いずれも各コーナーに位置し、規模・深さもほぼ同一であること等から、これらの5個が主柱穴と考えられる。

第41号竪穴住居跡ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5
規 模	25×24	20×18	36×32	28×23	38×32
深 さ	56.8	52.2	57.5	50.0	31.8

〈炉〉 検出されなかった。

〈出土遺物〉 (第124図、422図1)

床面より数点の土器片、床直より数点の土器片と1点の磨石を出土、他に覆土中より20数点の土器片、1点の搔器とペンダントを出土した。これらの遺物は平面的には中央より東側に多

く分布する。

124 図 7 は床面、3 は床直上からの出土土器である。

出土土器より、本住居の時期は、中期後葉（大木 8 b 式併行期）と考えられる。

#### 第42A号竪穴住居跡と出土遺物（第126~132, 400, 401, 421, 422, 423, 427, 428図）

〈造構の位置と確認〉 A<sub>1</sub>区北東部の南方向への緩斜面 Z D ~ Z A - 20~22グリッドに位置する。北壁側はⅣ層、南壁側はⅢ層中位での確認である。

本住居跡は42B・64号住居跡、40・42~44・47~49号土壤と重複する。南壁側の壁及び床面がⅢ層よりもなるため、重複関係には困難を喫し、土層観察用ベルトを随所に設置、それを残しながら平行して調査を進めることとなった。最終的新旧関係は、掘り方、横断面図、柱列及び炉跡の位置、造存度より考察せざるを得なかった。本住居跡はこれらの重複する造構のうち、44号土壤より古く、他のいずれよりも新しいものと考えられる。

〈平面形・規模〉 16.60 × 8.74m の橢円形を呈する。主軸方向は N - 2° - W、床面積は、118.09m<sup>2</sup>を計る。

〈堆積土〉 14層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 本住居跡の北側半分はⅤ層、中央から若干南寄りまではⅣ層、南壁際はⅢ層中位を掘り込んで床面としている。Ⅳ層を床面とする周辺は若干しまりが弱いが、他は堅くしまりがある。北壁際から南壁際には緩やかな傾斜があり、さらに北側に若干の段差を有する。

〈周溝〉 西壁北側及び東壁中央部より幅15~20cm、深さ7~10cmの周溝が不連続に検出された。

〈柱穴〉 本住居跡より29個のピットが検出された。このうち Pit 1・2・4・6~9・10または11・12~16を主柱穴とし、主軸線上の Pit 2 と、軸線に対称な 7 対14個（Pit 1・4・6・18、7・16、8・15、9・14、10または11・13、12・（未検出））の計15個を基本とする柱配置と考えられる。また、Pit 6・18間に位置する Pit 19は、間仕切りを暗示させる副柱穴、西壁北側に対峙する 2 対 4 個（Pit 24・27、25・26）は、出入口に關連する柱穴と考えられる。

第42A号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規 模	60×40	86×60	34×30	30×30	82×48	66×51	48×40	46×40	51×50	50×40
深 さ	38.6	57.5	57.4	28.0	68.9	54.0		59.3		74.1
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規 模	50×48	44×36	50×47	22×20	57×56	38×37	82×48	42×38	42×38	60×60
深 さ	41.1	43.1	59.2		52.2	62.2	68.9	33.0	83.0	51.2
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
規 模	50×50	36×30	46×34	24×20	20×20	70×56	22×18	20×18	24×20	
深 さ	24.5	24.8	19.0	21.5	22.9	21.0	20.5	14.0	3.3	

〈炉〉 住居跡主軸線上南壁際位置する。半壊しているが、石圓部十掘り込み部から成る3.44 × (1.00) m の規模の石圓複式炉と考えられる。石圓部は、10~28cm 大の自然石を2.05 ×